

アガミザカ
辻遺跡と薊在家遺跡

—金川曾根地区広域営農団地農道整備事業に伴う発掘調査報告書—

1974

山梨県教育委員会

山梨県遺跡調査団

辻遺跡と薊在家遺跡

—金川曾根地区広域営農団地農道整備事業に伴う発掘調査報告書—

1974

山梨県教育委員会

山梨県遺跡調査団

発刊のことば

金川曾根地区広域畠農地農道整備事業の東八代横断大規模農道は甲府盆地東側一帯に広がる果樹・蔬菜・桑園地帯を横断し、農業を更に振興させるために新設又は拡幅する道路である。

この道路の通過予定町村には先土器時代から歴史時代に至る各時代の遺跡があり、極めて歴史的価値の高い地域である。

例えば一宮町には国指定史跡甲斐國分寺及び尼寺・御坂町には県指定史跡燒塚古墳・八代町には繩文前期の花鳥山遺跡・境川村には窯址・中道町には国指定史跡銚子塚古墳付丸山塚古墳などがあり、その地域の歴史を知るうえで欠かすことの出来ない多くの歴史的文化遺産がある。

このような開発と文化遺産の保護については調和が難しいが、やむを得ないものについては発掘調査して記録保存することとした。

最後に報告書の刊行にあたって、きびしい炎暑の中でご協力下さった調査団、地元教育委員会及び関係者、発掘調査参加者など多くの方々に深甚な敬意を表する次第である。

山梨県教育長

清水林邑

例　　言

- 1 本報告書は山梨県が行う金川曾根地区広域営農団地農道整備事業のうちの東八代横断大規模農道予定地内にあった遺物包含地を発掘調査した報告書である。
- 2 発掘調査は山梨県教育委員会が山梨県遺跡調査隊に依頼して行った。
- 3 編集　森　和敏（県文化課）・小野　正文（国学院大学学生）
実測　加藤　正治（早稲田大学大学院生）・沼本　芳喜（早稲田大学学生）
　　齊藤　裕嗣（早稲田大学学生）・小野　正文
室伏　徹（山梨大学学生）
- 4 執筆は野沢昌康・森和敏・萩原三雄・小野正文があたった。



社遺跡・薊在家遺跡（航空写真）

目 次

発刊のことば

例 言

第1章 はじめに 野沢昌康 (1)

第2章 遺跡の位置と環境 森 和敏 (2)

第3章 経 過 森 和敏 (5)

第4章 辻 遺 跡

第1節 室屋地区的遺構 森 和敏 (9)

第2節 辻地区的遺構 森 和敏 (10)

第3節 辻地区的出土土器 小野正文 (15)

第4節 出土石器 森 和敏 (39)

第5章 薊在家 遺 跡 萩原三雄

第1節 住居址 (41)

第2節 遺 物 (42)

第6章 森 和敏

第1節 西八代郡三珠町大塚上の原発掘調査報告 (46)

第2節 東八代郡八代町高家下道発掘調査報告 (46)

第3節 東八代郡御坂町大野寺向田発掘調査報告 (47)

第4節 結びに代えて (47)

挿図目次

第 1 図	昭和48年度金川曾根地区広域營農団地整備事業関係発掘調査地位図	3
第 2 図	遺跡地区設定図	5
第 3 図	調査区域辻道跡宝尾地区（A区）No.1	6
第 4 図	〃 No.2	6
第 5 図	〃 No.3	7
第 6 図	調査区域辻遺跡辻地区（B区）	7
第 7 図	薦在家遺跡（C区）	8
第 8 図	宝尾地区造構実測図（128グリッド～129グリッド内）	9
第 9 図	宝尾地区 128～129グリッド 井戸状遺構断面図	9
第 10 図	辻地区セクション図	10
第 11 図	辻地区造構実測図（80グリッド～94グリッド内）	11
第 12 図	辻地区エレベーション図	11
第 13 図	辻84グリッド 燐上を含む土括セクション図（C-C'）	11
第 14 図	辻地区造構実測図（23グリッド～30グリッド内）	12
第 15 図	辻27グリッド～28グリッド土括セクション図	12
第 16 図	辻地区造構実測図	13
第 17 図	辻34の2グリッドエレベーション図	13
第 18 図	辻地区造構実測図（113グリッド～127グリッド内）	14
第 19 図	辻116グリッド焼土を含む土括セクション図	14
第 20 図	辻127グリッド埋甕出土土括セクション図	15
第 21 図	出土土器拓影	17
第 22 図	〃	18
第 23 図	B地区87グリッド埋甕出土土器実測図	19
第 24 図	出土土器拓影	20
第 25 図	辻地区29の2グリッド出土土器実測図	21
第 26 図	出土土器拓影	22
第 27 図	〃	23
第 28 図	辻地区 127グリッド出土底部穿孔土器実測図	25
第 29 図	辻地区 34の2グリッド出土土器実測図	25
第 30 図	辻地区 126グリッド出土土器実測図	26

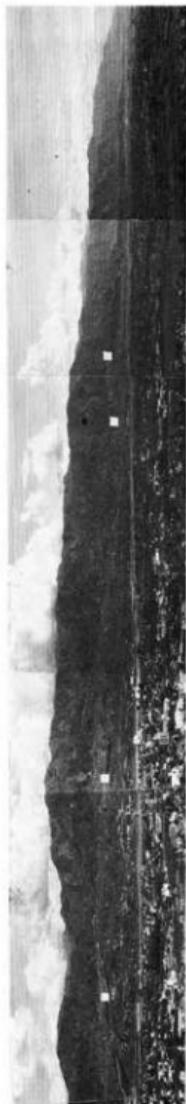
第 31 図	出土土器拓影.....	27
第 32 図	々	28
第 33 図	々	29
第 34 図	土器実測図.....	30
第 35 図	々	30
第 36 図	々	31
第 37 図	出土土器拓影.....	32
第 38 図	石器実測図.....	40
第 39 図	住居址実測図.....	41
第 40 図	住居址出土土器実測図.....	45

図 版 目 次

図版 1	辻遺跡、薊在家遺跡 全景	51
図版 2	1. 辻遺跡、薊在家遺跡 近景	53
	2. 辻遺跡 発掘状況	53
図版 3	1. 辻34の2グリッド土器出土状況	55
	2. 辻80グリッド～90グリッド土括出土状況	55
図版 4	1. 辻87グリッド土器出土状況	57
	2. 同上 近接	57
図版 5	1. 辻91グリッド上括	59
	2. 辻116グリッド～127グリッド土括及び壇堀出土状況	59
図版 6	1. 辻116グリッド上括	61
	2. 辻126グリッド土器出土状況	61
図版 7	1. 辻27.29グリッド土括	63
	2. 辻34の2グリッド土括	63
図版 8	1. 辻6グリッド土括	65
	2. 辻23グリッド土器出土状況	65
図版 9	1. 辻128グリッド井戸状遺構	67
	2. 同村藤堂 山寺所有	67
図版 10	辻遺跡出土土器	69
図版 11	タ	71
図版 12	タ	73
図版 13	タ	75
図版 14	タ	77
図版 15	タ	79
図版 16	タ	81
図版 17	タ	83
図版 18	タ	85
図版 19	タ	87
図版 20	タ	89
図版 21	辻遺跡出土石器	91
図版 22	1. 薊在家遺跡住居址	93
	2. 同住居址土器出土状況	93
図版 23	薊在家遺跡住居址出土土器	95

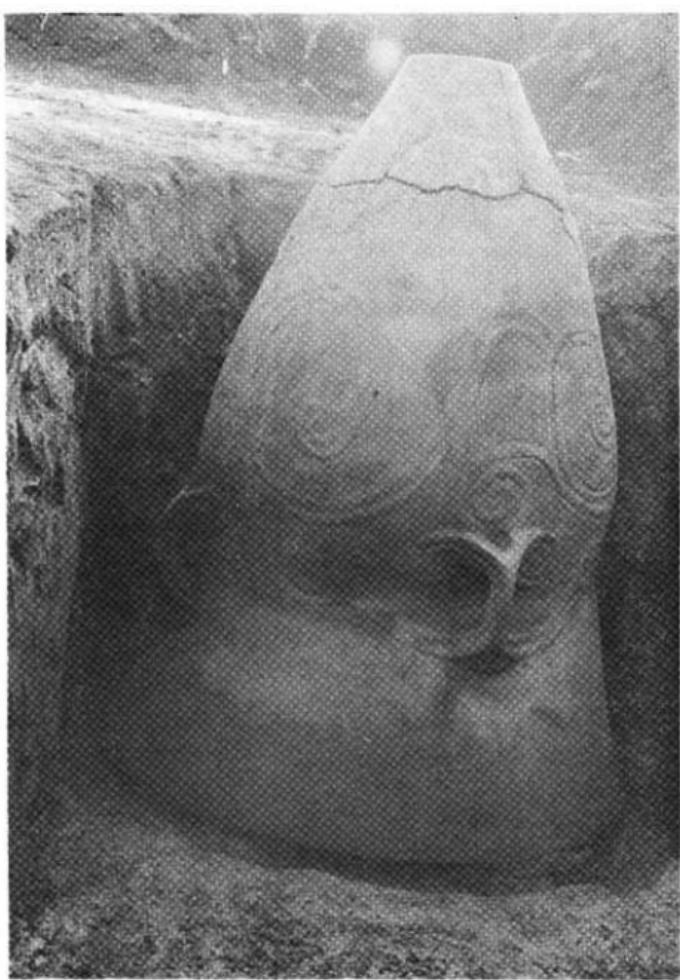
金川曾根地区広域營農団地農道昭和48年度発掘調査遠景

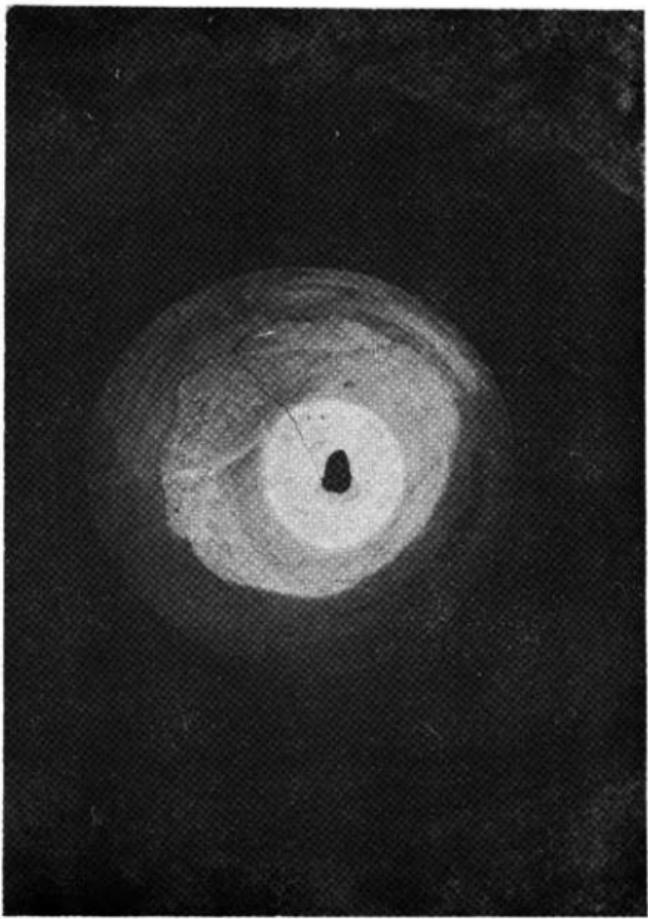
境
川村
江
連
勝
・
境
川村
江
連
勝
・
八
代
町
道
・
御
坂
町
田
・
一
宮
町
国
分
二
号
塙
・



石和町大歳寺山中所立地北東隅より金川勝連地、凌川町状地、曾根丘陵を中心

(第八代土地改良事務所広域農業調査撮影)





第1章 はじめに

本報告書で扱う発掘調査地は4カ所である。

1. 辻遺跡と薔在家遺跡……縄文時代中期の遺構及び遺物等と、古墳時代鬼高式の遺構及び遺物
2. 三珠町大塚上の原……遺構及び遺物なし
3. 八代町高家下道……遺構及び遺物なし
4. 御坂町大野寺向山……遺構及び遺物なし

以上4カ所の内、辻遺跡と薔在家遺跡が報告内容のほとんどを占めるのであるが、この4カ所は、甲府盆地東部に連なる曾根丘陵及び浅川扇状地等に所在する。

甲府盆地東部は曾根丘陵・諸扇状地・山岳から成り、遺跡は各地に多くあり、山峠深くまで入り込んでいて、先土器時代から現代まで余すところなく全ての時代の遺跡、遺物等を網羅している。これ等は山梨県遺跡地名表をはじめ、多くの調査報告書・町村誌(史)等に掲載されている。

この地方は土地が非常に肥沃で、水も多量にあって、自然環境が良いため他に比較して遺跡が多いのであろう。

本県では先史時代の遺跡は三地域に大別できよう。甲府盆地東部・八ヶ岳山麓及び柱川流域などの都留・富士吉田地方(郡内)である。

曾根丘陵及びその付近で発掘された遺跡に先土器時代から上部時代までの米倉山遺跡・前期縄文式土器を多量に出土する花鳥山遺跡・中期縄文式土器を出土する中道町上の原遺跡・弥生時代の土器片が散布する中道町西原遺跡・国指定史跡鶴子塚古墳をはじめとする多くの古墳である。

本遺跡の範囲については「第2章遺跡の位置と環境」で述べるので省略するが、両遺跡とも同じ台地上にあって境を接しており、弥生式土器の山上もあったと伝えられている。

この両遺跡の東(上)方と下(西)方には縄文式土器と上部器の散布地があり遺跡が点在している。

この丘陵台地の南側には中期縄文式土器を中心とする寺尾遺跡が、北側には京原遺跡が存在する。

辻遺跡・薔在家遺跡の両方とも、遺構は深耕によって甚しく破壊されており、遺構の前後関係は判明しなかったが、遺物については、縄文式土器の中には、この地方では異質なものが多く混入し、文化圏の研究には問題を提起することが出来よう。

(野沢昌康)

第2章 遺跡の位置と環境

本遺跡は曾根丘陵上に位置する。曾根丘陵は甲府盆地の南側から東側に連なる。御坂山系の山麓に発達した舌状台地で形成され、その多くはベンチ形を呈する。丘陵の先端では急峻に落ち甲府盆地底部となり、笛吹川に近く。この曾根丘陵は10km連続し、殆んど全面に遺跡がある。表面探査によると旧石器から縄文・弥生・土師式土器や須恵器が散布していて、多くは農耕により破壊が進んでいる。

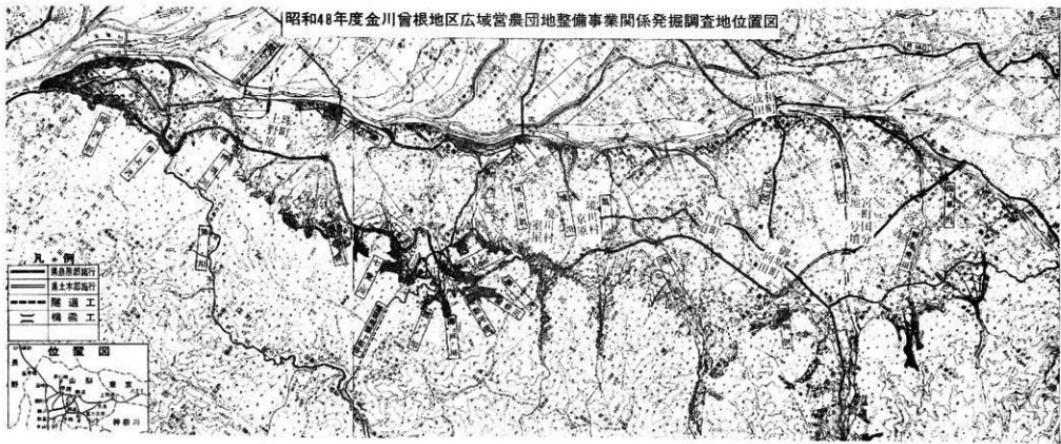
本遺跡もこの中にあって、北に坊ヶ峰を見て、これを越して甲府盆地へと続き、南と東側には御坂山系が連なっている。本遺跡の立地する丘陵と坊ヶ峰との間には深い谷がありここからは湧水がある。甲府盆地の眺望はあまり良いとはいえないが辻地区では坊ヶ峰で冬の寒風が過ぎられて比較的生活しやすい地形になっている。発掘中もこの点では大変恵まれた場所であったのだが。

又前在家遺跡は同じ丘陵上の南面する塙城にあってやはり快適な生活が営めるところであったであろう。

本遺跡の範囲については辻地区にあっては縄文時代の集落跡は藤垈の部落内に延び又北側の桑園の方向にも100mほど延びている。部落内の範囲を調査することは困難であったが、住民の話などを総合して推測すると200m×200mくらいの地域になりそうである。又前在家遺跡もやはりこの丘陵の南斜面に範囲は不明だが散在しているようである。

(森 和敏)

所在地 東八代郡境川村藤垈



第1図

第3章 経 過



第2図 遺跡地区設定図

発掘調査開始までの経過を最初に記すこととする。

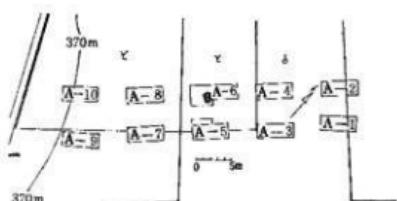
昭和48年度内に本県で行なわれた埋蔵文化財緊急発掘調査は12件であり、その大部分が道路の新設又は拡幅工事によるものであった。山梨県教育委員会が委嘱した山梨県遺跡調査団幹事会では、昭和48年度に山梨県教育委員会が行う埋蔵文化財緊急発掘調査について打合せを行う

ため数回会議を行った。その結果、調査時期が遅れたが、境川村辻・割在家遺跡については野沢昌彦を発掘担当者としてこれを行うことに決定した。その後地元境川村教育委員会と調査に関する準備会を開いたり、又山梨県遺跡調査所幹事折井忠義・早川力明・萩原三雄・田代孝・手塚寿夫等と現地で予備調査を行った。昭和47年11月28日に行った予備調査では境川村藤塙地区内にかかる大規模農道予定路線内を踏査し、遺物の散布状況を図面に落とした。この調査では辻地区の農道南側には十三苦提式土器、藤内式土器、長道の北側には曾利式土器片が少量、室屋地区には少量の藤内式土器破片が、又割在家遺跡には少量の土師器・須恵器破片が見られた。これは造構が農耕によって破壊され、遺物が地表に浮き出たためと思われる。

次に発掘調査の経過を記す。

昭和48年1月14日現地で県教育庁関係者を始め、県遺跡調査課、地元境川村教育委員会の各関係者や発掘調査参加者等約30名で報入式を行った。引続いて室屋A区にトレントを設定し発掘を開始した。

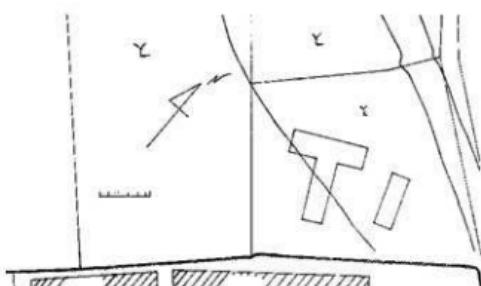
室屋地区（A区）は造構、遺物共に少なく1月20日にはほぼ発掘が完了した。



第3図 調査区域辻遺跡室屋地区（A区）No. 1

辻地区（B区）はグリッドを設定し1月18日に始めて、1月24日から2月14日まで土地買収が進捗しなかったため発掘を休み、再度2月15日に開始、2月24日には終了した。ここは绳文時代中期の遺構遺物が多く、少量の绳文時代前期の遺物も出土した。

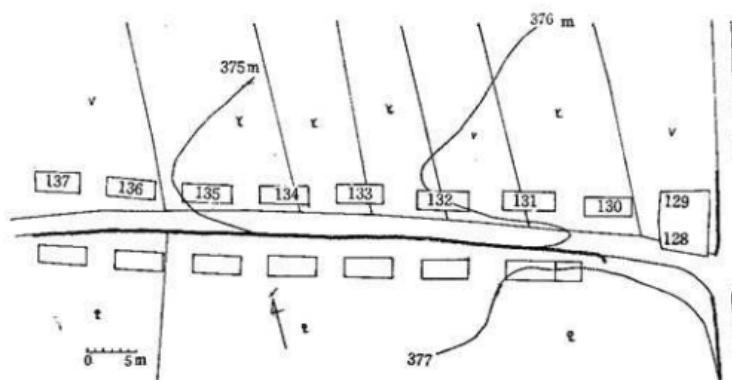
割在家遺跡（C区）は2月26日に始め3月1日にはほぼ完了した。ここは古墳時代後期の住居址及び遺物が出土した。この地区は予備調査では少量の土器と須恵器が散布していたが、特に発掘が必要ではないと認め、道路工事中にもし発見された場合には緊急に発掘することとなっていた。はからずも土砂を掘削中焼土を発見したので、急拠発掘調査を行ったもので



第4図 調査区域辻遺跡室屋地区（A区）No. 2

ある。

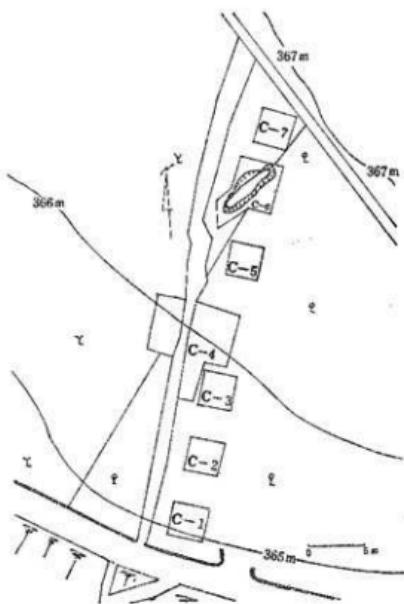
(森 和 敷)



第5図 調査区域辻道跡密生地区（A区）No. 3



第6図 調査区域における跡地地区（B区）



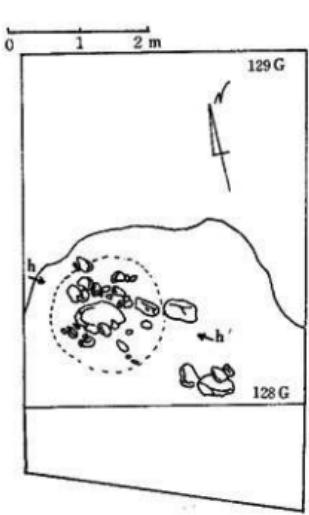
第7図 薙在家遺跡（C区）

第4章 辻 遺 跡

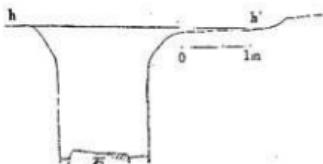
第1節 室屋地区の遺構

室屋地区（A区）は藤塙部落の西側と北側の2カ所に更に分けられる。

西側では中期縄文式土器破片を伴う土坑（第3図）が1カ所と遺物を伴わない土坑が2カ所あった。いずれもセクションを観察したところ後世のものではないようである。他に中期縄文式土器破片が5・6片集中して出土したが遺構はなかった。この遺跡は恐らく東に広がるものと思われ、藤塙部落内で家屋の建築中縄文・弥生・土師器が多数発見されている。



第8図 室屋地区遺構実測図
(128グリッド～129グリッド内)



第9図 室屋地区 128～129グリッド
井戸状遺構断面図

室屋地区的他の1カ所（藤塙部落の北側）では、事前調査で農道の南側に少量の縄文式土器が散在していたのであるが試掘の結果では石積のある溝状の遺構があつただけであった。この石列は高さ10cm程度のもので長さ10mであったが遺物を伴わなかつたので時代決定は出来なかつた。農道の北側はグリッド方式で試掘したのであるが遺構も遺物もなく、後世のものと思われる井戸状の遺構があつただけである。

この井戸状の遺構は農道の四ツ辻に接近しており、この付近を通称「辻」とこの地域の住民は呼ぶしている。この遺構のあつた場所には六地蔵（図版10の2）があつたが明治後期に軽妙にある寺に移動したとのことであった。

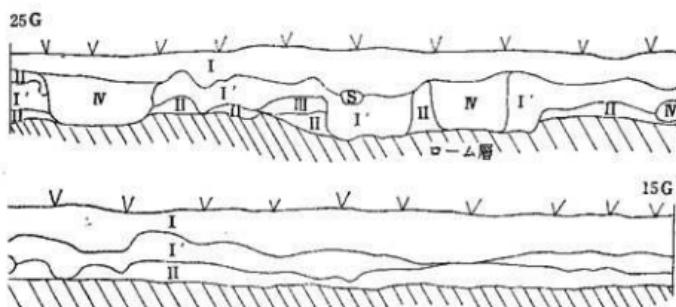
この場所には発掘以前には大小多数の石が乱雑に積んでおり表土を取り除いた時点で落込みが確認された（第8図、第9図）。この落込みを掘り進んだところ直径約120cmの穴となり、穴の周囲には特に石垣も

なく素掘りであった。穴の壁は硬いローム層であるので非常に堅固であった。この穴について藤井部長の長寿者数名から聞き取り調査をしたが何も得られなかつた。穴の壁にはエンビ状の道具で削り取ったような痕跡が周囲にあり、中の土は黒色を帯び軟弱であった。約5m掘り進んだが巨石があり、レンガでは吊り上げることが困難になったので中止したが、ボーリングをしてみたところ更に1m以上深くなることが判明した。

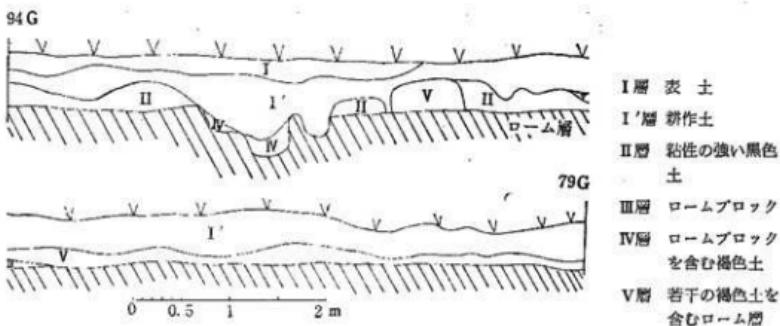
穴から出土した遺物はなかったが骨粉が約4mの深さから出土した。(森 和 敏)

第2節 辻地区の遺構

辻地区は遺構、遺物共に最も多かった場所である。しかし結果的には柱穴と思われるピット

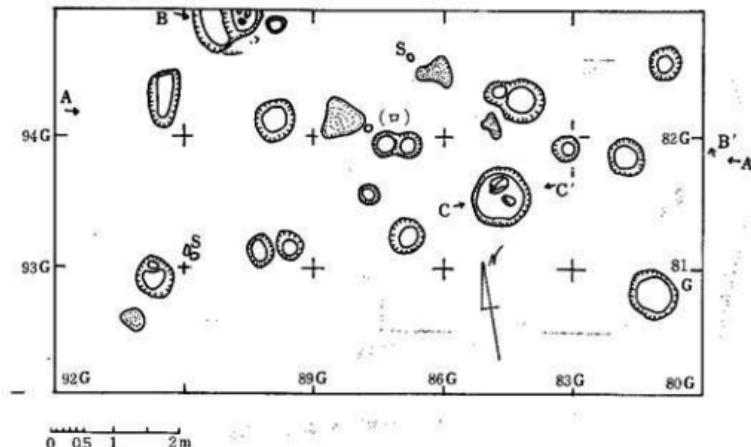


(辻地区25グリッド～15グリッド南壁セクション図)

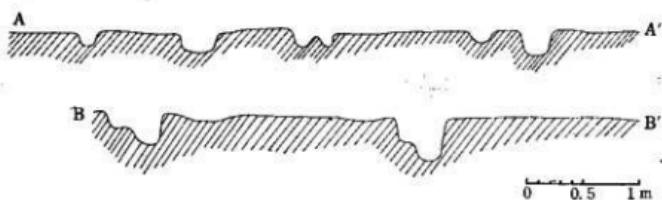


(辻地区94グリッド～79グリッド北壁セクション図)

第10図 辻地区セクション図



第11図 辻地区遺構実測図 (80グリッド～94グリッド内)



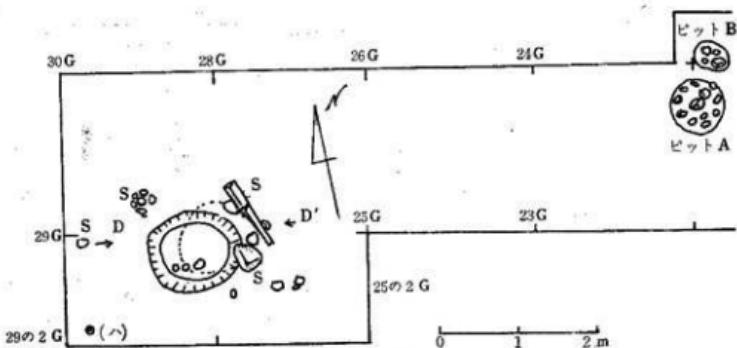
第12図 辻地区エレベーション図



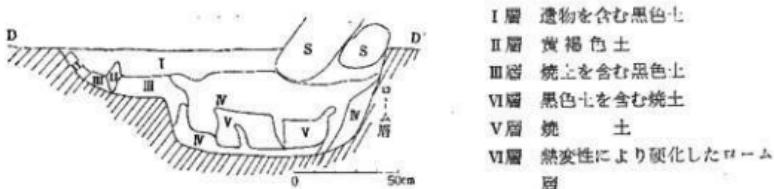
第13図 辻84グリッド 焼土を含む土壌セクション図 (C-C')

だけが発見され、床面は農耕によって破壊されていたので、住居址は検出出来なかった。

まず農道の北側にあったピット群(第11図)について記述しよう。ピットはここに特に多く集中しており、他にはほとんど見られなかった。地表からピットが確認出来るまでの耕作土の厚さは20 cm～30 cmで、この地方では珍らしく浅い。これはここが古い桑園であったため野菜作りによる深耕がなかったためであったが、ピットは黒褐色土層中にあったので非常に見出し難かった。



第14図 辻地区遺構実測図 (23グリッド～30グリッド内)



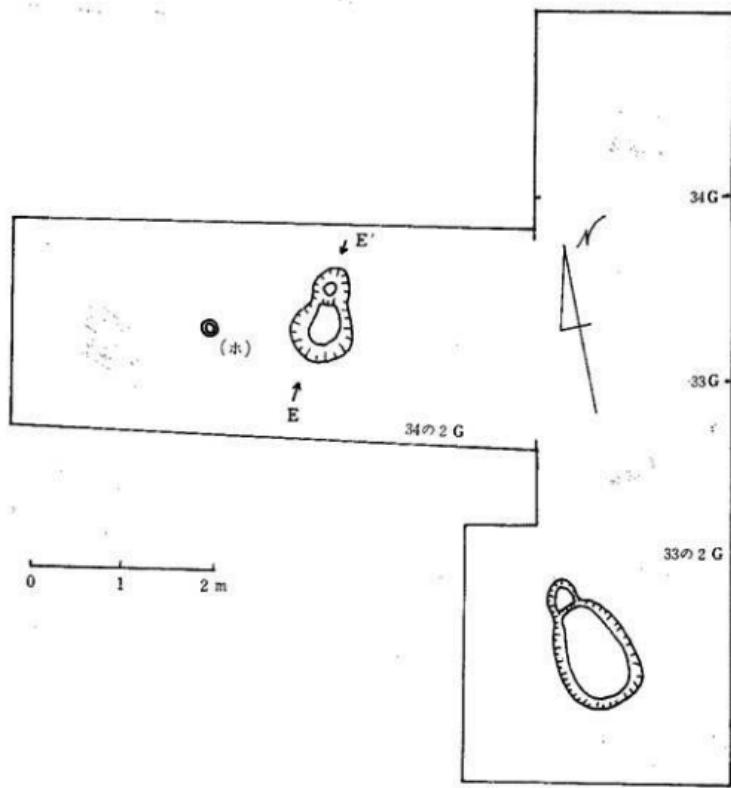
第15図 辻27グリッド～28グリッド土壌セクション図

た。ピットは柱穴及び貯蔵穴と思われ。これに伴う床面は耕作によって破壊され全くなかったが、既に使用したと思われる焼石が数個散乱しており、焼土が4カ所あり、壺2個体、及び土器破片と石器等が発見された。壺蓋の(印)は上部(口縁部)の10cmくらいが削り取られていた。第14図の範囲内でもやはり他の遺物は耕作土の中から散乱して出土した。

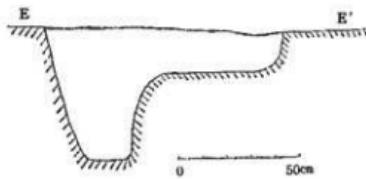
ピットは有段のもの4カ所と、底に石が置いてあるもの1カ所があった。

住居址の推定復元は発掘中の観察からも断面上にも困難であるが、曾利式土器を伴う中期後葉に属するものが数軒あったようである。

次に農道南側は、この遺跡より平均50cmくらい高くなってしまっており、表土も厚く、遺物の散布も濃厚であったが、野菜作りによって深耕されていてやはり遺構は少なかった。わずかに第14図のように25～29グリッドに数個の焼けた石と多量の焼土が発見された所と、土壌が2カ所(第16図)あっただけである。焼石と焼土の部分は恐らく炉址であろうと思われるが、床面・



第16図 辻地区遺構実測図 (33グリッド～34の2グリッド)

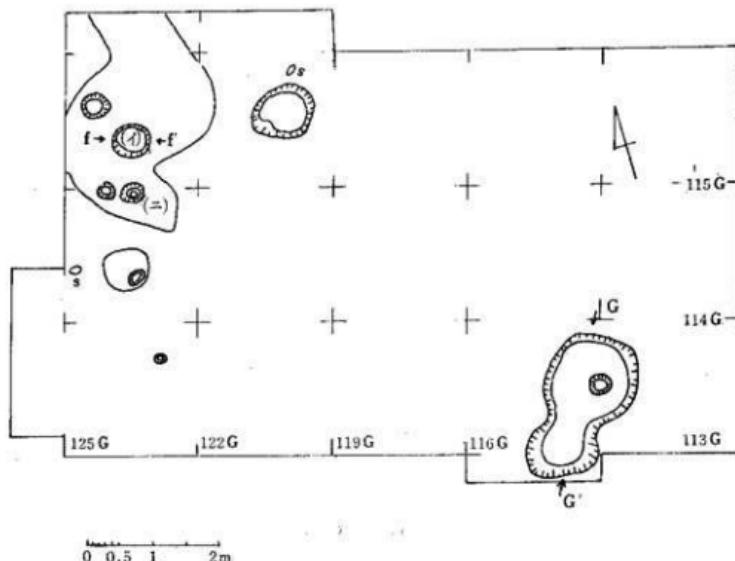


第17図 辻34の2グリッドエレベーション図

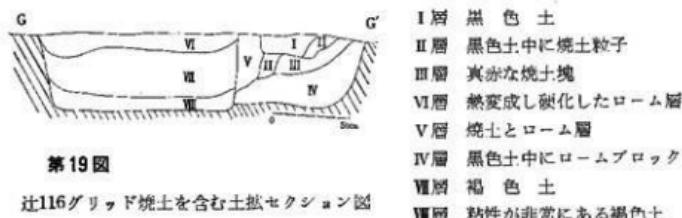
穴柱とも搅乱されており不明であった。

2カ所のピットのうち1カ所には縄文中期の土器片が含まれていた。他のピットについてはこの時代に属すると思われるが遺物がなかった。

遺物は半腰の縄文式土器が1個体と破片が多い量にあった。ピット群のある第11図に隣接した地点だが縄文前期末葉と中期前半の土器



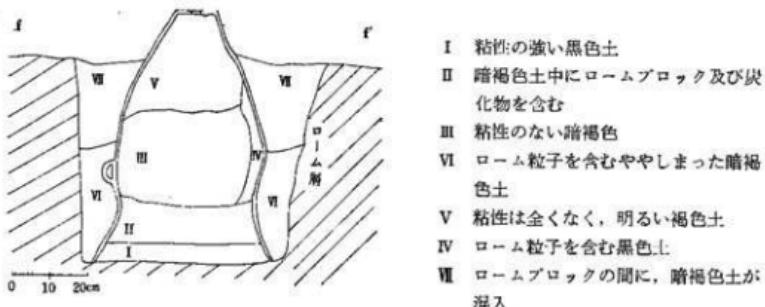
第18図 辻地区遺構実測図(113グリッド～127グリッド内)



第19図
辻116グリッド焼土を含む土壌セクション図

片が多かった。やはりここも土器片は全部耕作土から出土したものである。なおこの継ぎの畑からは多量の土器を農耕中数回にわたって発見し、焼土もあったとのことであった(地主の話)。

農道北側で検出した他の1つのピット群(第18図)ではやはり表土が薄く農耕による破壊が激しく柱穴と貯蔵穴らしいピットと床面の一部及び半腰の埋甕1個体が出土した。住居址は確かに床面と思われる部分と柱穴が3ヵ所と貯蔵穴1ヵ所があったが西半分は農道になっておりプランは確認出来なかった。床面は北側に一部続いていたが路線外になるので発掘出来なかった。



第20図 辻127グリッド渾脱出土拡セクション図

出土遺物は半礫の曾利式に比定される埋甕(?) (第18図) を発見した。

前述した柱居址の床面を掘り下ろしたところ偶然に底部穿孔上器(?)を発見した。

第20図は倒立して埋められていた柱居址のあった土塗の断面図であるが、床面の下にあったため落込みが発見出来なかつたので上部の床面の厚さは削り取ってしまったためセクションが確認出来ない。土塗の壁は硬いローム層であり、土器の口縁はこのローム層に密着しておりほぼ完全な器形をしていた。

土器の中には土が充填しており、他には骨らしいものも遺物もなかった。曾根丘陵は上部がローム層で覆われているので普通有機質は残らない。土器の中の土は非常に軟弱で土層セクションはほとんど識別出来ない状態であったが、念のため特にセクションを取ってみた。

辻地区の造構はほぼ以上のようなであるがこの他の敷き所の焼土と土塗らしいものもあったことを付記しておく。

(森 和 敏)

第3節 辻地区の出土土器

繩文式土器の出土状況については、第1節、第2節で述べてきたところである。本章では、土器について記述するのであるが、特に破片が小さく、器形全体にわたる推察が困難なため、その文様に従い分類したいと思う。

第1群 土器

細い粘土紐を貼付するもので、前期終末に属するものと思われる。以下A～D類にわけて説明しよう。

A類 (第21図 1～16)

これらの土器は繩文地に結節状浮隆文を貼付するものをいう。

1は褐色を呈し、雲母を含むものであり、口縁部の内外から粘土縫を貼付している。そのため口唇部底上から見れば、口唇部に二条の縫を引いたかのようである。浮縫文上の爪形文は、殆んど粘土縫と平行するような角度で施文したために凹凸が非常に少くない。2はやはり1と同様な角度で浮縫文の上に爪形文を施文するのであるが、半截竹管様工具の材質が異なるためか、明瞭な半截竹管の内面のスジ状の痕跡を残している。雲母は含まず、胎土・焼成ともに良好な土器である。3～6は浮縫文上の爪形文の角度が直角に近い角度で施文されている。11は結節状浮縫文間に1cm程の粘土縫を交互に貼付し、波状の貼付文をなしている。7～10・13の土器は他の浮縫文上の爪形文より間隔が短であり、謙譲C式のそれと類似する。12は連結した羽状縫文上に結節状浮縫文を貼付したものであり、焼成のやや不良な土器である。14は謙譲式に見られるような結節状沈縫文で区画した中に罫文を施文している。15・16はいわゆる窓切浮縫文である。15は同時に爪形文も併用している。花鳥山出土の國學院大學所蔵資料中に類例がある。

B類（第21図 17～19）

これらの上器は無文地に結節状が浮縫文を施文するものである。17は底部近くの破片である。このような曲線的な張りは謙譲C式にも五個ヶ台式にも、あまり見られないものであり、この帝期の一つの特徴であろう。18は口縁部の内外面に結節状浮縫文を施文するもので、内面に文様の段を有している。このような特異な文様帶は前期終末によく見られる。19と11はほとんど大差ないものであるが、内面に一つの縫を持つことは注目してよいと思う。

C類（第21図 20～23）

細文地にソーメン状の浮縫文を貼付したものを一括した。20は内面に二つの縫をもち、口唇部はA類と同様に内外面から粘土縫を貼付するものであるが、口唇部を平坦化するところが、A類の結節状浮縫文と口唇部との関係と比較した場合に、一つの相違点として注目される。21も同様である。22は口辺部破片である。一条の結節状浮縫文下にソーメン状浮縫文を波状に施こし、一部にソーメン状浮縫文で幾形に区画した中を更に格子目にソーメン状浮縫文を貼付している。23はやや広いソーメン状浮縫文を貼付している。

D類（第21図 24）

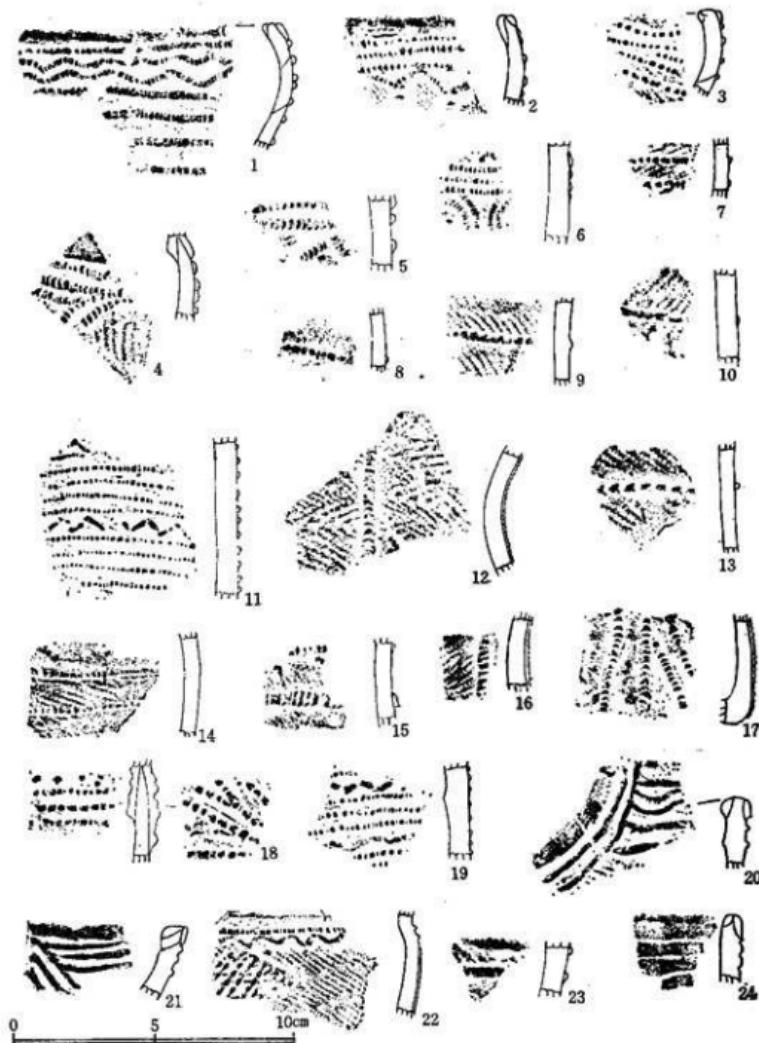
ただ一片ではあるが、無文地にやや広い扁平な浮縫文を貼付したもので、口唇部はやはり内外面から縫上縫を貼付しており、口唇部上面に一条の沈縫をめぐらかしたかのようである。

第2群 土器

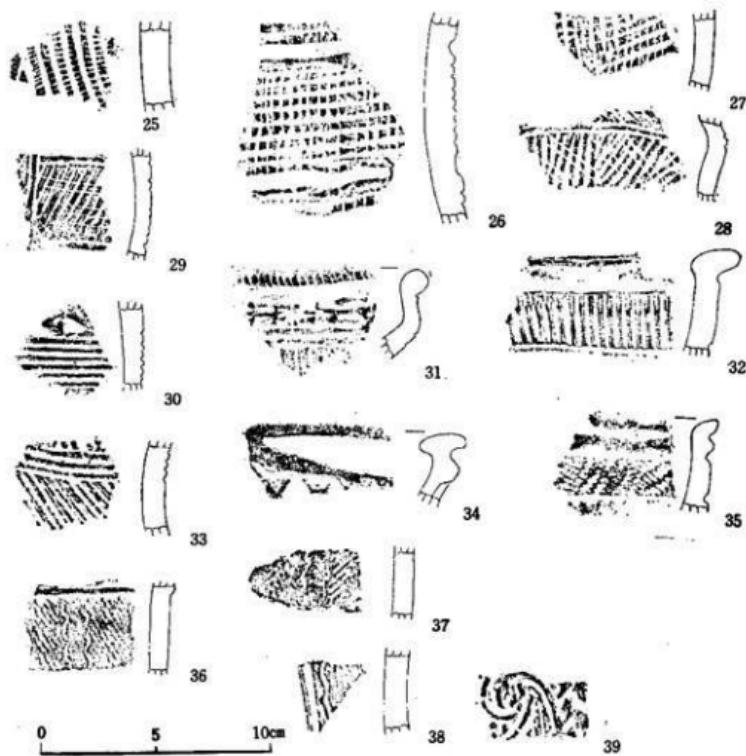
これらの土器は格子目状の沈縫をもつものと、それと類似するものを一括した。

A類（第22図 25～29）

平行沈縫を有するものをいう。25は半截竹管様の工具で平行沈縫を数条引き、その間をヘラ様の刻目を施すものである。平行沈縫間はやや広く、断面は台形を示す。またいわゆるメンコ



第21圖 出土土器拓影



第22図 出土土器拓影

製品として再使用された痕跡ももつ。26~29は集合した平行沈線に斜め(27・28)または直角(26)に平行沈線を加えるものであり、結節状浮雕文・箇切状浮雕文から25の例を経て26・28・29への一連の変化は容易に推定出来よう。また浮雕文から平行沈線文への変化としてもとらえることができようかと思う。

B類(第22図 30・34)

三角輪刻文をもつものをいう。

30は三角輪刻文の下部に平行沈線を施したものである。34は口縁部に深い沈線を施し、口縁部はレール状を示す。

C類 (第22図 31・32・33・35)

やや胎厚した口唇を有するものを一括した。

31は口唇部に連続爪形文を施し、その下を半裁竹管様工具で左右両方向から施文し、擦点部を盛り上げるようにしている。32は口唇部が軒先状に張り出した独特の口縁をもっている。33は平行沈線文土器であるが、非常に平行沈線が乱雑である。35は32と類似する口縁部をもつが、平行沈線ではなく網文を施している。

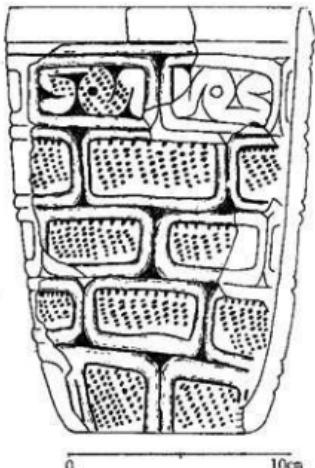
D類 (第22図 36~38)

これらは、特異な網文原体をもつ土器である。

36は破片上部にカマボコ状断面をもつ平行沈線を引き、その直下を三角スケールの一端で刺突するが如き三角沈刻文を施している。それ以下は同一方向の捺りの半節の網文を連結したものとの両端を結んだ原体を回転施文したため、帯状の網文帶は37のように羽状網文とはならず、連結ある斜網文となり、両端はS字状の連鎖となる。37は36と同様な原体であるが、網文の捺りの方向が異ったものを連結したために、明瞭な羽状網文となっている。38は網文を施した端を丸棒状工具で波状に沈線を引いている。

E類 (第22図 39)

39については断面カマボコ状の平行沈線を曲線的に用いている。所属については不明であるが一応木群に挿入した。



第23図 B地区87グリッド
埋蔵出土遺構出土土器火焔圖

第3群 土器

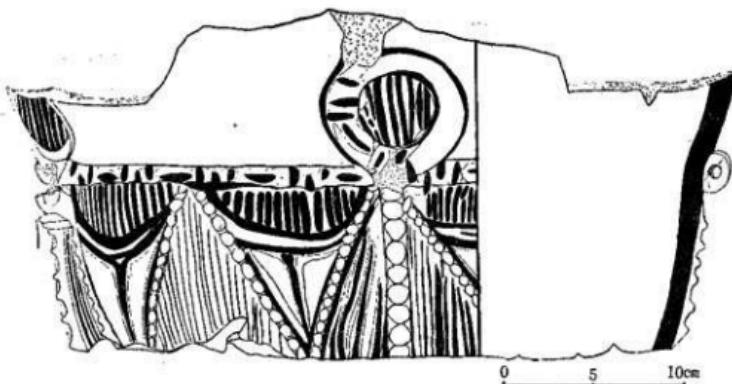
本群は網文時代中期前半に属すると思われる土器を一括した。

A類 (第23図・第24図 40)

本類は三叉文状の文様をもつものをいう。第23図の実測図の土器は横位の矩形の文様帶を5段もち、口縁部に平行沈線をめぐらし、その下の第1段の横帶文は、その矩形の中をS字とその半転した文様を三角陰刻を組み合わせることによって、生出させている。それ以下の5段から2段までの横帶矩形区画文は、それぞれの矩形の部分だけづつ移動して施文されている。また4段から2段までの矩形横帶文の上辺には、三角スケールの一端で刺突したような三角状の陰刻を有する。またすべての矩形横帶文に網文が施文されるが、第5段のものは部分的である。40の土器はいわゆる玉抱き三叉文を有する。第5段の文様帶を玉抱き三叉文とも考えられようか。



第24図 山土土器拓影



第25図 江地区 29 の 2 グリッド出土土器穴削図 (ハ)

B類 (第24図 41~47・49・50)

いわゆる竪状工具による押引文をもつ土器と半截竹管を用いるものとを一括した。これらの土器には先端が三角形をしたものと、先端が炬形のものとがある。それ respective a種・b種とする。

a種 (41・42・43)

41は先端三角形のいわゆるベン先状工具ですべてを押引している。43も同一個体と思われる。雲母を多量に含んだ異色の土器である。これらの土器の隆帯は断面三角形である。43はB種の工具をも併用している。赤褐色の土器である。

b種 (44~46・49)

これらの中には45・49のようにa種の工具をも併用しているものもある。

c種 (47・50)

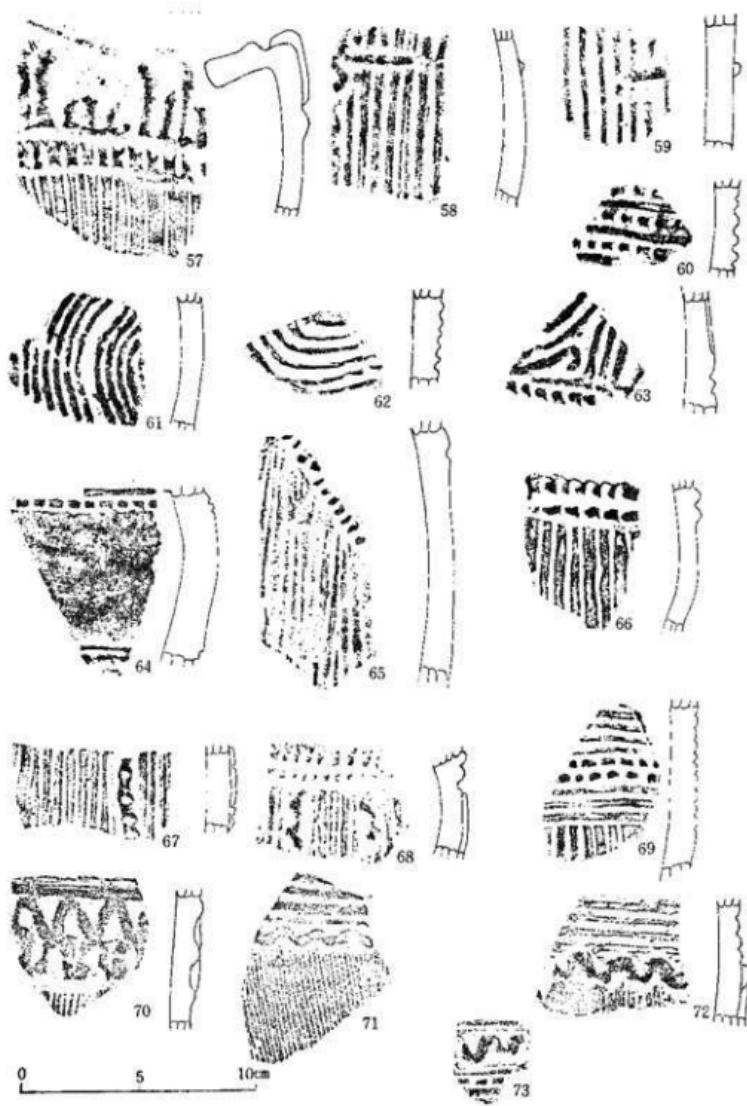
この二片は半截竹管を用いるものである。47は半截竹管の内側を使用したものであり、腹内1式の口辺部であろう。50は半截竹管の外側を用いて連続的に刺突したものであり、文様は矩形をなしている。恐らく貉沢式に比定されるべきものであろうが、今後の研究を要するものである。

C類 (第24図 48・51・53)

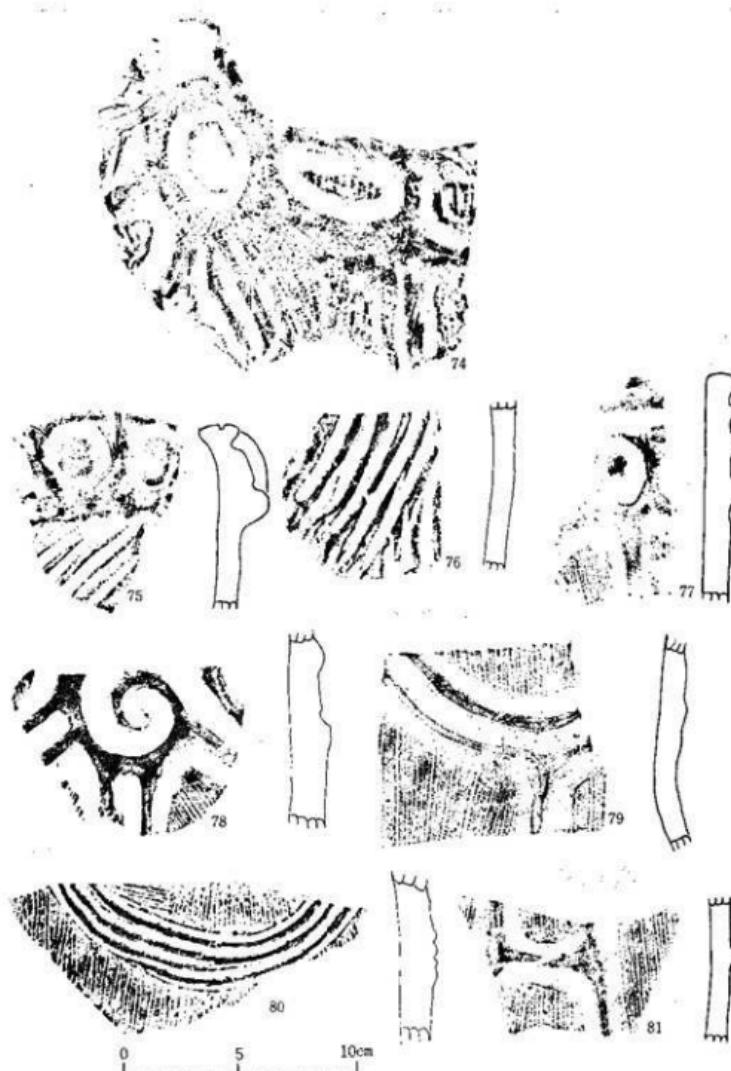
三角形の区画のあるものをいう。これらは腹内1式によく見られる構図である。

D類 (第24図 54・第25図)

Y字形の沈線を有するものをいう。54はY字形の沈線と綾糸状の沈線をもつ隆帯を有する土器である。恐らく井戸尻期の所産であろう。第25図の土器は口辺部は欠損し、胴部は粘土の接合面で接続されている。口辺部に平滑な隆帯を円形に施し、そのまわりを浅い沈線でかこみ、



第26図 出土土器拓影



第27図 出土土器拓影

隆帯上を一部交互に刻むことにより、コの字文をなしている。口辺部と胴部の焼い日に隆帯をめぐらし、その上に種々の刻目を施している。胴部は母指状の工具で押捺した隆帯をもって三角形の区画をなし、三角形の区画の中をいわゆる櫛形文を沈線で施し、その下を沈線によりY字形をなしている。これは逆三角形に区画された部分に施す文様構図であるが、他の三角形の部分はやや広い沈線の条線を施している。このような条線と平扁な隆帯から考え井戸尻Ⅲ式に比定したい。

E類（第24図 52・55・56）

その他上記の分類法にはあてはまらないものを一括した。

52は半裁竹管で整形した半隆起帯で文様構成をしたものである。56は半裁竹管を器面に交互に押捺するものであり、五領ヶ台式に見られる連續コの字文と近似する手法である。

第4 群土器

本群土器は縄文時代中期後半に属すると思われる土器をいう。A～G類までに分類し、各々に説明する。

A類（第26図 57～69）

57は軒先状に内側に張り出した口縁部をもち、口縁部に粘土紐を貼付し、口縁下に刻目隆帯をめぐらし、それ以下を条線としている。58・59は隆線的な条線の上に粘土紐を貼付するものである。60・63～66・69は同様な条線に爪形文を有するものである。61・62は曾利II式に一般的に見られる口辺部文様帶である。

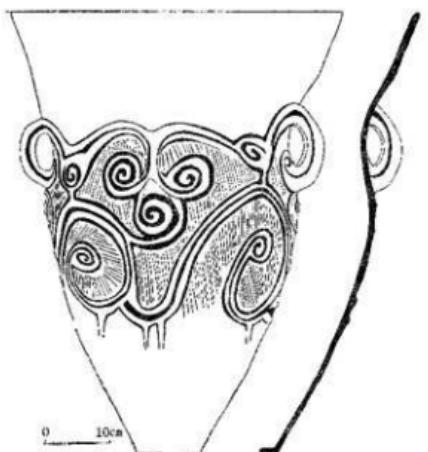
B類（第26図 70～73）

この類は粘土紐を波状に貼付するものをいう。70・72には条線を用い、72のものはやや広い。73はA類に見られた爪形文を用いている。

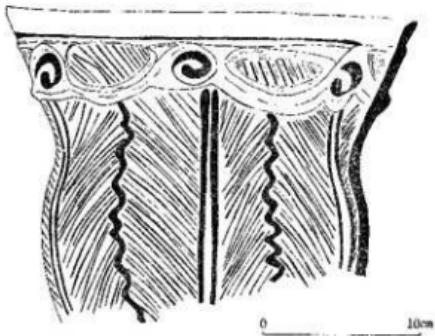
C類（第27図 74～81・第28・29・30図・第31図 82～91・）

この類は曾利式土器に特徴的な条線をもつものを一括した。

74は口辺部に楕円形のマドを太い沈線で表現し、この口辺部は厚く段状になっている。腰垂文は二条の隆線をもってなしている。75・76も同様な土器である。しかし条線は一般的なものと異なり非常に太いものである。75は口唇部に一条の沈線を有している。加曾利E式土器のいわゆる二重口縁と比較した場合興味ある施文である。78は黒色を呈した土器で、おそらく大甕の胴部破片であろう。79・81は同一個体で大甕の胴部破片である。80も同様な器形のものである。第28図の完形土器は高さ約70cmの最大径約60cm程の土器でしかも底部穿孔逆位であった。この上器の出土状況は口絵と図版及び調査の経過にある。口辺部は開き、肩部が張り、底部の非常に小さい土器である。頸部のくび部にかかるエ状把手と組み合せた胴部文様帶はエ状把手の数と同じく4単位であるが、1カ所連続しない所がある。このように1つの単位を



第28図 辻地区 127 グリッド出土
底部穿孔土器尖削圖 (4)

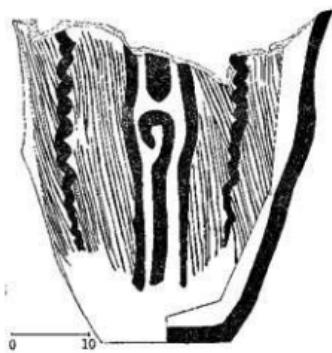


第29図 辻地区 34 の 2 グリッド出土
上部実測圖 (4)

もった文様帶が1カ所廻続しない所があることは興味ある。第29図の土器は、図版3に示したように逆位の状態で出土したものである。口縁部に無文部を有し、底面によりいわゆるマド形をした口辺部文様帶を形成している。轟呂文はまったく沈線化している。第30図の土器は中央部に底盤帶のII状態葉文を有し、沈線の波状文を組み合わせている。柔線は非常に粗雑化している。126グリッドの埋ガメであり、図28の土器と同一遺構から出土している。82・83は同一遺体であり、口辺部に文様帶が集中し、口辺部以下は柱に無縫のみである。84は半成竹管様工具で格子目状に施文している。85は筒状の工具で条痕をなすものである。86は柔線で沈線で文様を横くものである。2次焼成を受け非常にもらい土器である。87は底盤むきで区画するものである。88は口辺部に二条の大いじ沈線をなし、以下を半成竹管様工具で条痕を施している。89は貧弱な陰起線をもっていわゆるマドを構成している。90は綾の波状沈線を中心にはめ施したものである。91は底部近くの破片であり、底盤帶と波状沈線を条縫の上に施するものである。殆どが前説IV式に属するものであろう。

D期 (第32図 92~97)

この類はやや広い集合した平行沈縫をもつものをいう。



第30図 辻地区 126 グリッド
出土土器実測図 (4)

92は口辺部に無文帯をなし、その下に隆帯上を短い直線を引くことによって、連続した楕円状の隆帯をなしている。94は恐らく同様な個体の底部近くの破片である。93・95は同一個体であり、大妻の破片であろう。97は半裁竹管様工具でV字状の条線をなしている。

E類 (第32図 98~107)

この類は半裁竹管様工具で短い直線を引くものと/or/いう。

98は大妻の胴部破片で半裁竹管様工具で短く施文したものである。99の平行沈線はやや太い。100は曾利V式の深鉢の胴部破片であろうか。101は両脇に沈線を施した隆縫と波状沈線を垂下している。

106は縄文地に平行沈線を施すものである。107は縦に隆縫で区画するものであるが、曾利V式の区画の一例と思われる。

F類 (第33図 108~111)

この類は太い沈線を施文するものをいう。108は口辺部に一条の沈線を引き、以下を太い沈線を施文するものである。109は底隆帯を垂下し、斜状に太い沈線を施すものである。110は刻目をもつ隆縫を中心に太い沈線を施文するものである。111も109とはほとんど同一な構成である。

G類 (第33図 112~117)

列点文をもつものを一括した。

112はいわゆるハの字状列点文をもつもので曾利V式であろう。113の列点は非常に粗である。114はやや太い列点を施すものである。115は大形壺形土器の肩部であり、半裁竹管様工具で刺突し、引くような施文をしている。116はやはり半裁竹管様工具で軽く引くものである。117の列点文土器は曾利V式の中に類例が見い出せる。

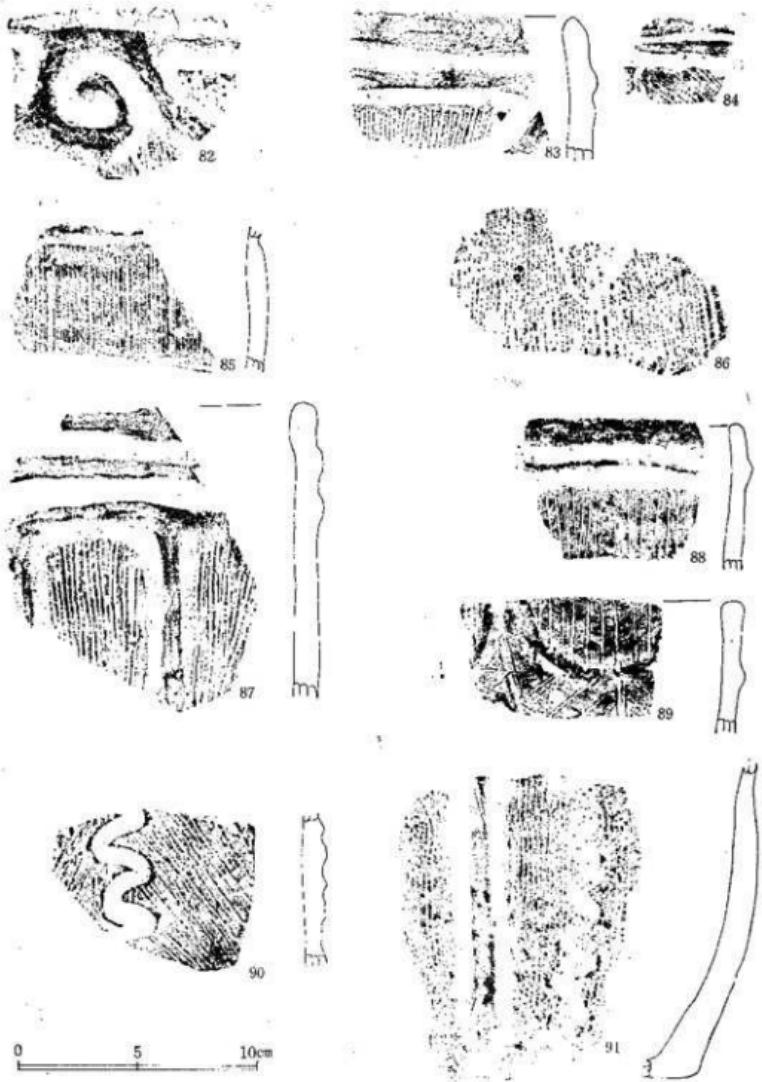
第5群 土器

これらの土器は県内に於いてあまり類例をみないので、特に一群を設定して記述した。

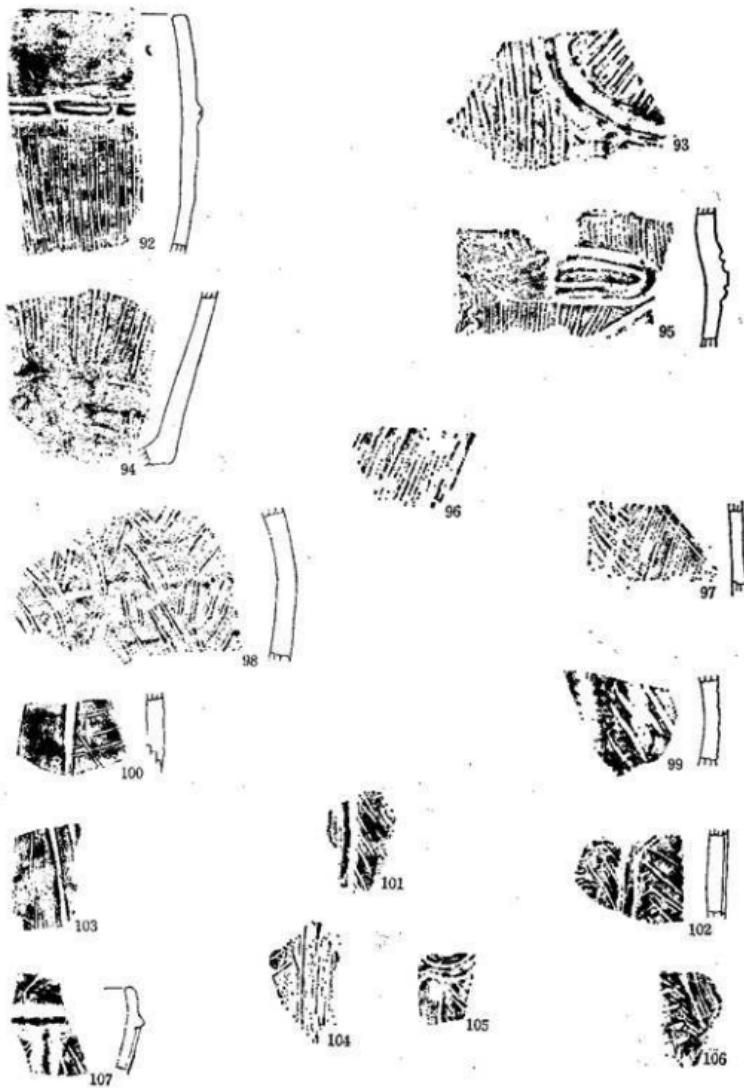
A類 (第33図 118~119・第34図)

これらの土器は丸い列点を有するので一括した。

118は口縁部に丸い列点をなし、太い沈線で曲線的な文様を施すものである。いわゆるマドの退化と考えられる。この土器については、東北地方の大木9式土器の影響も考えられる。118は二条の沈線間に列点を有するものである。第34図の土器は大形破片から復原実測したも



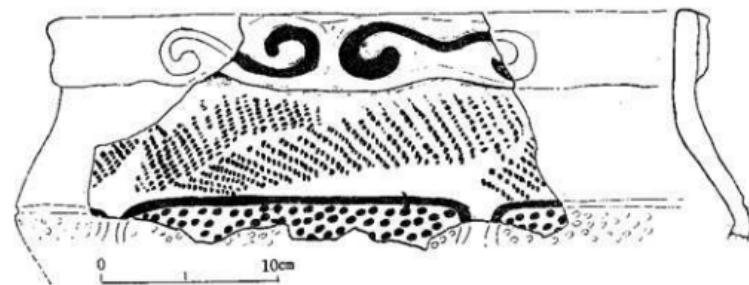
第31圖 出土土器墨拓影



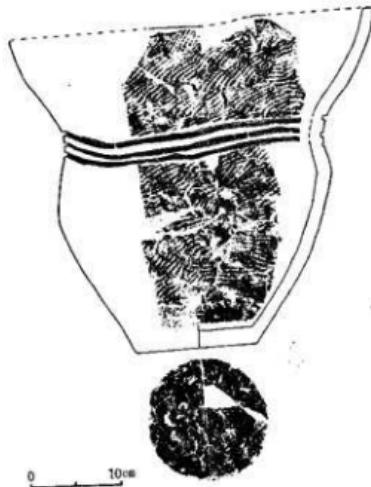
第32図 出土土器拓影



第33図 出土土器拓影



第34図 土器実測図



第35図 土器実測図(2)

に木葉痕を有することも注目されよう。図版4に出土状態を示したように埋甕として使用されたものである。

D類 (第36図)

この土器はただ一個体にすぎないのではあるが、類例も少くないのであえて分類した。

器形は恐らくキャリバー形をなすと思われる。口縁は内弯し一条の沈線を施し、その下に沈線により隆帶的效果を現わす弧状沈線を引き、弧の中にやや太い条線を施している。

のである。口辺部に幅広い粘土帯を貼付し、その上に曲線的な沈線を施し、頸部に調文を施し、胴部は沈線で区画をなすらしく、区画の中には丸い列点で溝たしたものであるらしい。

B類 (第33図 120)

ただ一片ではあるが、明らかに加古利E II式の口辺部である。

C類 (第33図 121・第35図)

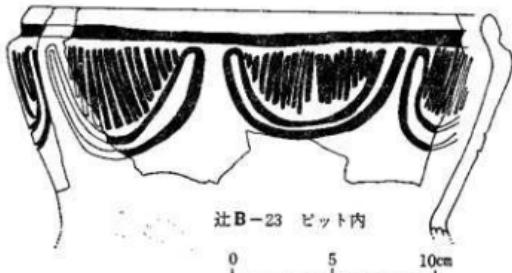
121は口辺部がやや肥厚し、全面を単節の斜縞文で溝たすものであり、表面を黒色を呈し、焼成は硬い。第25図の土器は頸部に三条の沈線を粗雑に施し、殆ど全面に調文を施すものである。この種の胎土と文様を持った土器は散見するが、まとまった例は本例がはじめてのようである。また底部

第6群 土器

これらの土器は磨消繩文をもつものと、それに類するものを一括した。

A類 (第33図 122・123)

微隆起帯をもつものをいう。122は口縁部に無文帯をもち、微隆起帯とその脇を走る沈線で区画するものである。123も同様な土器



第36図 土器実測図

であるが、非常に低い微隆起帯を口縁部にもち、沈線で区画した中に繩文を施している。一種の磨消繩文である。

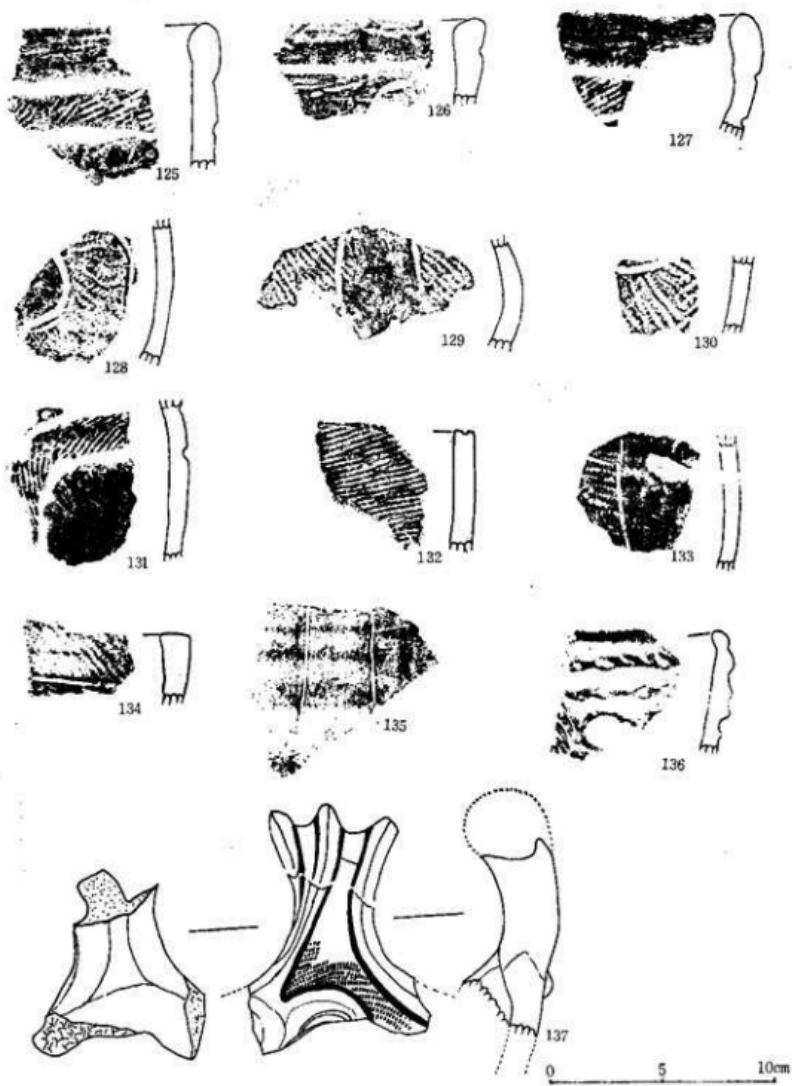
B類 (第33図 124・第37図 125~131)

この類はやや太い沈線をもつものをいう。124は沈線により磨消帯と繩文帯を分けるものである。恐らく加曾利 E III~E IV 式に属するものであろう。125~127は同様な文様帯をもつものである。やや肥厚した口縁部が特徴的である。128~131の磨消繩文土器は加曾利 E IV 式の特徴的な文様と思われる。

C類 (第37図 132~137)

細い沈線を有するものを一括した。

132は口縁部に細い沈線を有し、全面に繩文を有するものであるらしい。133はB類と同様な文様構成をなすものであろうが、B類より沈線が、やや浅く細い。135は無文地に二条の細い沈線を有するものである。137は把手である。やはり細い沈線により特異な区画を有している。茶褐色で石英粒を多量に含んでいる。136は所属不明の土器である。明褐色の焼成良好な土器である。口縁部がやや内凹し、二条の隆起帯を貼付し、その上を棒状施文具で押圧している。また円形に見える隆起帯も明らかに貼付である。地文に見える細い沈線は曾利期に特徴的な条線のように見える。



第37図 出土土器拓影

考 察

以上第1群から第6群にまでわたって、個々の土器について、概略的に説明してきた。本遺跡出土の縄文式土器について、遺跡の性格を示すものは、すべて提示したつもりである。

—第1群 土器—

第1群に一括した土器は、関東地方では、十三菩提式と呼ばれるものであり、信濃編年によれば下島式直後式に、諏訪地方では清ヶ峰式と呼ばれるものに該当する。本遺跡出土のものを、下島式直後の1バチャゲーとして把えてもよいわけであるが、これらの前期終末の上器群が各々の地域で異なった組成をもつという点に於いて、第1群の土器が表面採集・表上層中の出土遺物とはいえない、資料的意義は充分にあろう。つまり下島式直後のある一部分の土器群しか含まないということである。本遺跡ではA～D類までの類別をもつ。さて、A・C・D類に見られる口縁部の特徴に注意したい。A類とC類は縄文地という共通的をもちながら、結節浮隆文を貼付するA類は、口縁部の内外面から粘土紐を貼付し、口唇部直上からは、2条乃至1条の沈線を引いたように見える。そしてソーメン状浮隆文を貼付するC類は、口縁部に同様に粘土紐を貼付するものの、口唇部をナデ、平坦化している。またD類は無文地にやや幅の広い粘土紐を貼付するものであるが、A類と同様な口唇部整形である。

以上の観察より、口唇部と文様との間に少くなくからず関係があると思われるが、あまりにも類例が少くない。例えば、十三菩提遺跡（樋口・麻生 1968）霧ヶ岡（今村・1974）などに散見する。他の遺跡のものについても、明らかな図示はないが、口唇部肥厚という共通的是あげられよう。

—第2群 土器—

これらの土器は中期初頭の踏場式乃至梨久保式に比定されるものである。破片が小さいため、その文様構成については明らかでない。

—第3群 土器—

これらの土器については、既に各々の型式について、出来るだけ記述してきた。特に注目しなければならないのは、42・44の上器であろう。三角押文を用いて、横円の区画の中を施している。雲母を多量に含む点、断面三角の脇帶で区画する点も注目されよう。また22図に復原実測図を示した土器については、その編年的位置に苦慮した。矩形区画文は藤内式に見られる

のであるが、そのほとんどが縦形である。22図の土器のように横帯文を縦に区切る手法は新道式（「井戸尻」・153・154）に見られるものである。平合遺跡（上川名ほか、1973）に非常に近似した例がある。平合遺跡のものは、区画内の周辺に刺突を有している点が異なる。この土器（第6図3）を報告者の上川名氏は五領ヶ台式に比定しておられる。

22図の土器は周辺的に不安定であり、伴川遺物からは、編年的位置が把えられなかつたか、文様構成上より五領ヶ台式には比定し難く、むしろ後出する型式に編年的位置を求める方が妥当であろう。

—第4群土器—

殆どのが曾利II～V式に属する。曾利式土器は県内に普遍的に出土するので、むしろ曾利式にまぎれ込む加曾利系土器に注意したい。加曾利系土器については、第5群・6群土器の項目で後述する。

第29図の土器は懸垂文が完全に沈線化している。またいわゆるマドの構成に於いて加曾利E式的な様相を帶びている。しかし、口辺部のたちあがり、条痕の施文・焼成等から考えて、やはり曾利式土器であり、曾利III式に比定するのが妥当であろう。

また第28図の底部穿孔土器は、前述したように第30図の土器が埋甕として用いられていた遺構の床面下より発見されたという事実より、第30図の土器より古いが、同時期であると考えられる。また井戸尻縄年より推察して、曾利III～V式に比定される。更に文様構成はまったく流麗であるが、曾利II式に見られるような隆帯手法は失なわれている。この底部穿孔土器が住居址との関連の中で発掘された例は少なく、型式編年の基準とされている深鉢形土器といかかる組成関係をもつものかという点が注目される。

さて口縁にも示したように、この底部穿孔土器は、その特異の川上状態からしても注目される。その用途については、小児骨埋葬説・頂戴説・胎盤収納説・成人骨改葬説などの諸説がある。このなかで、小児骨埋葬説の資料としては千葉県板戸市千駄堀の寒風貝塚のものがある。しかし、これは底部穿孔ではなく、一種の穿孔と考えられる底部破壊であるという。成人骨改葬説については、東北地方の後晩期に類例が多いが底部穿孔逆位土器ではない。関東地方では、縄文後期初頭のものが、土括内より逆位の状態で出土した埼玉県板東山（埼玉県教育委員会1973）の例がある。しかしながら、底部の状態については明らかでない。底部破壊であろうか。さて、我々は現在のところ、この中部・関東地方で、底部穿孔土器が確実に成人骨を伴った資料を知らない。また底部に穿孔を有しない土器でも成人骨を伴ったもの（杉原ほか、1971）もあり、時代差・地域差を考慮した集成的研究を待ちたい。更に土括の中より人骨が出土する例もあり、斐指墓と土括墓との差異をどのように理解するという問題、更には、この底部穿孔土器が前述したような謎の用途が考えられるが、ではその当時の共同体とは、一体どのような

関係にあったのであろうか。加曾利期の集落は数多い発掘例があるので、この底部穿孔土器は必ずしも普遍的ではない。

このような幾多の問題を含む底部穿孔土器について、山梨県の報告例を参考として列記してみよう。

1. 東八代郡御坂町葛野遺跡（谷口・1959）

加曾利E I式（谷口・1959）・勝坂III式（江坂・1964）・曾利I式期（桜井・原・1968），谷口氏は上記の文献で焼成後の穿孔であるように記されているが、明らかに焼成前の穿孔である。口辺部欠損

2. 東八代郡塙川村西原遺跡（江坂・1964）

加曾利E式（江坂・1964）・加曾利E II式（桜井・原・1968）

3. 東八代郡急富村木原字代中（森本・石黒・1971）

本遺跡出土のものに類似し、曾利III～IV式であろう。

4. 西八代郡三珠町大塚（森本・石黒・1971）

地文に刺突文を有するが恐らく曾利III～IV式期のものであろう。口辺部欠損

5. 甲府市上石田遺跡（山本・1970）

曾利II式である。

6. 藤崎市坂井遺跡（志村・1965）

曾利I式（桜井・原・1965）口辺部を欠損している。逆位

7. 藤崎市龍坂小学校（森本・1968）

森本氏の上記の文献の図19のものは、胴部最下部の底部近くに丁寧な穿孔をしている。あるいは焼成前のものか。曾利I式期の所産であろう。

8. 藤崎市純坂小学校（森本・1968）

森本氏の図21である。曾利III～IV式であろう。地文に刺突を有する。口辺部欠損

9. 北巨摩郡明野村中学校（森本・1968）

森本氏の図26の土器である。恐らく曾利II式であろう。

10. 北巨摩郡明野村上神坂（森本・1968）

森本氏の図27の土器である。曾利III～IV式に比定される。口辺部欠損

11. 北巨摩郡須玉町（志村・1968）

曾利I式（桜井・原・1968）口辺部欠損

12. 大月市都留高等学校 (石黒・山田・高間 1970)
図の 2 の土器である。曾利Ⅲ～IV式に属するであろう。
13. 大月市都留高等学校 (石黒・山田・高間 1970)
図 4 の土器である。曾利Ⅱ式に比定される。口辺部欠損
14. 都留市法能佐吉遺跡 (都留市教育委員会 1972)
曾利Ⅲ式 (都留市教員委員会 1972)
出土状態は木遺跡のものと非常に類似する。森本氏は同一土器を曾利Ⅳ式に比定されている。(森本 1972)

以上14個体について、その型式名を報告者の意見を尊重し、また文献も明らかになるように記した。報告者が型式名を記さない場合はあえて筆者が記した。上記の報告例の他にも資料は数多いが具体的資料提示が出来なかつたので割愛した。

以上の土器の中で、明らかに焼成前の穿孔と思われるものは葛野遺跡出土のものである。これは意味する点が多い。つまり、この土器は、穿孔を有することを第一義として作られたことにならうかと思う。更に注意しなければならない点は、口辺部欠損のものが多いということである。この点も意味する所が多いのではないかろうか。

また昭和45年に青山学院大学などで調査した東八代郡中道町上野原遺跡において、このような底部穿孔土器が多く出土したと聞いているが、報告書の刊行が望まれる。(小野正文)

一第 5 群 土 器一

A 類土器

この土器は黄灰色の焼成の硬い土器であり、とくに118の土器は大木系統のものと思われる。第34回に復原実測した土器は、器形的にも特異であり、文様構成も類例もあり見ないものである。焼成は硬く、器壁も割合い厚い。別系統土器として認識したい。

B 類土器

加曾利E式に比定される土器である。県下の加曾利E式については第6群土器との関連の中で後述するが、加曾利E式の古いものについては、まだ確実な資料に接していない。しかし、加曾利E式と思われるものは、轟崎坂井遺跡保存館に一個体 (志村 1965の図版 21)、山梨市七日子遺跡 (上野晴朗 1967) 等に散見する。その他加曾利E式と思われるものは、割合多く存在する。しかしながら、やはり山梨県の加曾利E式土器は、その地城的特色を示している。

C 類土器

これらの土器は焼成・胎土から考えて、通常の曾利式土器とは異なる。しかし、その綱年的

位置は曾利Ⅲ式期の所産であろう。

D類土器

この土器は口辺部のみに文様帯が集中し、胴部は無文であるらしい。しかもこの文様帯は井戸尻Ⅱ式のメルクマールである櫛形文の変形と考えられるものである。縦年の位置については、出土状態が単独の窪地から出土したため伴出遺物はない。幸い県内に於いては井戸尻期のこの種の出土例がある。上石田遺跡（谷口 1973）の第1号住居跡〈第二次生活面〉出土の8の土器である。器形的にも類似し、口辺部に描く櫛歯文は連続するが、櫛歯形を示さない所もある。またこの土器の櫛形なく連弧は陰文であるらしく、その上に交互に刻目を施している。やはり、井戸尻期の所産と見るのが妥当であろう。しかし、本遺跡出土のものは、沈線による階帶的表現であり、加曾利Ⅲ式に多く見られる手法であり、曾利期に属するものと思われる。

第6群土器について

このうちA類は加曾利E_{IV}式と見られて來たものであるが、加曾利E_{IV}期のものとして、別系統に属すると思われる。B類に分類したものが加曾利E_{IV}式土器である。加曾利E_{IV}式存否については、大報告の目的ではないので、省略するが、県内に於いてはこの種の土器が割合普遍的に存在するようである。例えば、東八代郡中道町城越遺跡（上野 1969）・同・宮町屋分遺跡（森本・石黒 1971）・同・宮町屋分遺跡（森 1973）・西八代郡三森町上野平遺跡（木木 1973）・蓮崎市穂坂小学校所蔵品等である。上記の報告例には、加曾利E_{IV}式なる認識はない。これは上器型式設定に問題がないわけでもない。しかし、ここで加曾利E_{IV}式を認識するのは、県内に於いて、加曾利E_I～E_{III}式までの段階の上器がE_{IV}式に比べて少なく、加曾利E_{IV}式の段階で何故増大するか。また加曾利E_{IV}式と曾利V式との關係である。残念ながら、曾利式土器が普遍的に見られる県内に於いて、加曾利E_{IV}式土器と曾利V式土器が単一住居跡に伴出する資料を手にしていないので、資料の追加を待つ後述したい。

C類土器は後期初頭に属すると思われる。県内に於いては、この期の資料は断片的に報告されている。例えば、東八代郡豊富村宇山平遺跡（森 1973）・西八代郡三森町上野原遺跡（木木 1973）・早川町勝村（山本 1966）・都留市小形山中谷遺跡（1973）・壁谷遺跡（都留文科大学考古学研究会 1972）等である。しかし、昨年牧丘町西保古宿遺跡に於いて、後期初頭の良好な資料を出土する敷石住居跡を発掘したという。報告書の刊行を待ちたいと思う。

ま　と　め

以上分類した土器について若干の考察を試みたが、筆者の非力のため考察に至っていない点も多々あろうかと思う。先学同門の諸氏の御批判御叱正をお願いしたい。

筆者は文集中、加曾利E式・曾利式土器という名称を意識的に用いてきた。県内の土器に対して、このように意識的に土器型式名を用いたのは、筆者の知るかぎりでは谷口一夫が初めてである。(谷口 1973)、地域的な研究を進めている我々は、氏のこのような認識に対して評価したいと思う。また既知の型式についても、更に地域差を追求したいと思う。

先述のように、底部穿孔土器についても、研究者により型式はまちまちである。これは考古学の発達上やむを得ない場合もある。しかし型式の概念規定の曖昧さもあるのではないかろうか。

尚未筆ではあるが、出土状態その他は森和敏の教示によるものであり、第6群土器については、甲斐丘陵考古学研究会の萩原三雄・室伏儀と筆者の討論をまとめたものである。

(小野正文)

参考文献

- ① 橋口清之・麻生義 1968 「野川南台町地理誌文化財調査報告」
- ② 今村齊爾 1973 「霧ヶ岡」
- ③ 上川名陽ほか 1973 「平台遺跡とその出土遺跡物」
- ④ 埼玉県教育委員会 1973 「坂東山」
- ⑤ 杉原莊介ほか 1971 「市川市史」
- ⑥ 谷口一夫 1959 「県立富士協立公園博物館研究報告」 第2号
- ⑦ 江坂輝亦 1964 「日本原始美術」
- ⑧ 横井清彦・原信之 1968 「考古学雑誌」 54巻2号 「神奈川県伊勢原町横手原出土の底部穿孔土器について」
- ⑨ 森本圭一・石黒良行 1971 「甲斐考古」 9-1 「東・西八代郡下出土の縄文式土器」
- ⑩ 山木寿々雄 1970 「甲斐考古」 7-3 「中府盆地底部出土の旧石器文化ならびに縄文文化中期の遺跡について」
- ⑪ 志村淹藏 1965 「坂井」
- ⑫ 燐本圭一 1968 「山梨県考古図譜」
- ⑬ 石黒良行ほか 1970 「甲斐考古」 7-3 「都留高等学校所蔵の中戦後半の縄文式土器」 都留市教育委員会 1972 「生吉遺跡」
- ⑭ 森本圭一 1972 「甲斐考古」
- ⑮ 上野晴朗 1967 「甲州風土記」
- ⑯ 谷口一夫 1973 「上石印遺跡」
- ⑰ 上野晴朗 1969 「山梨県東八代郡中道町城越の駿河遺構」
- ⑯ 森本圭一・石黒良行 1971 ⑮に同じ
- ⑰ 森和敏 1973 「金川曾根地区大規模農道建設及び畑地帯土地総合改良事業関係埋蔵文化

財緊急発掘調査概報 |

- ④ 宋木建 1973 ⑩に同じ
- ⑤ 山本寿々雄 1966 「県立富士・国立公園博物館研究報告」
- ⑥ 都留市教育委員会 1973 「中谷遺跡」
- ⑦ 都留文科大学考古学研究会 1972 「久保遺跡、壁谷遺跡」

第4節 出 土 石 器

石器は全て辻地区で出土したものと表面採集したものである。

遺構の項で記述したように、辻地区では住居址と思われる箇所があったが耕作でその床面は全て擾乱されていた。従って住居址や住居址と思われる中にあった埋甌との関係は不明である。そのほとんどが表土（第1層）又は表土直下の層（第2層）から出土しており、出土地点も散在していて遺構や遺構との関連はつかめない。

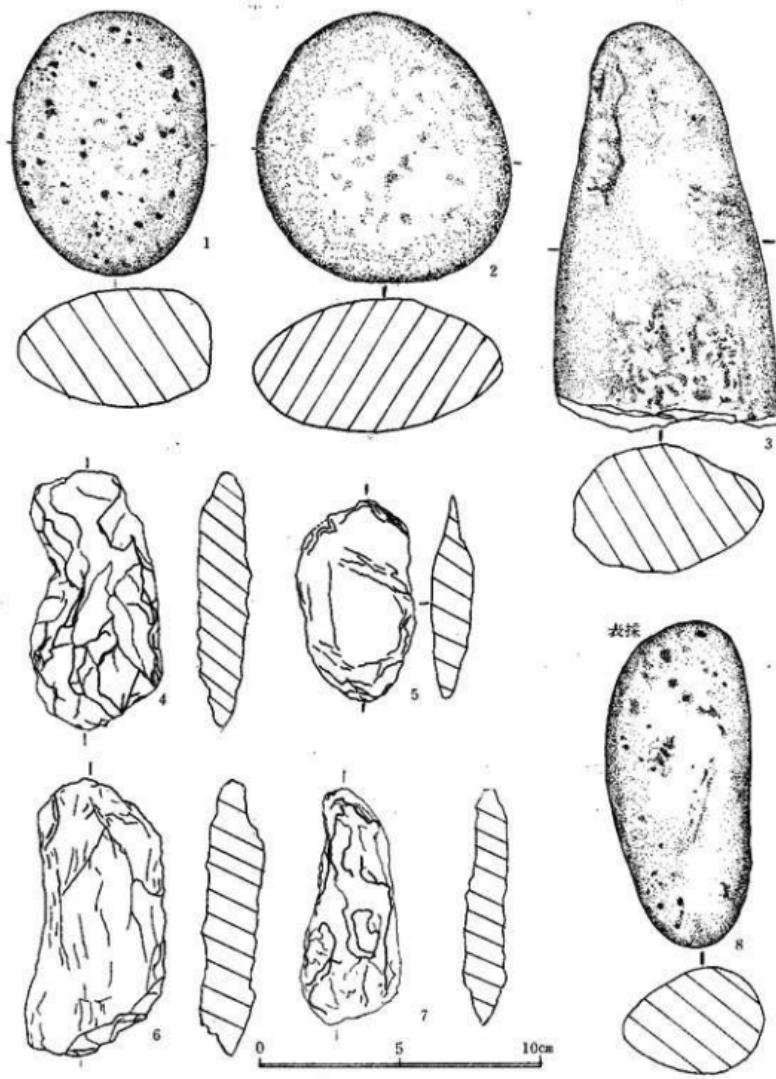
石斧で共通した点は第38図、4、5、6、7 の石質はすべてホルンヘルス製で比較的小型であり、長さは4は9.5 cm、5は7.2 cm、6は10 cm、7は8.6 cm であり、いずれも扁平である。形状は長軸の一方を弓なりに凹ませている。曾根丘陵において石斧をホルンヘルスか粘板岩で作成している例は多く（表面採集などによる例として）、八ヶ岳山麓と比較すると小型のものが多い。

1、2、8は閃石で石質はすべて安山岩製である。長軸の長さは1が9.4 cm、2が9.8 cm、8が11.7 cm である。いずれも表面全体に万遍なく凹があり、中央の孔が最も使用痕が大きくしかも深い。曾根丘陵にこの石質のもので形状も同じものが一般的に見られる。

3は磨製石斧の柄に当る部分で刃部が欠損している。比較的大きく 20 cm は越えるものと思われ、石質は安山岩である。

以上石器は8点で、発掘した範囲からすると少量であるが、これはおそらく耕作中に治て去られたものと思われる。

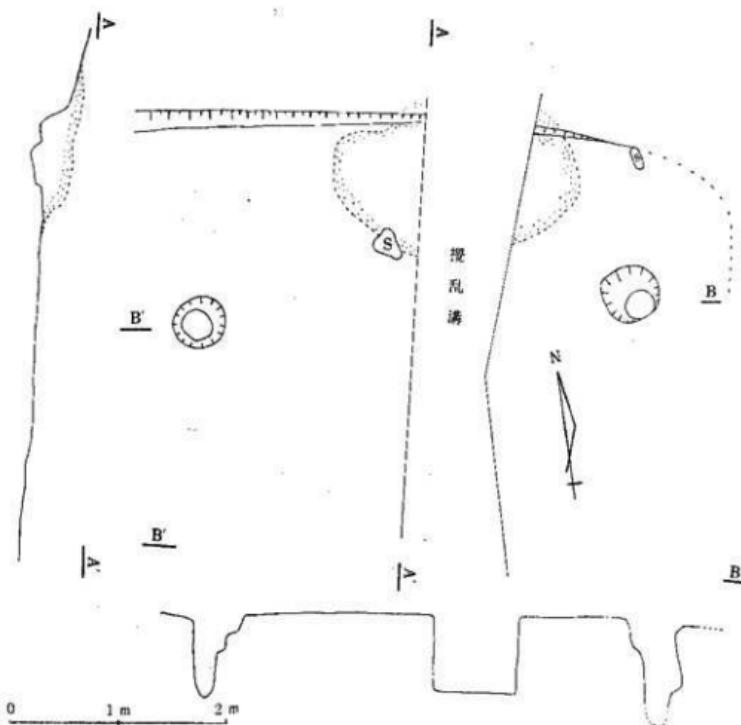
(森 和 雄)



第38圖 石器実測図

第5章 薊在家遺跡

第1節 住居址



第39図 住居址実測図

薊在家地区は、道路をはさんで、北側に塗壁A地区に続く。地形は、曾根丘陵の舌状台地頂部よりやや下った所に位置し、南にわずか傾斜している。続いて、そのまま谷に落ち込んでいる。

この地域で工事中、焼土が検出されたので急拠工事を中止し、調査に入り、確認されたものである。

当初、本遺跡は、幅12m、長さ0.5mという細長く傾斜する地域であったことから、この区域が偶然除外されたものであった。

工事により、遺構は若干破壊されたが、緊急のうちにも一応の調査が進められ、概要の明らかになったものが、せめてもの幸いであった。

遺構

竪穴は、表土より約30cmの地点に第4層を掘り込んでつくられている。本住居址のほぼ中央は工事による溝によってかく乱されている。又耕作等によるかく乱も隨所にみられ、平面的プランは確認できない。カマドは、実測図で示すように北壁ほぼ中央に若干床面を掘り込んで設置され、付近には、焼土が2.3m×1.5mの範囲に分布し若干の粘土、焼石が散乱している。カマドの形態、構造等は、破壊が著しく観察はできなかった。住居址の中央付近は、固く良好な床面をなしている。壁は、北壁がかなりはっきりしていたが、ここでの壁高は約35cmであった。また、柱穴は二ヵ所ほど検出されたが、他には検出されなかつた。遺物はカマドの周辺に多く見られ、ほぼセットをなして検出された。出土遺物は床直上より検出された土器のみで、他追物の混入は見られないと思う。土師器と須恵器がその主なものであるが、須恵器は杯のみ検出されている。

第2節 遺物 (第40図)

(1) 長形甕形土器 (第40図1)

器高28cm、口径15cmを測る。

緩く外反する口縁部に、ややふくらみ気味にのびた胴部が続き、胴部最大径は中位にある。口唇部は、やや丸味をもち、底部は突出底で安定しない。口縁部外面には、横なでが見られ、縱方向の箇削りが施されている。全体的につくりは縦で赤褐色を呈する。

(2) 椭形土器 (第40図2)

碗形上器とされる例の中には杯形土器と分類が困難な場合があり、一応本例は碗形土器として扱う事にした。

器高10cm、口径20cmを測る。楕形を呈し、口縁部は直立し、3の杯形土器口縁部との共通性を示している。

胴部との接合部には明顯な稜が横なで整形され作り出されている。

胴部は丸味をもちながら底部に移行し、丸底である。全体的に黒色研磨され器面はきれいに仕上げられている。胎土、焼成共に良好である。

(3) 杯形土器 (第40図3)

器高4cm、口径13.5cmである。

ほぼ直立に近い立上り口辺を持っているが、低く、また杯洞部は比較的張りが少ない。

縦から底部に至る杯の下半部は外面とも箇削による整形痕が残されている。

胎土もよく精選され、黒色研磨されている。

(4) 須 惠 器 杯 (第40図4)

器高3cm、口径15cmである。

たちあがりは矮少化し、全体的に浅く扁平であり、受部は水平に外方へのびている。

第Ⅲ型式に属する。陶昌における型式編年からするとTK209号窯あるいはTK217号窯の杯に酷似する。

(5) 長 形 瓢 形 土 器 (第40図5)

胴部より下は欠損している。口径は16cm。1の瓢形土器とほぼ同じ形態をもつ。口縁部は同じく、横なで手法により整形されている。

(6) 鉢 形 土 器 (第40図6)

器高6cm、口径12.5cmを測る。

底部から胴部の中位が膨れて口縁に至る器形をもつ。底部は平底である。

器肌は赤褐色を呈し、器壁は厚い。胎土に石粒を混入し、全体的に素朴なつくりである。

(7) 高 杯 形 土 器 (第40図7)

脚部のみで杯部は欠損している。

脚部はラッパ状に開き、きれいに仕上げられている。器面は黒色研磨され、胎土、焼成とも良好である。外面は箇削りで、内面は横なでである。

ま と め

以上の遺物が本住居址から一括して出土した主なものである。ほとんどがカマド周辺の床面直上から検出されたものであり、良好なセットとして把握することができる。

これら甕形、杯形、椀形土器の形態は、後期土師器の高筋の土器範疇に属するものであり、改めて質問を要しないであろう。第40図1、2、3、7等これも鬼高期の特徴を具備している。1、5は口縁が若干肥厚し、その特徴としている。須恵器は杯が1点だけ併出しているが、第Ⅲ型式に属するものである。[既にこの時期に併出するものであることは古くから知られており、鶴川 H-1号住居址、C-1号住居址(註1)等その例は多い。

近年、鬼高湖の研究に関してその細分にいろいろな考え方がある。そのなかで、鬼高遺跡の遺物を鬼高湖前半に、須和田遺跡出土のそれは後半に分類する見解（註2）があり、これによると、本遺跡出土の土器は後半に含まれよう。更に、I式～III式に分類する考え方（註3）もある。これに従えば、II式の形態に属することにも異論はないであろう。

いずれの考え方にもそれ程時系列的差異は見い出せなく、ここではひとまず鬼高II式の土器として理解していきたい。

翻って、山梨県における鬼高湖の上師器の調査研究例はどうであろうか。

過去、山本寿々雄氏（註4）、折井忠義氏（註5）、菊島美夫氏（註6）等によって報告されているが、その他具体例には極めて乏しいことが指摘できる。特に菊島氏は上師器編年を試みているが、鬼高湖の場合、今後更に資料の増加が必要となろう。

さて、住居址は南傾斜面上に立地するものであるが、今回一軒のみの発見である。先抑区域の制限ということもあるが、集落としては、比較的小規模で散在する傾向である。多くの住居址によって集落を構成する例のはかに傾斜地における、こういった散在的な集落形態の存在も知られており、（註7）本遺跡もそういう特徴を有する一例かも知れない。

最後になったが、既に述べてきたとおり木原において鬼高式土器を伴する遺跡は少なく、本住居址がかく乱されているとはいえ貴重な資料である。この資料の提供により、若干でも本県の空白部分を埋める事ができる点幸いに思う。

発掘区域内には、住居址は一軒しか検出されず、いずれ面的発掘調査の機会が得られれば、その全様が明らかになると思う。

（萩原三雄）

（註1） 小出義治「葛川遺跡群」 昭和47年

（註2） 杉原莊介ほか「土師式土器業成本調査」 後期」 昭和48年

（註3） 中田遺跡調査会「八王子中田遺跡」 昭和42～43年

前掲 註1

この他、玉口時雄氏による分類方法もあるが、それ程度がなくこの中に含まれるものと考える。

玉口時雄「土師器とその集落」 日本国史学会 昭和49年

「土師器とその集落研究の現況と課題（上）」 日本国史 昭和47年

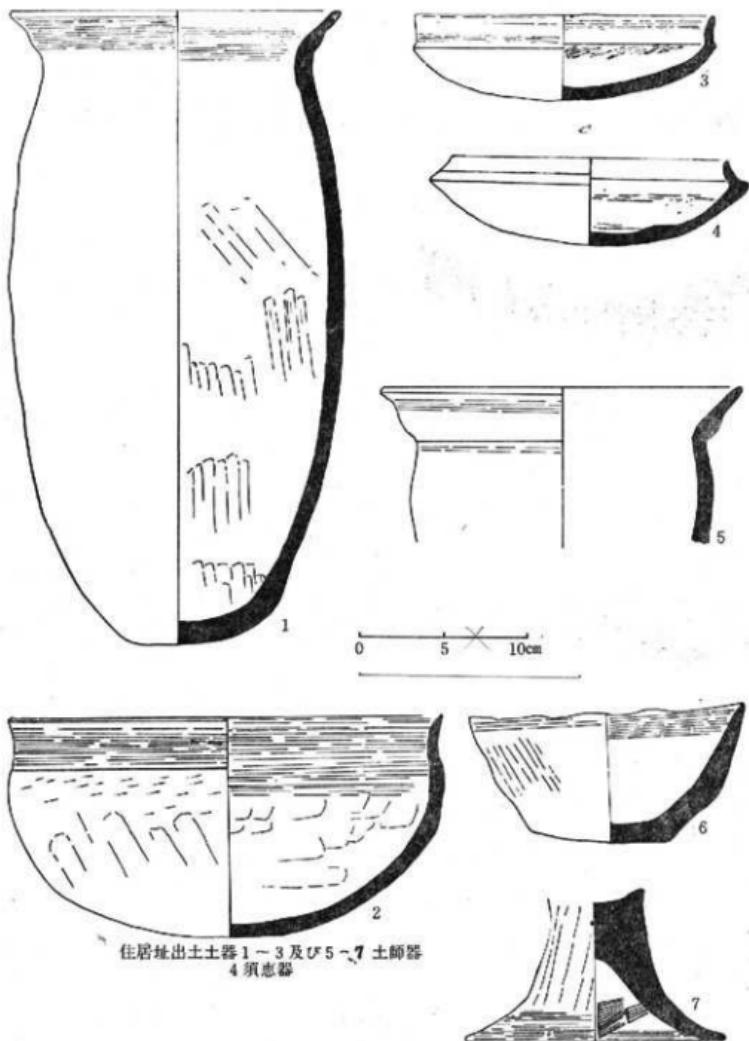
（註4） 山本寿々雄「甲斐天神山前方後円墳出土の總について」

富士国立公園博物館研究報告 3号 昭和35年

（註5） 折井忠義「山梨県上九・色村出土の土師器」 甲斐路20号 昭和46年

（註6） 菊島美夫「山梨県における土師器編年」 甲斐国埋没茶用遺物等の調査 昭和48年

（註7） 「宇津木遺跡とその周辺」 昭和48年



第40圖 住居址出土土器実測図

第6章

第1節 西八代郡三珠町大塚上の原発掘調査報告

(一) 発掘場所 三珠町大塚小字家向3730番地 上の原

(二) 発掘期間 昭和47年6月13から同月17日まで

(三) 発掘場所の地理的環境・調査の経過・結果

当地域は曾根丘陵上にあり、北に低い丘陵があって、その向うは甲府盆地底部である。

前年この発掘場所に近い所を発掘調査したところ少量の須恵器、土師器等が出土したが、確かな造構はなかった。しかしこの南方約500m上方の小字水飲場には縄文時代早期の山形文縁円文土器の破片が多量に散布している箇所がある。(他の機会に報告する予定である)
また近くの区域外の畑で相当量の須恵器が農耕中出土している。ここは古墳が破壊された跡との可能性も考えられる。

調査地区は、比較的眺望はよく立地上は遺跡の好適地と思われた。

三珠町教育委員会等の協力を得て事前に予備調査を行い、発掘調査を始めた。

トレンチを設定し発掘したのであるが、大塚ごぼうの名産地といわれるだけに耕作上が深かった。深耕していない箇所に於てもローム層上まで、單一層に近かった。

遺構は1カ所小さな集石らしいものがあったが遺物を伴わないと時代は確認出来なかつた。結果は区域内には造構遺物共に発見されなかつた。(森 和 敏)

第2節 東八代郡八代町高家下道発掘調査報告

(一) 発掘場所 八代町高家小字下道305番地

(二) 発掘期間 昭和47年8月8日から同月14日まで

(三) 発掘場所の地理的環境・調査の経過・及び結果

当地域は浅川扇状地扇尖にあり、西面した傾斜地で、甲府盆地底部へと移行する。

この地域の西(下)方には相当広い土師器の散布地が展開している。

八代町教育委員会等の協力を得て事前の予備調査をしたところ少量の土師器が地表に見られたのでトレンチ方式によって発掘したものである。

表土は約120cmありその下はローム層であった。

遺構は、ローム層を深さ約30cm、広さ約2mの溝が確認出来たが人工的なものかどうかは判明出来なかつた。水路ではないと思われる。

遺物はこの調から少量の縄文式土器と土師器が出土した。

以上のように確実な遺構遺物とも検出出来なかった。（森 和 敏）

第3節 東八代郡御坂町大野寺向田発掘調査報告

(1) 発掘場所 御坂町大野寺小字向田945番地

(2) 発掘期間 昭和48年8月20日から22日まで

(3) 発掘場所の地理的環境・調査の経過・及び結果

当地域は御坂山麓にあって、北にやや傾斜している。以前はこの地域一帯は田であったが、現在は果樹地帯になっている。

100mくらい下には縄文時代中期の土器片が耕作時に出土し、畑の隅に散乱しており、又一段下の畠からは磁器用配管を敷設する際にやはり中期縄文土器片が出土したといわれる。上方にある大野寺部落には古墳群がある。

以上のような状況が予定路線内分布調査の折わかったので発掘することとなったのである。

トレチによって試掘したところ深さ150cm以上大小の石が混入した單一粘土層が続き、この中から少しある上部盤破片が出土した。この土器片は全て摩耗していることから推測して流れてきたものと思われる。

結果、何ら遺構を確認する事はできなかった（森 和 敏）

第4節 結びに代えて

上記3つの発掘調査区域は、以上のように、確たる遺構、遺跡の存在しない地域であった。ともすれば、種々の要因で埋蔵文化財が失なわれてゆく昨今、安堵の気持ちが広がるのを感じる次第である。

発掘調査については、関係各位並びに調査参加者に、多人の御協力をいただいた。ここに記して、深い謝意を表するものである。

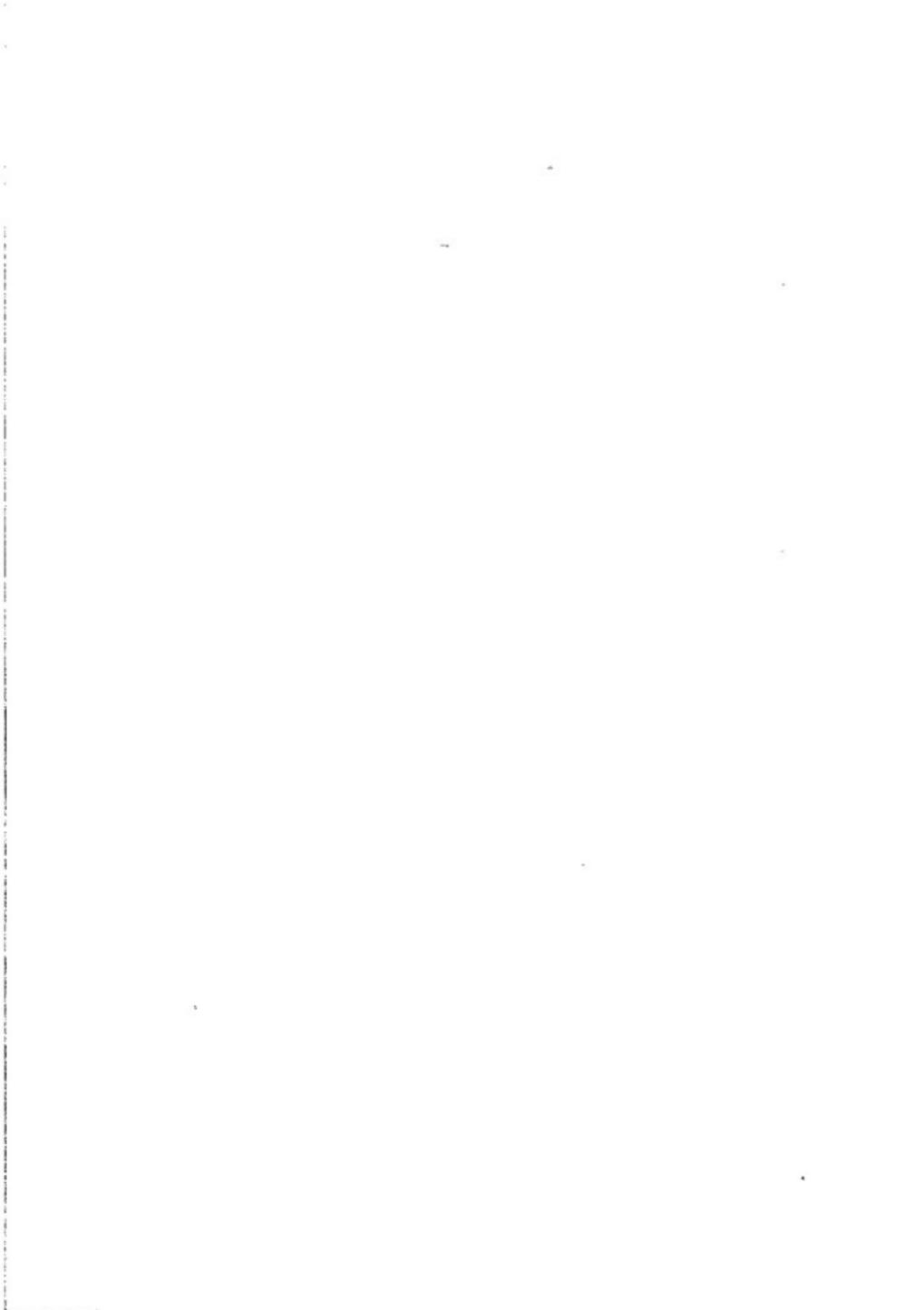
辻遺跡・薊在家遺跡等発掘調査

参 加 者 名 簿

山梨県遺跡調査委員会	井出 佐重
発掘担当者	野沢 呂康
調査員	折井忠義、早川方明、渡辺礼一、立川大造、田代 幸 手塚寿大、萩原三雄、森 和敏（県文化財主事）
調査協力員	上原 稔、塙島博光、桜林芳明、尾沢真琴、桜林芳秋、 中村良一
山梨人考古 古学研究会	黒伏 徹、渡辺孝子、宮下敬子、志村美千子
同大学学生	萩原茂男、萩原正紀
山梨英和女子 短期大学	藤森町子、名執京子、長谷部秀美
明治大学	神州和美、小林昌基
国学院大学	小野正文
早稲田大学	加藤正治、沼本芳豈、齊藤裕樹、若林 繁、山田武美
都立商科短大	桜井弘美
甲府南高校生	宮下節子、小林真理
境川村文化 財審議員	森日正長、清水信吾、志村重秋
映南郷土研究会	芦沢忠男、深沢 強、二宮明雄、青木慶三、
地元教育委員会	
境川村	木曾 久
三珠町	三神国秀
八代町	渡辺行祥
御坂町	原田 憲

図 版

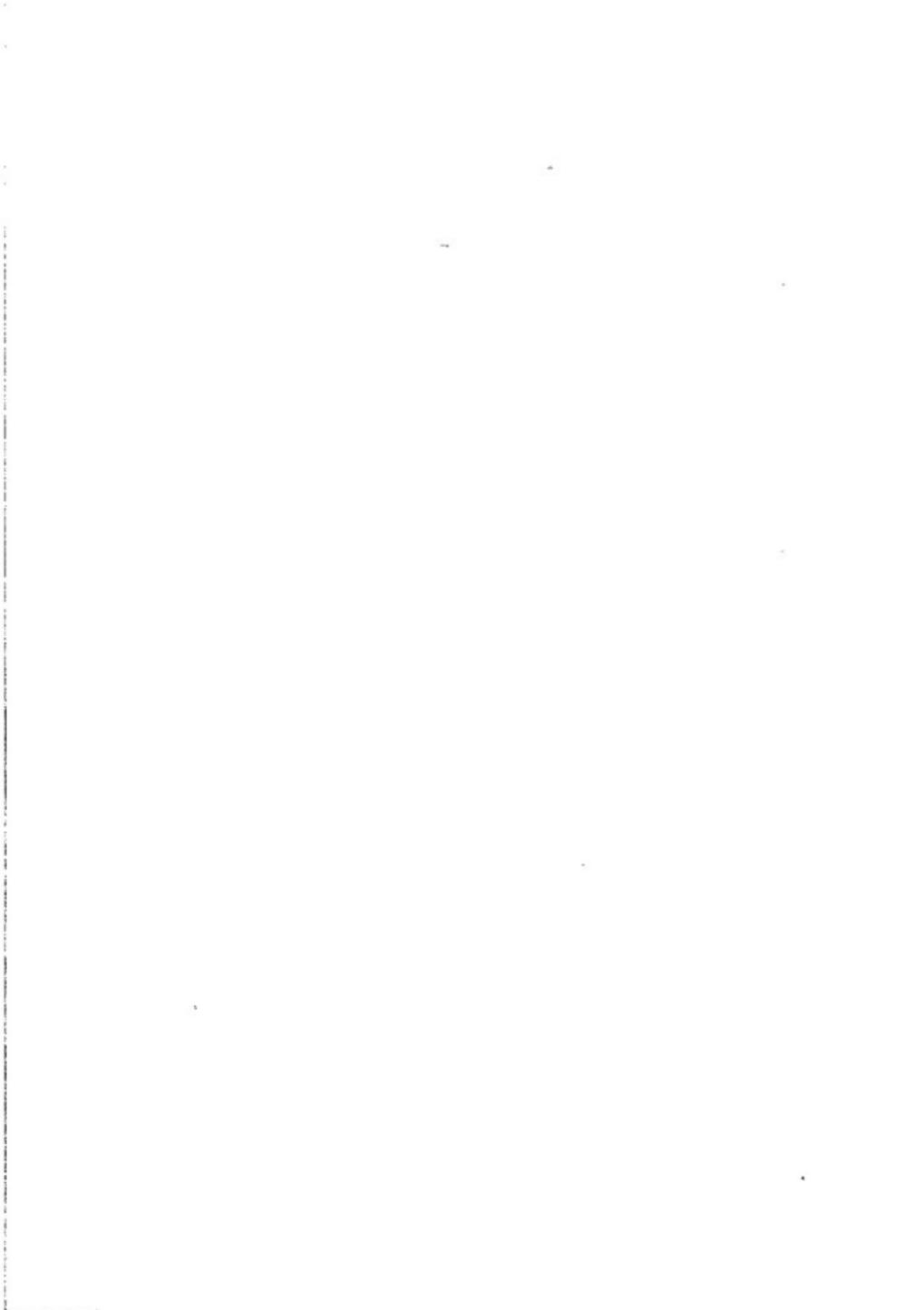




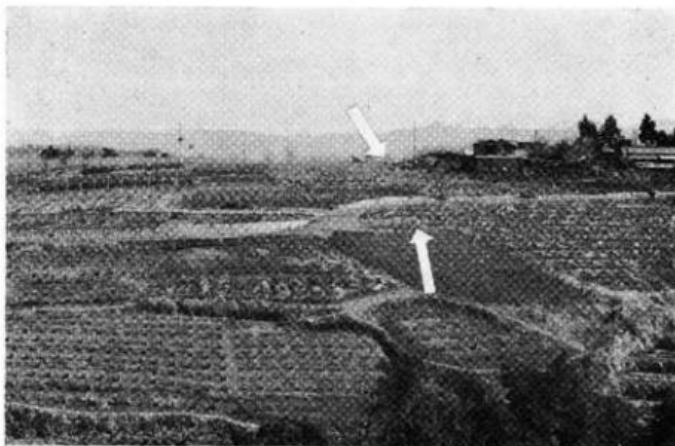
1 沢跡跡、薺在家遺跡全景（右手後方八ヶ岳 左手後方アルプス連山。中央甲府盆地）



図版第1



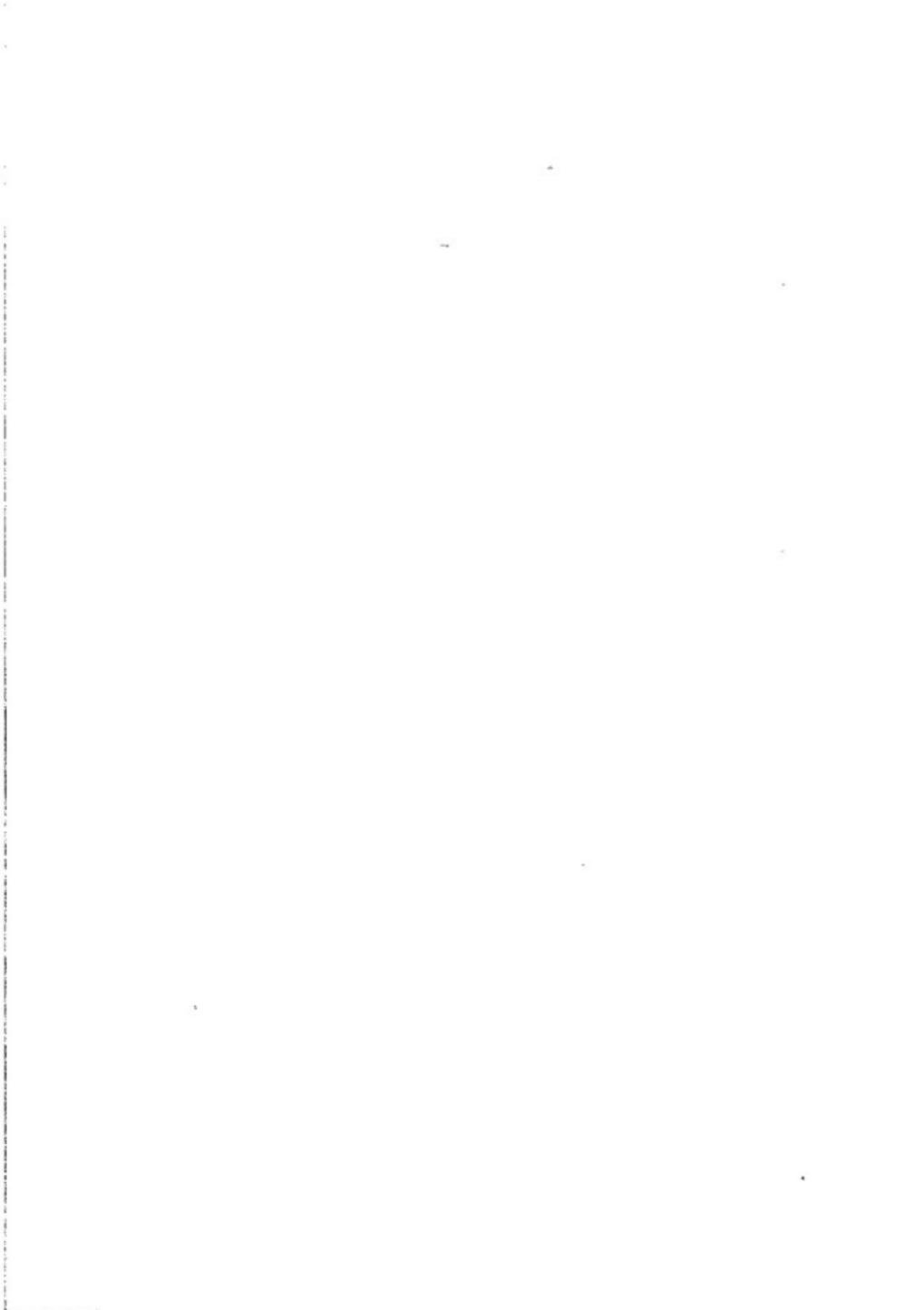
図版第2



1 辻遺跡、藪在家遺跡 近景



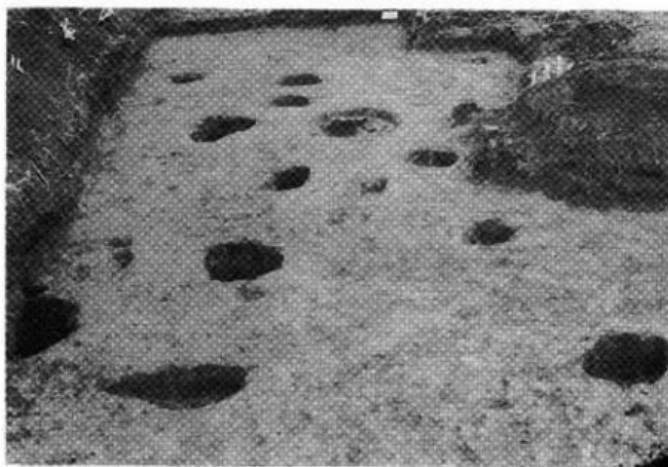
2 辻遺跡 発掘状況



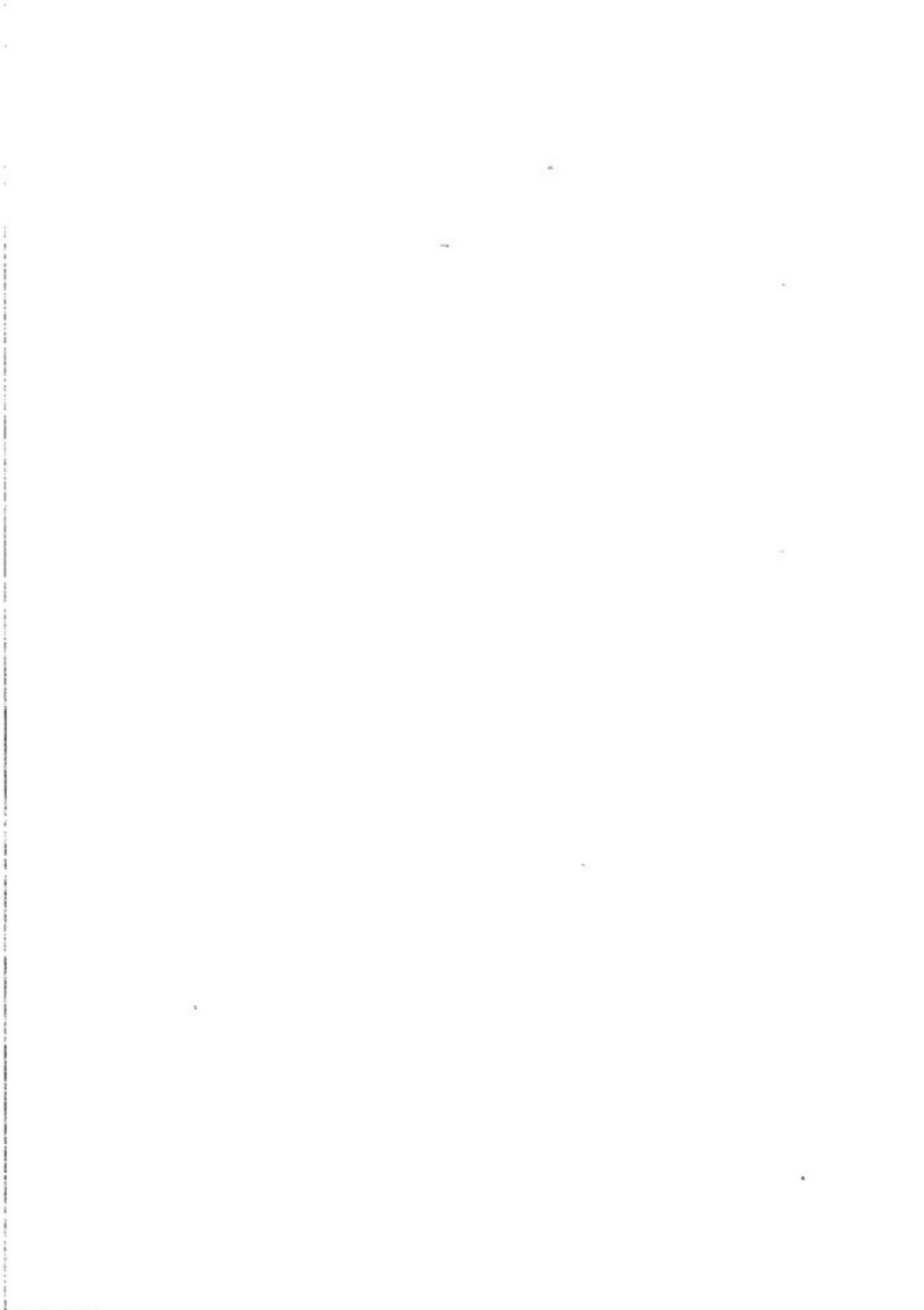
図版第3



1 辻34の2 グリッド土器出土状況



2 辻80グリッド～90グリッド土器出土状況



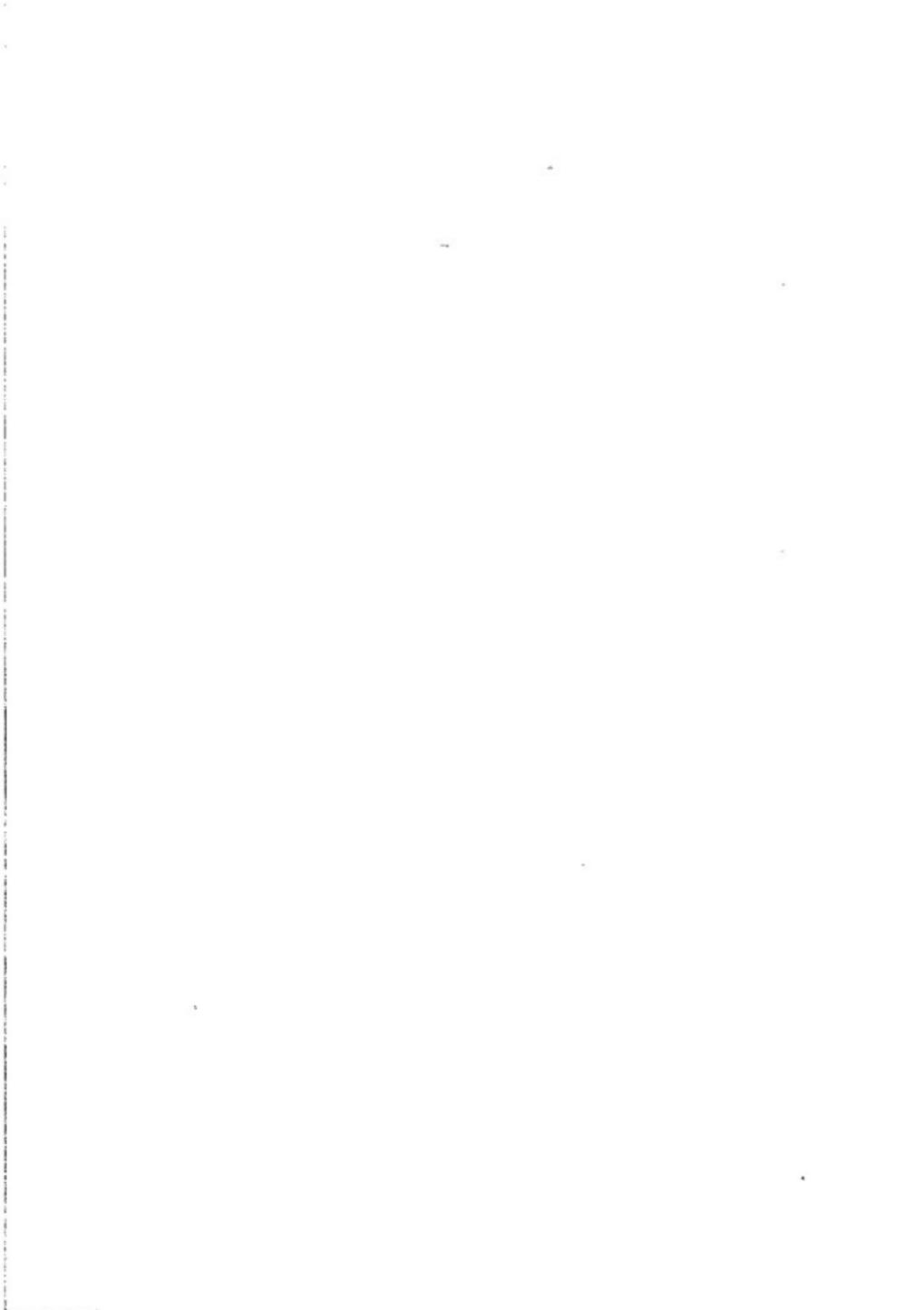
図版第4



1 辻87グリッド土器出土状況



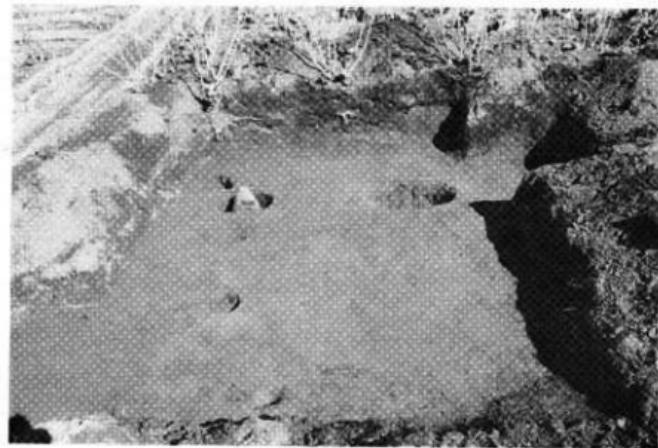
2 同 上 近接



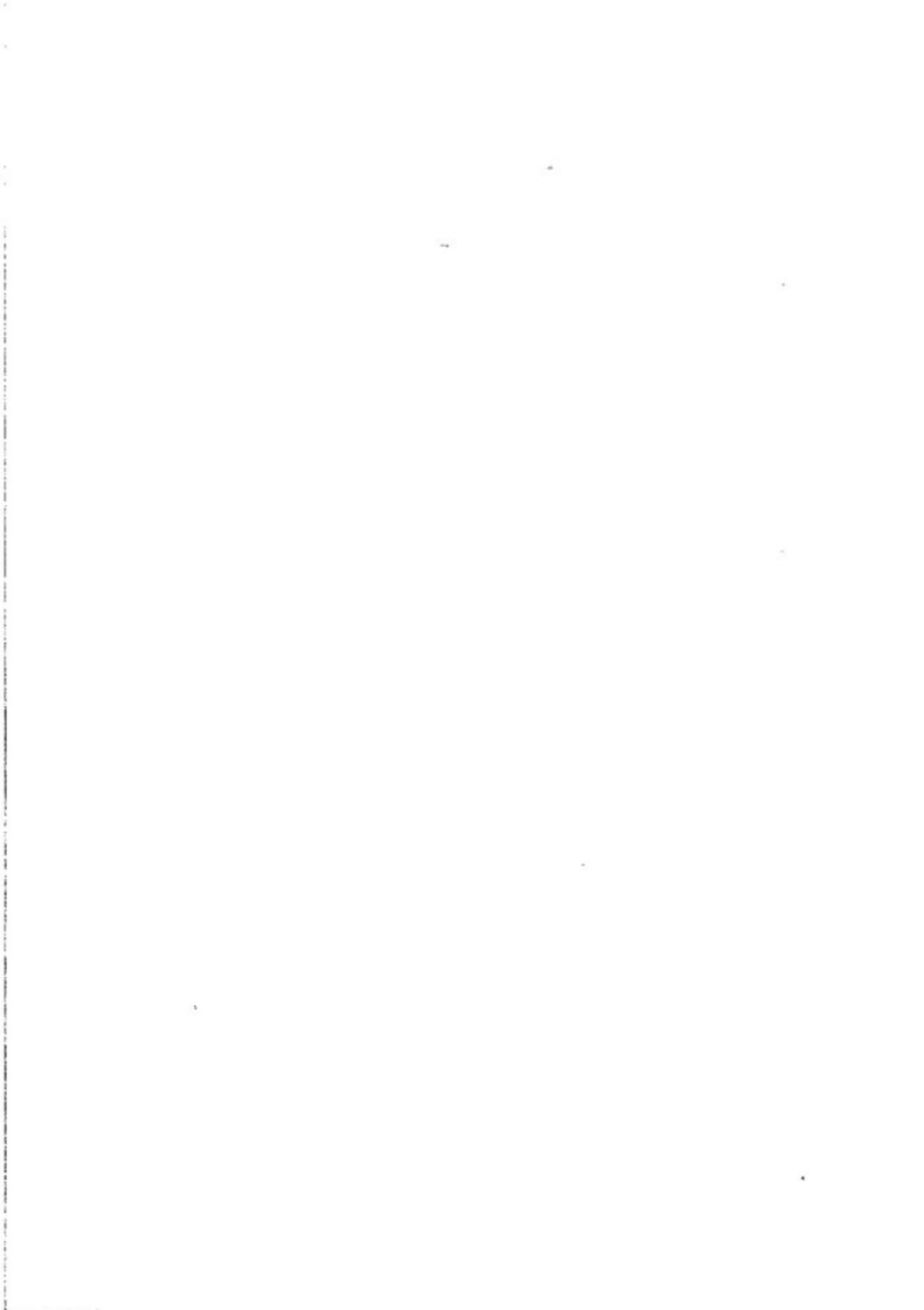
図版第5



1 辻 91 グリッド土塗



2 辻116グリッド～127グリッド土塗及び埋甃出土状況



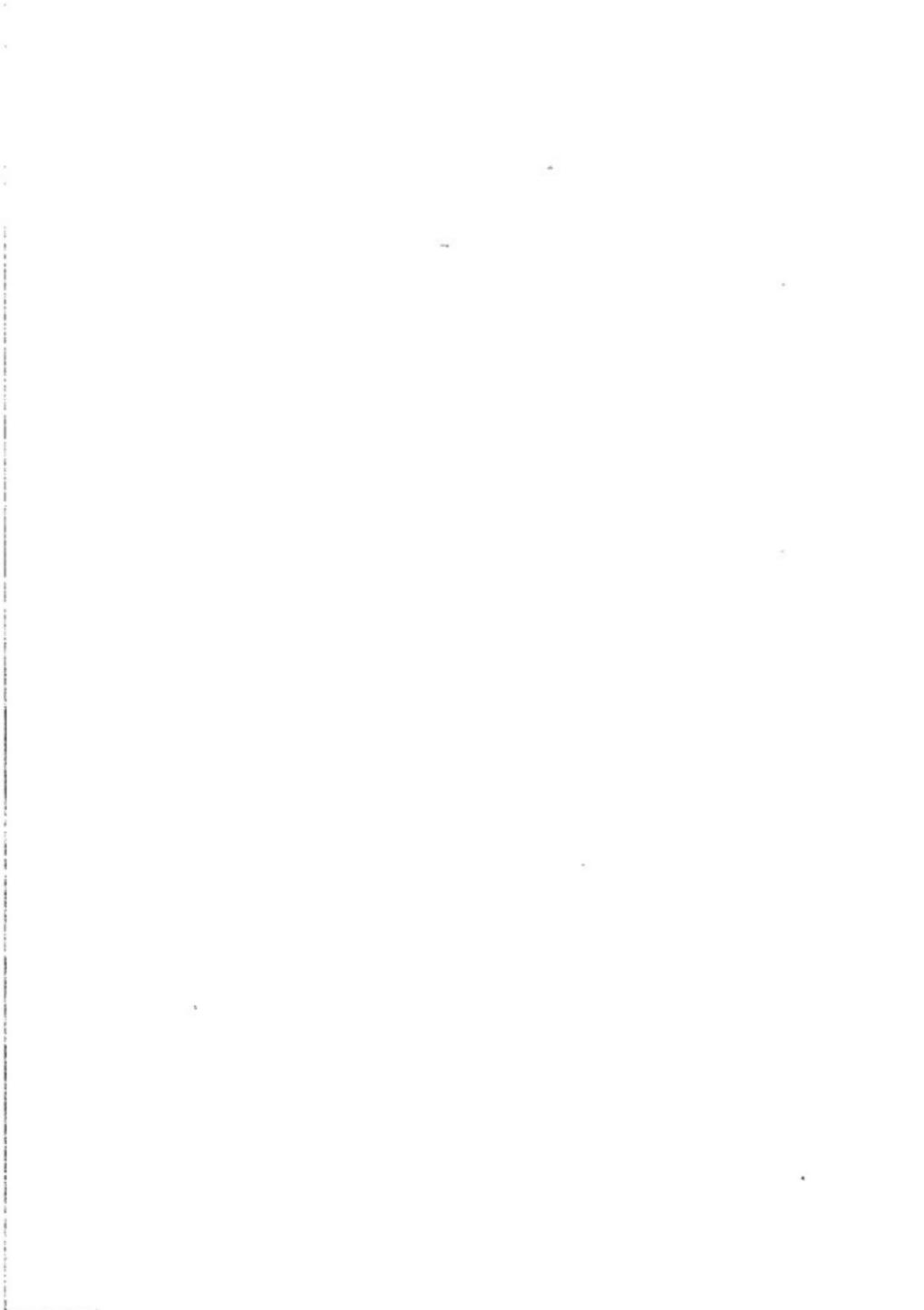
図版第 6



1 辻 116 グリッド土 挿



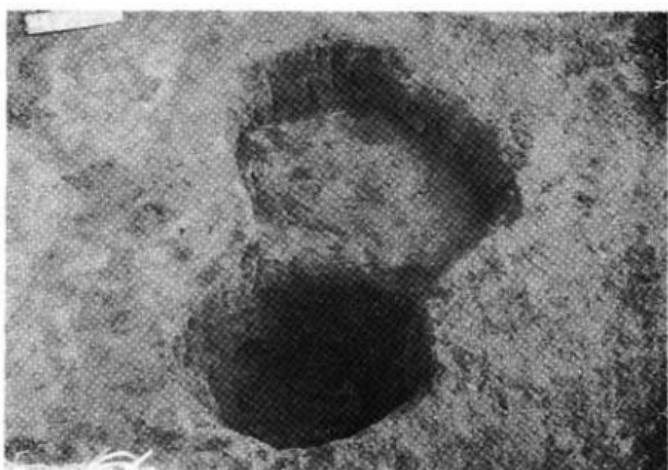
2 辻 126 グリッド土器出土状況



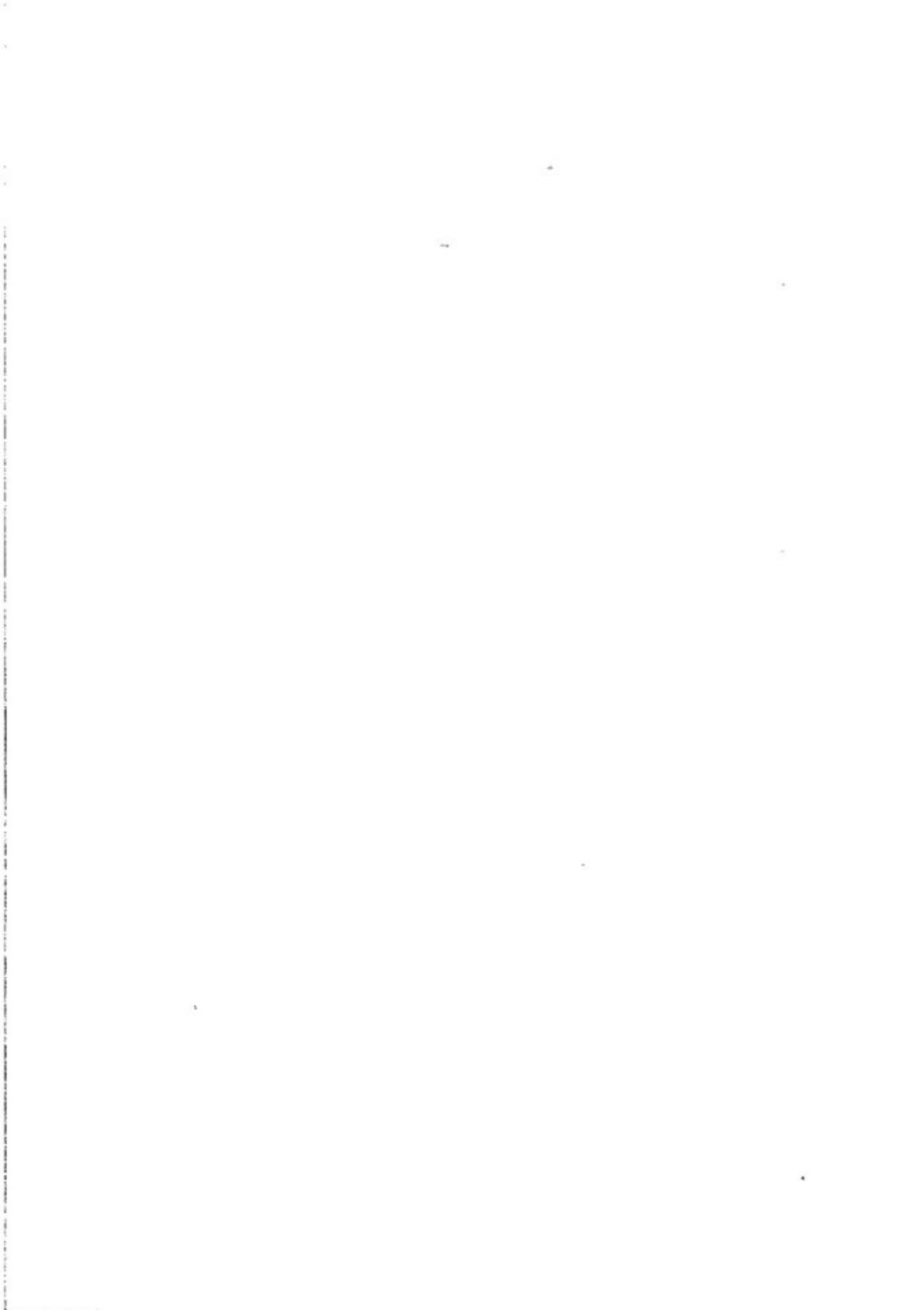
図版第7



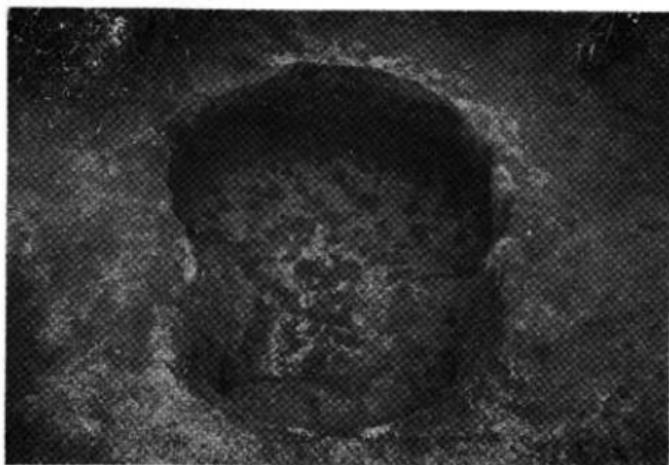
1 辻27・29グリッド土壠



2 辻34の2グリッド土壠



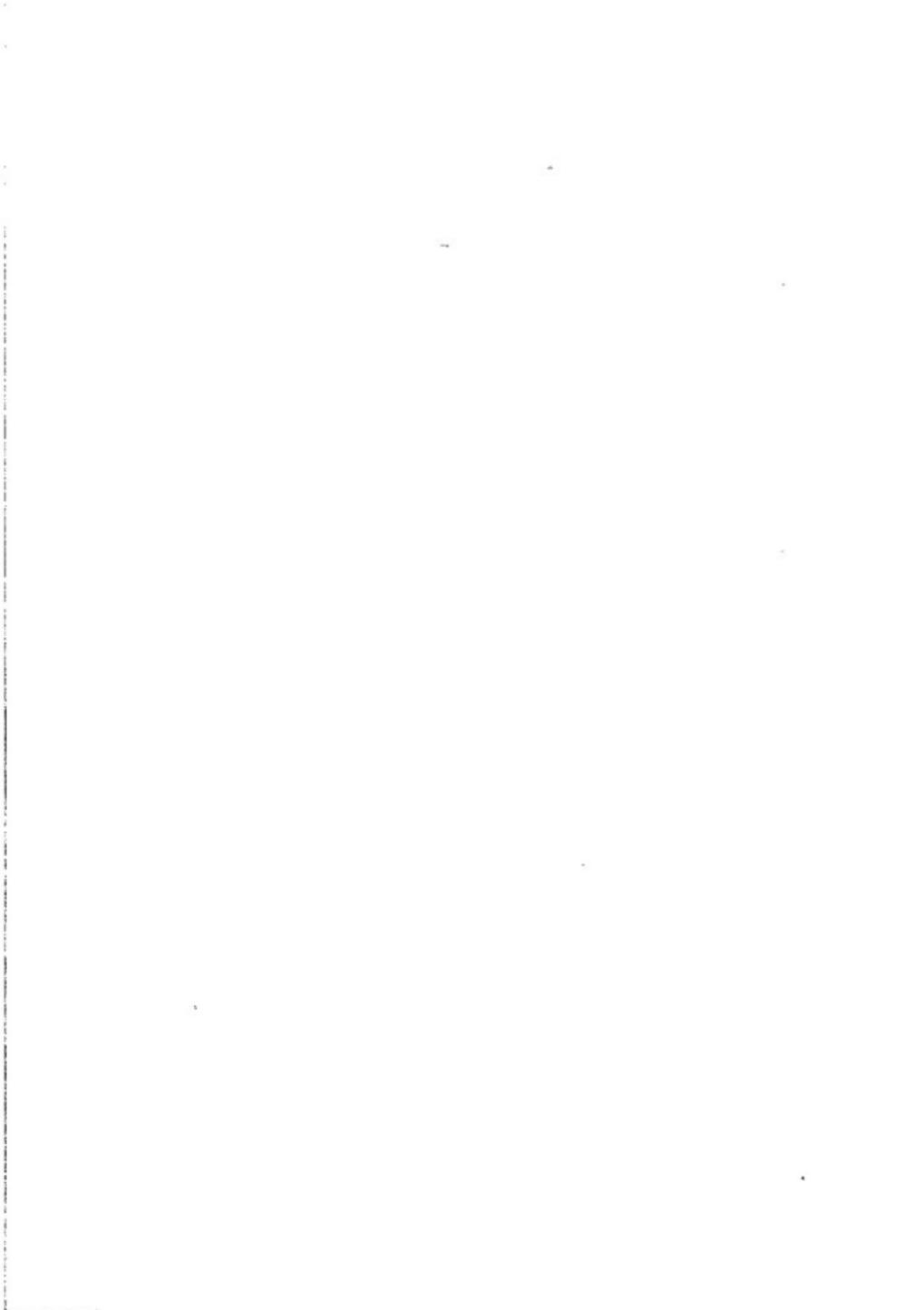
図版第 8



1 辻 6 グリッド土塗



2 辻23グリッド土器出土状況



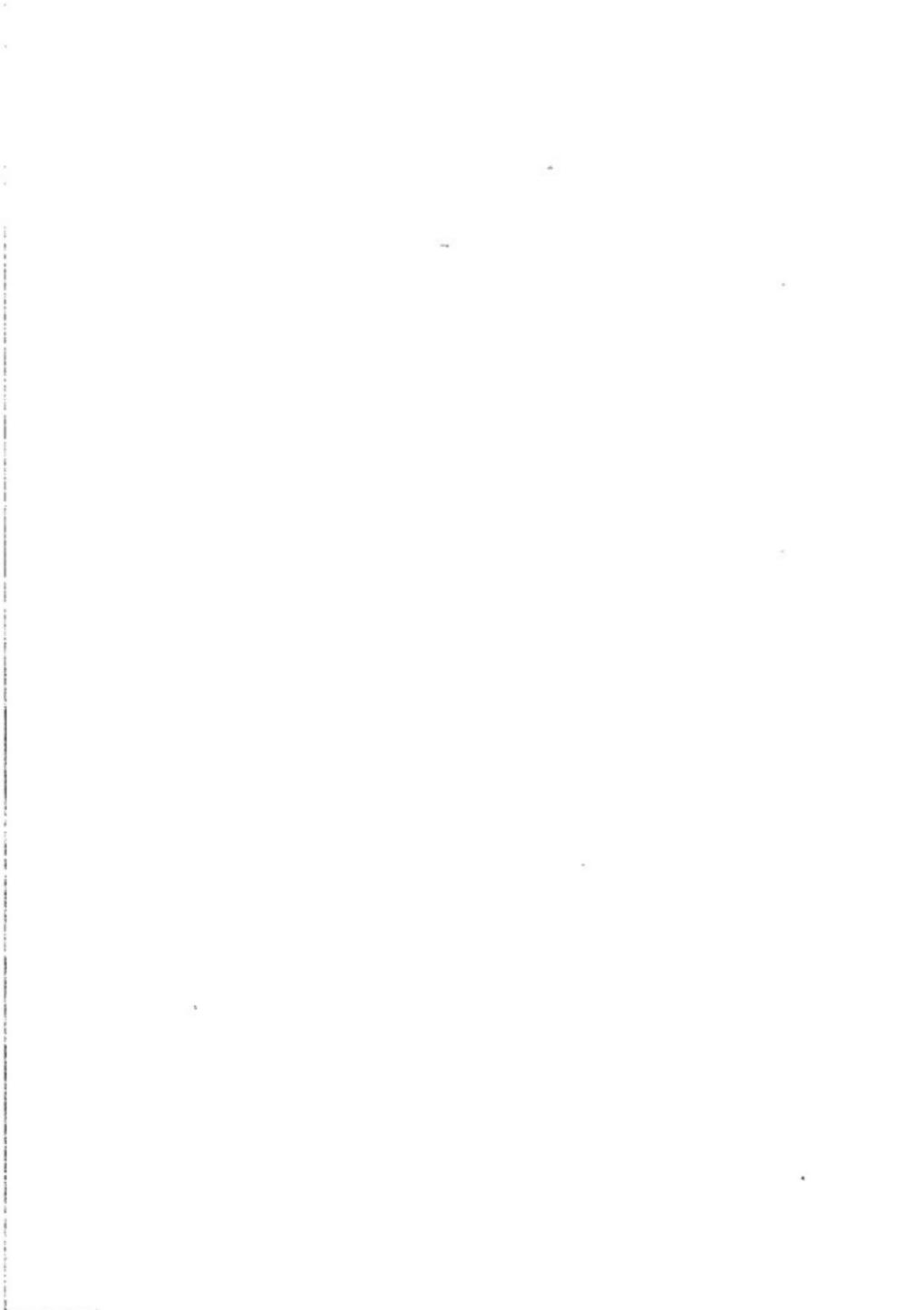
図版第9



1. 辻128グリッド井戸状遺構

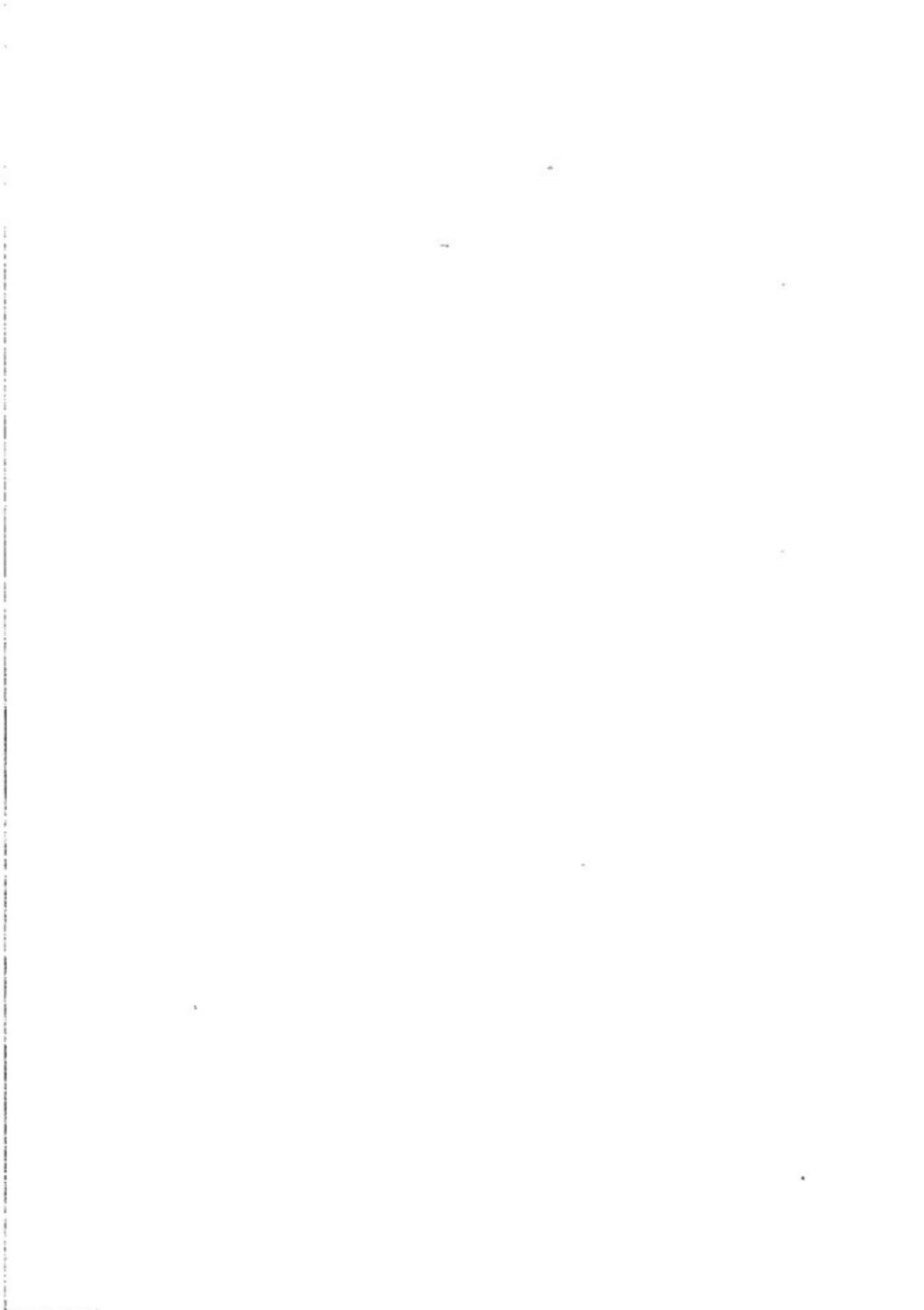


2. 同村墓塗 山寺所有
(辻128グリッド地点より移転とのこと)

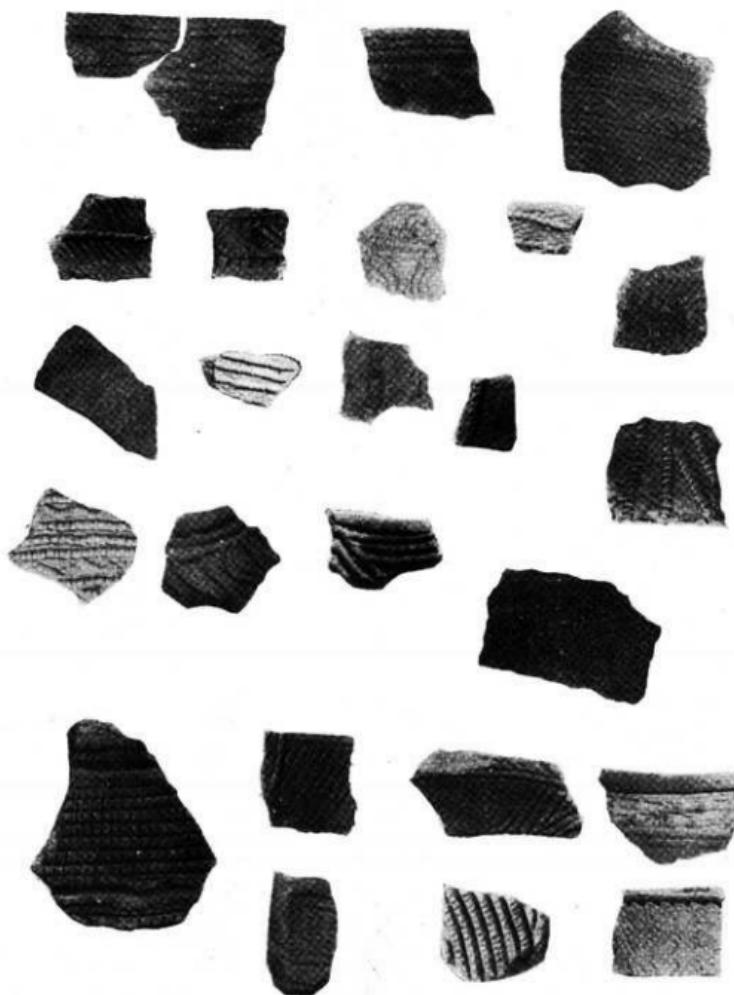


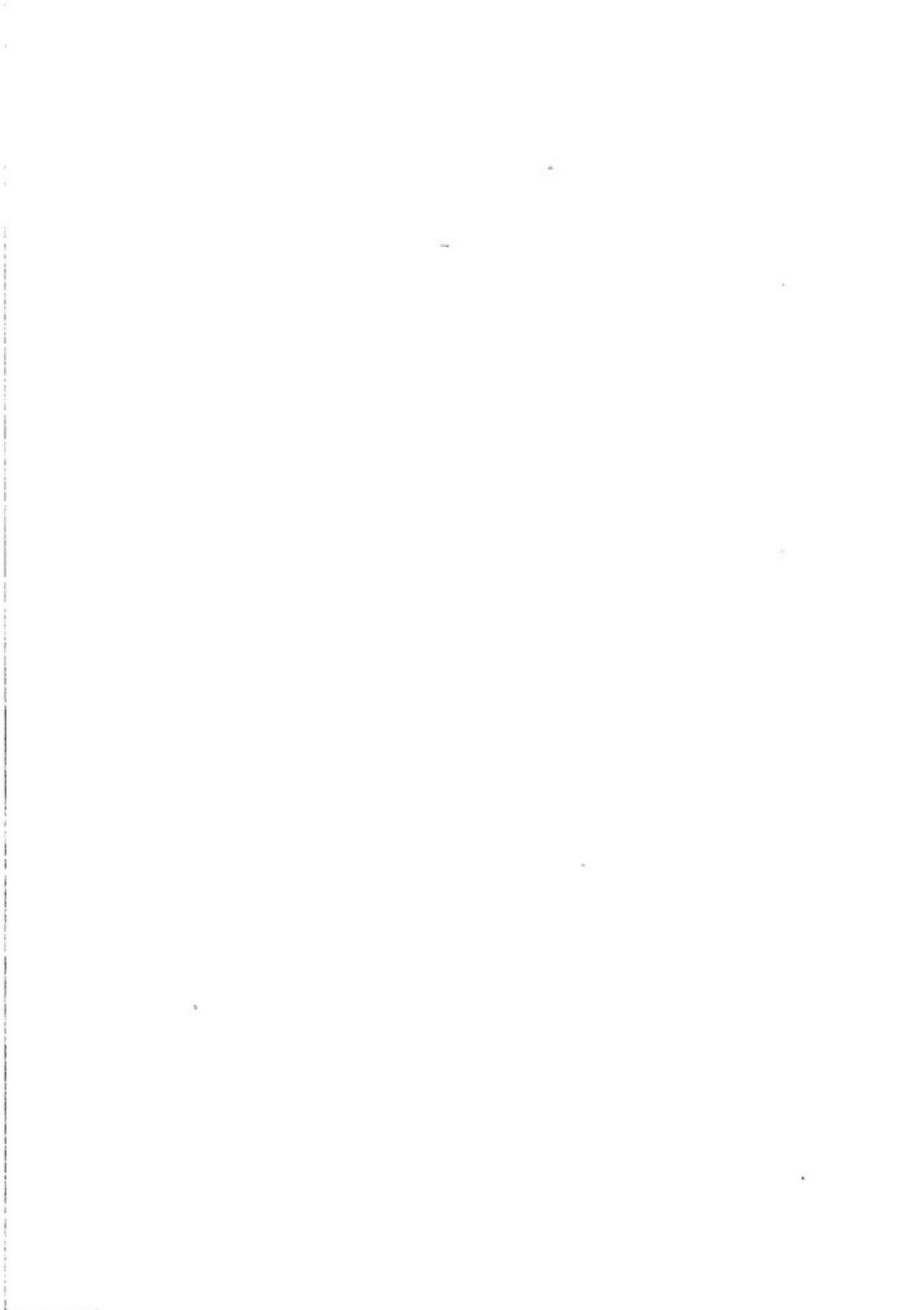
図版第10　辻遺跡出土土器





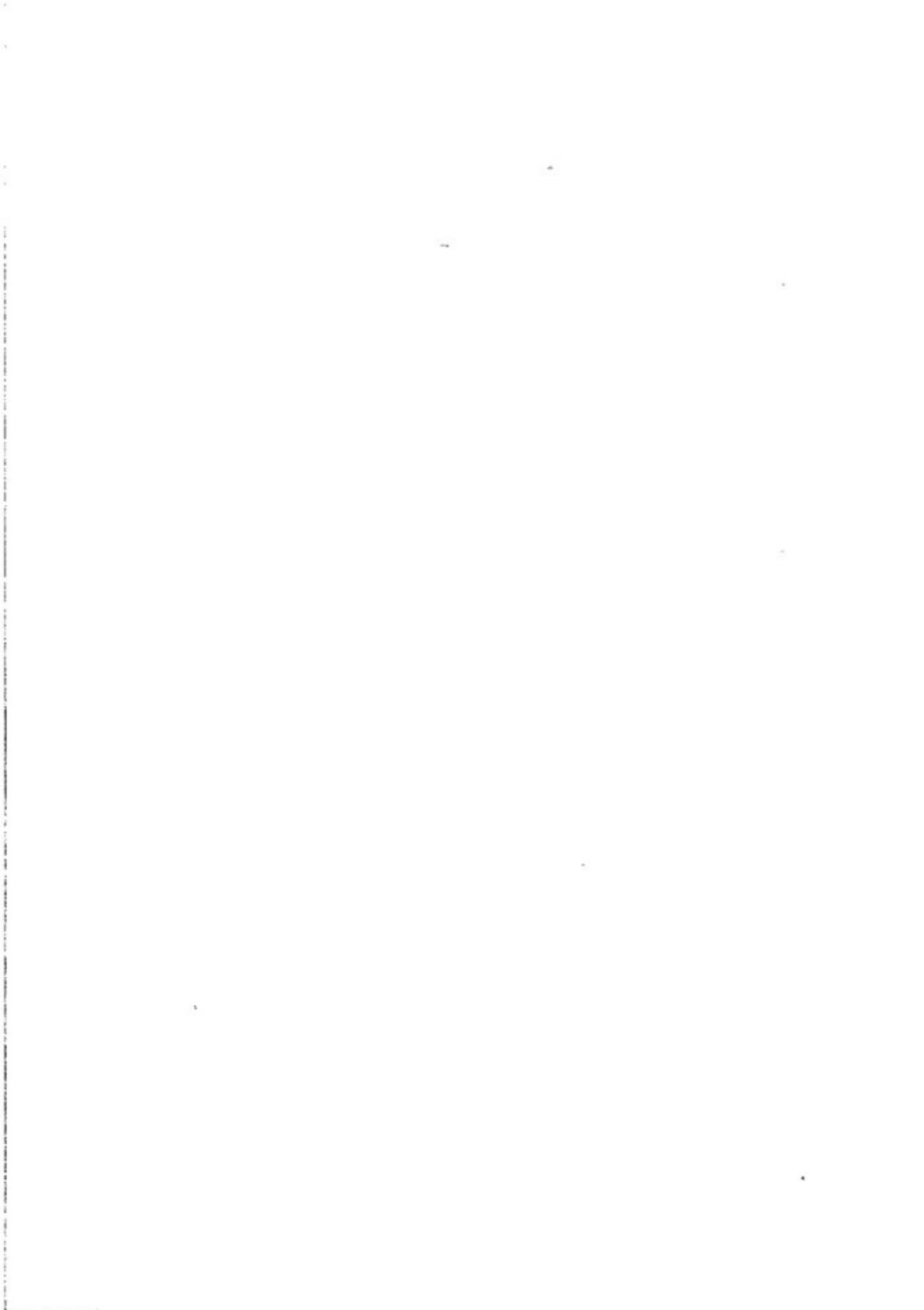
図版第11　辻遺跡出土土器



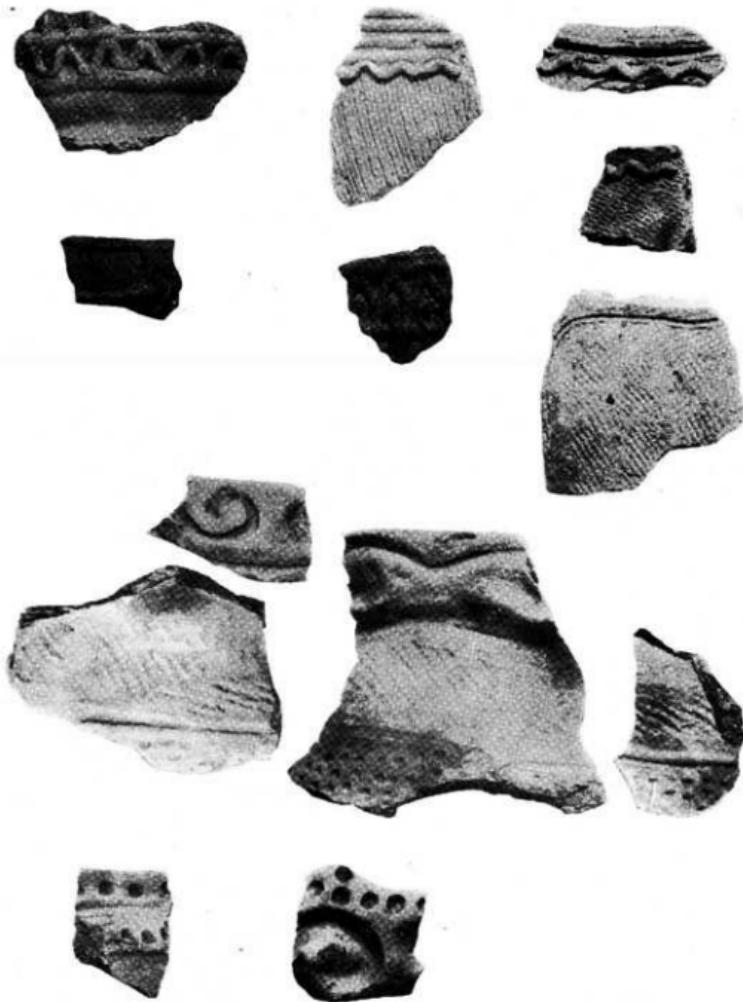


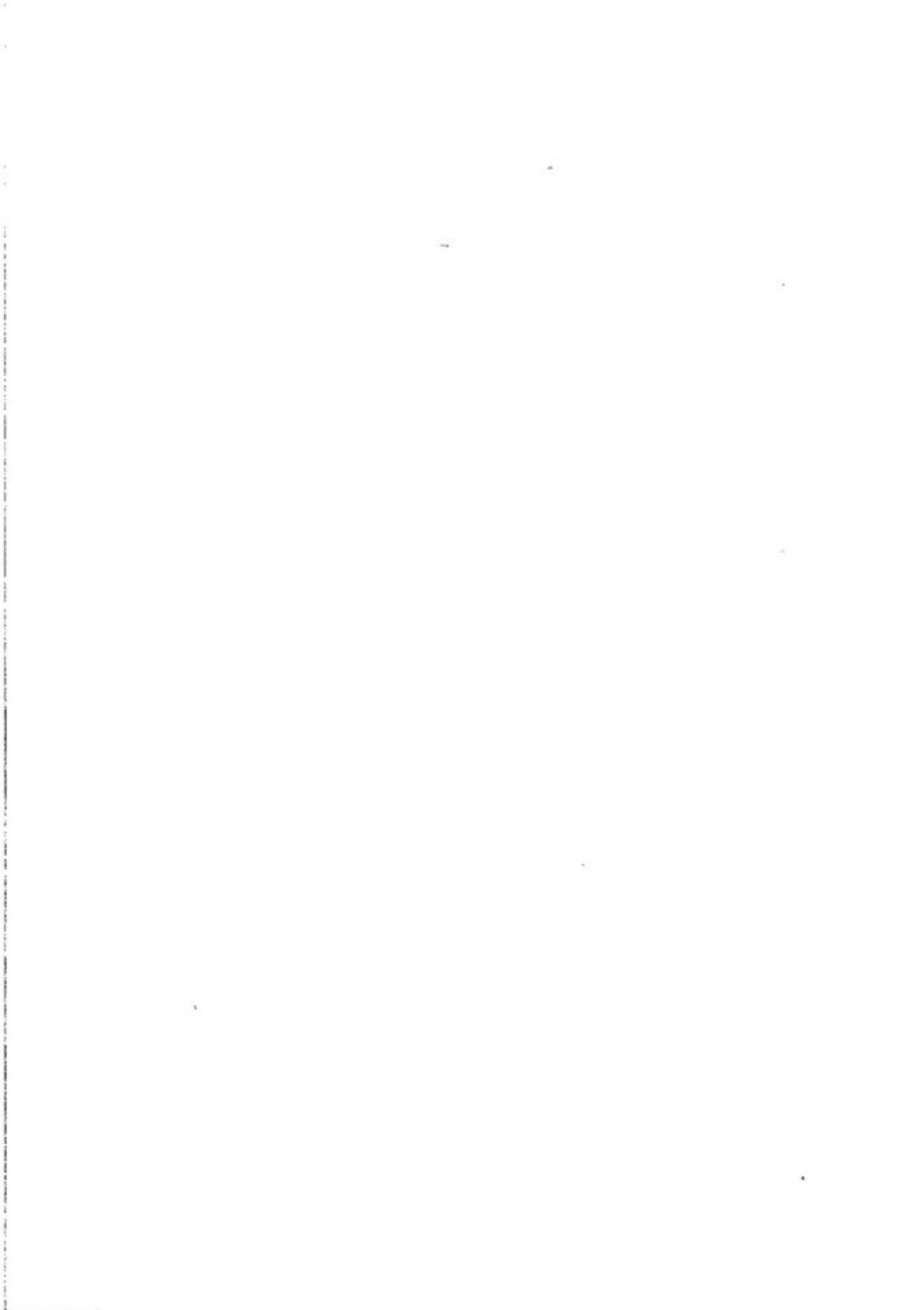
図版第12 辻遺跡出土土器



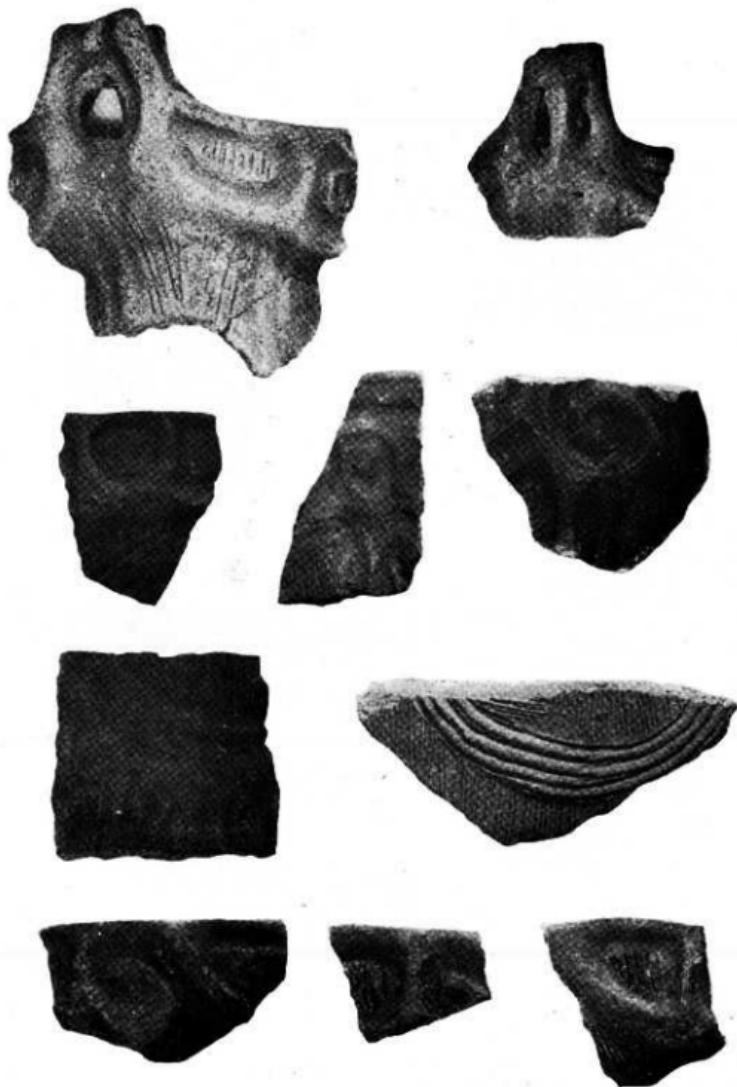


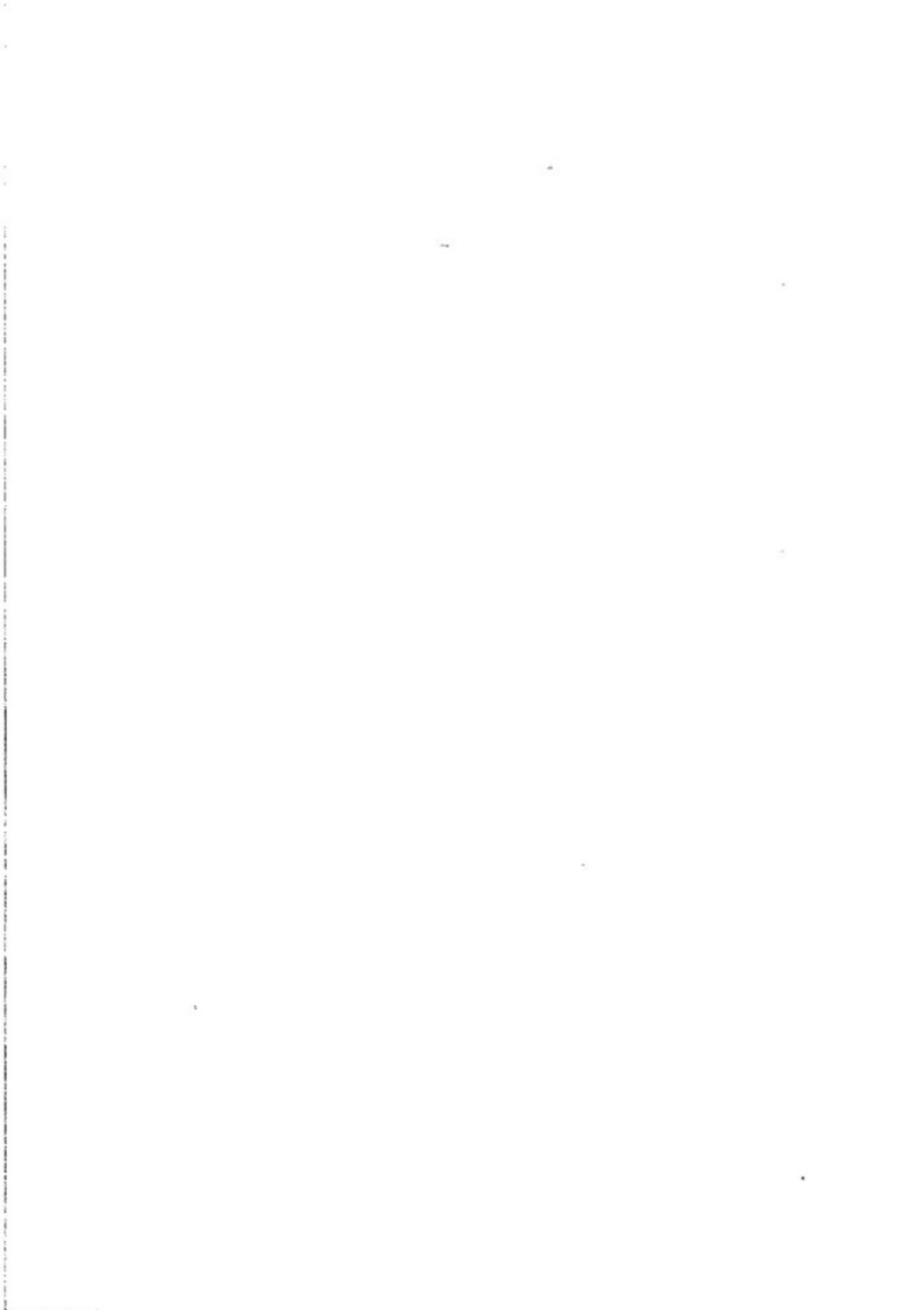
圖版第13 辛遺跡出土土器





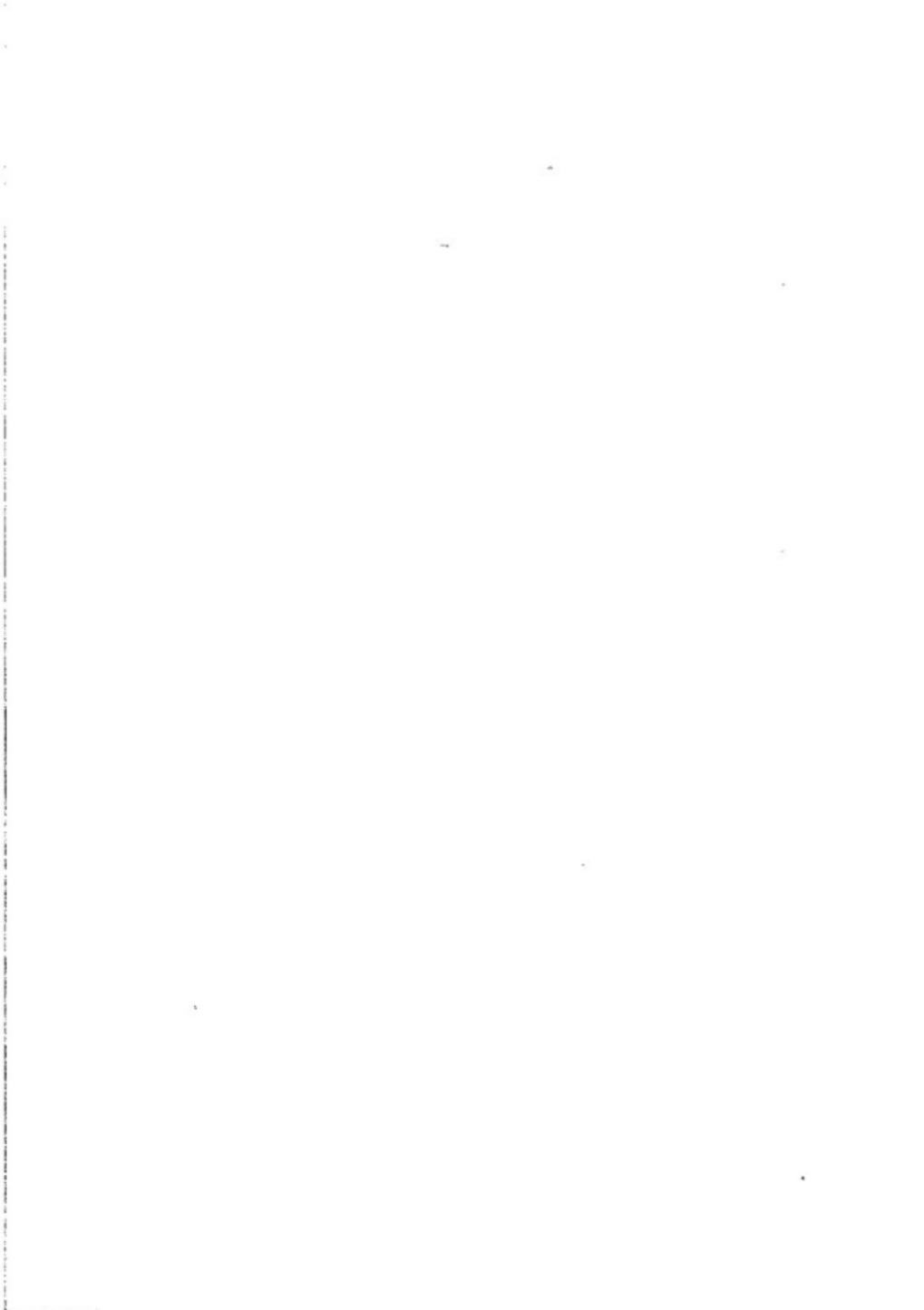
圖版第14 辛遺跡出土土器



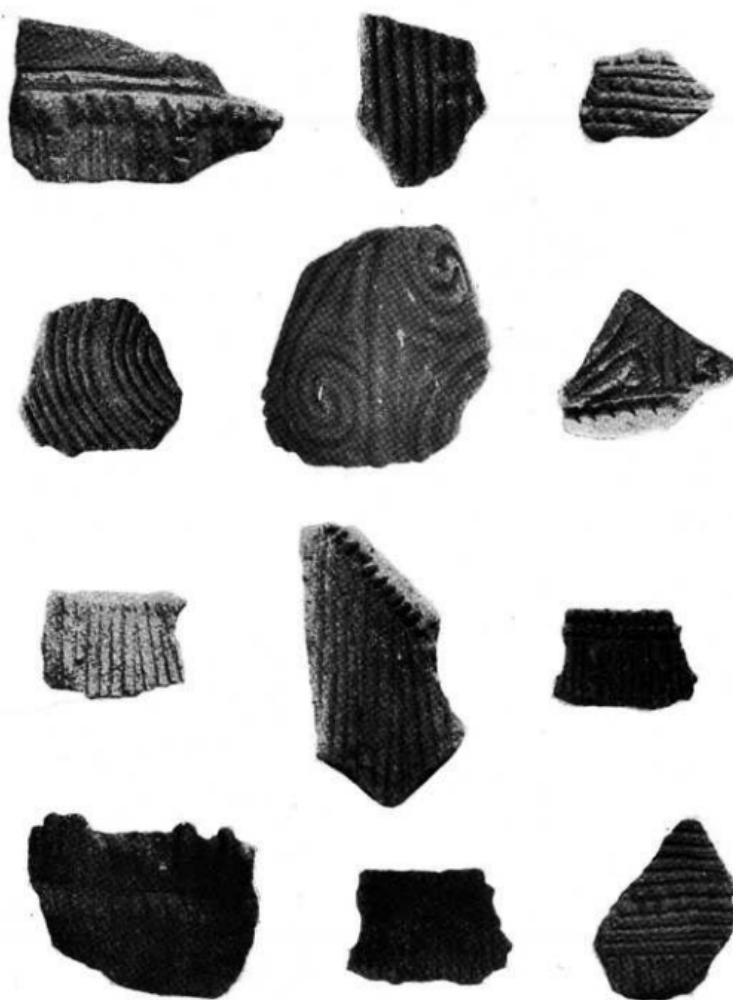


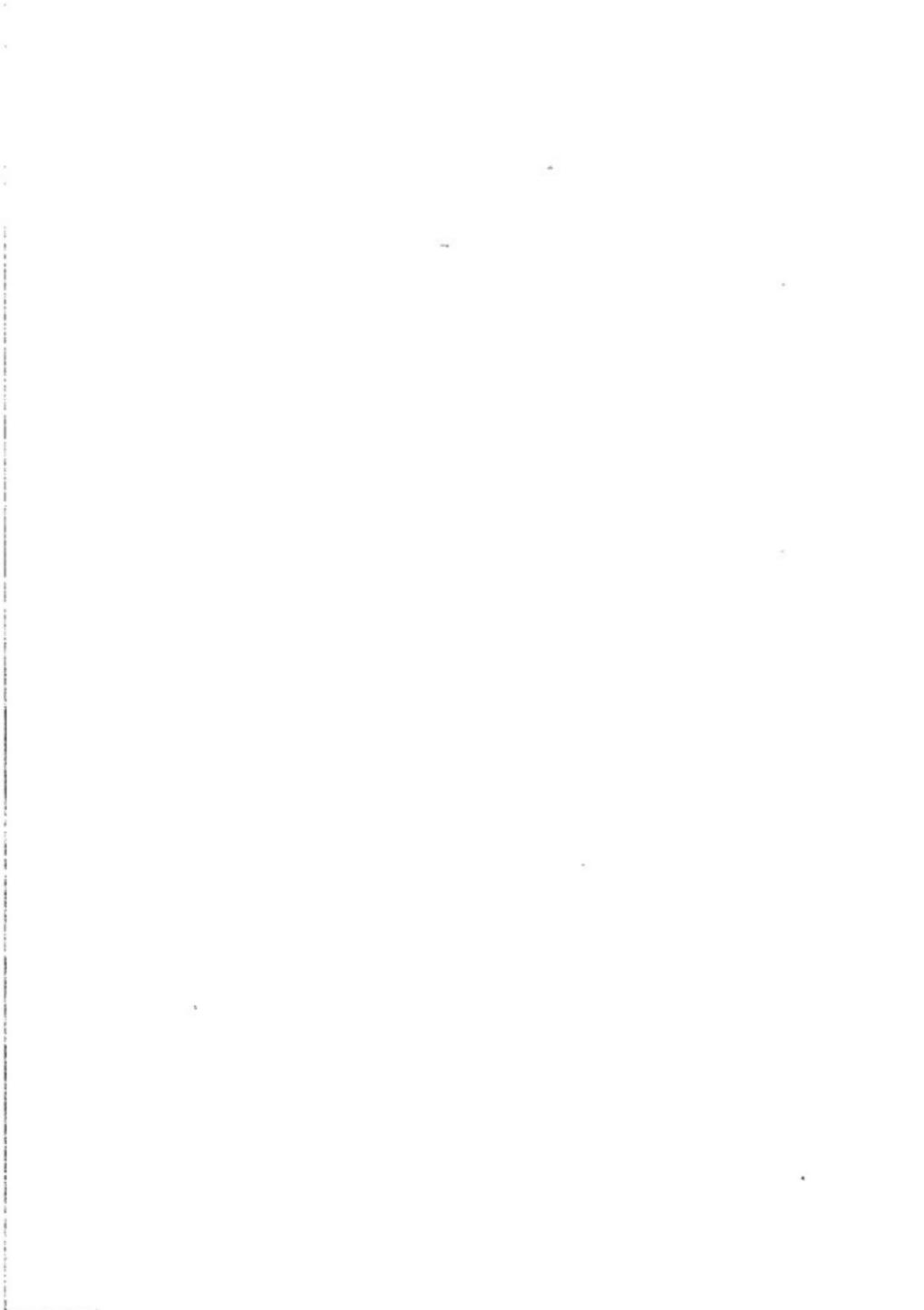
圖版第15 沈遺跡出土土器





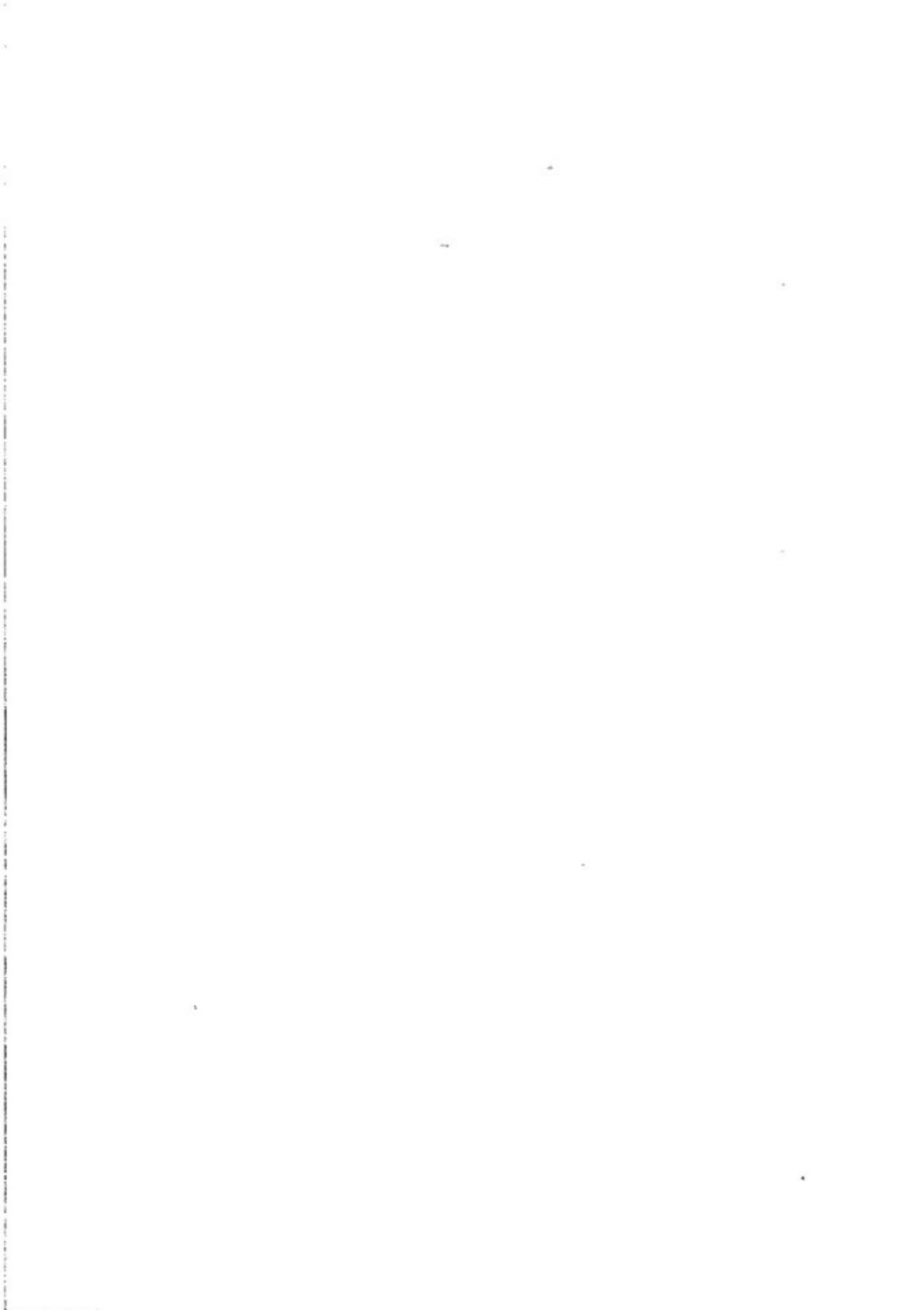
图版第16 辽遗址出土土器



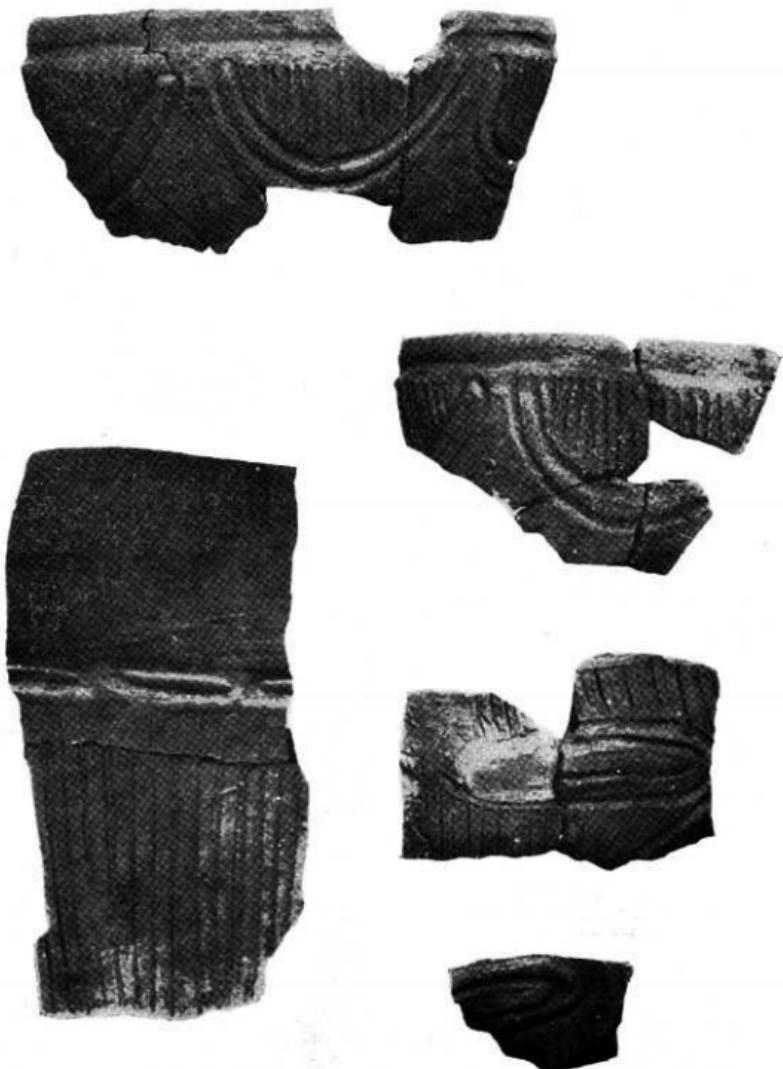


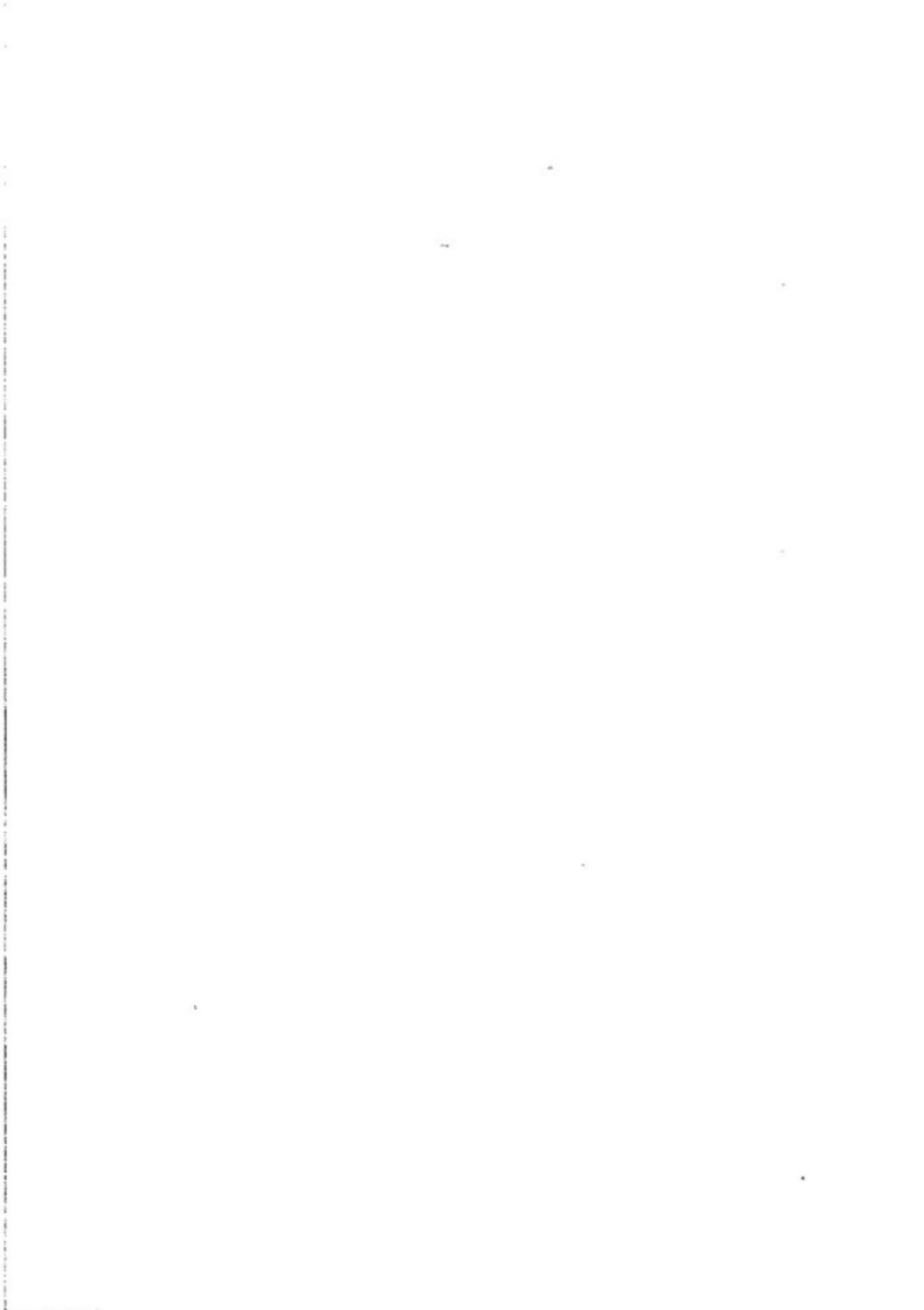
図版第17 辻遺跡出土土器



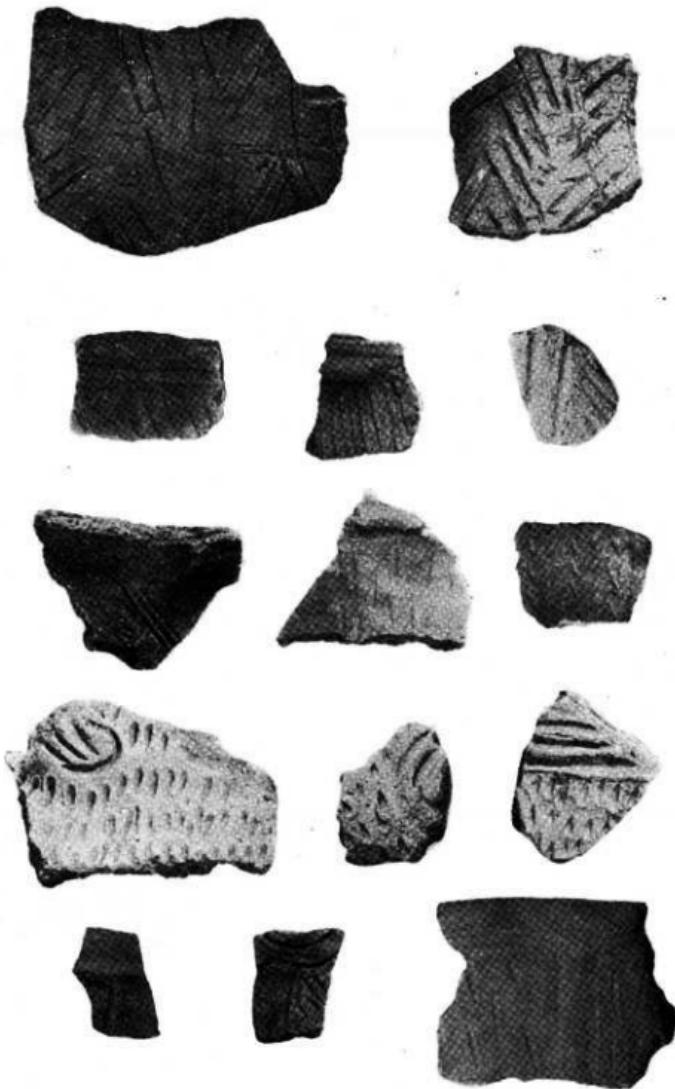


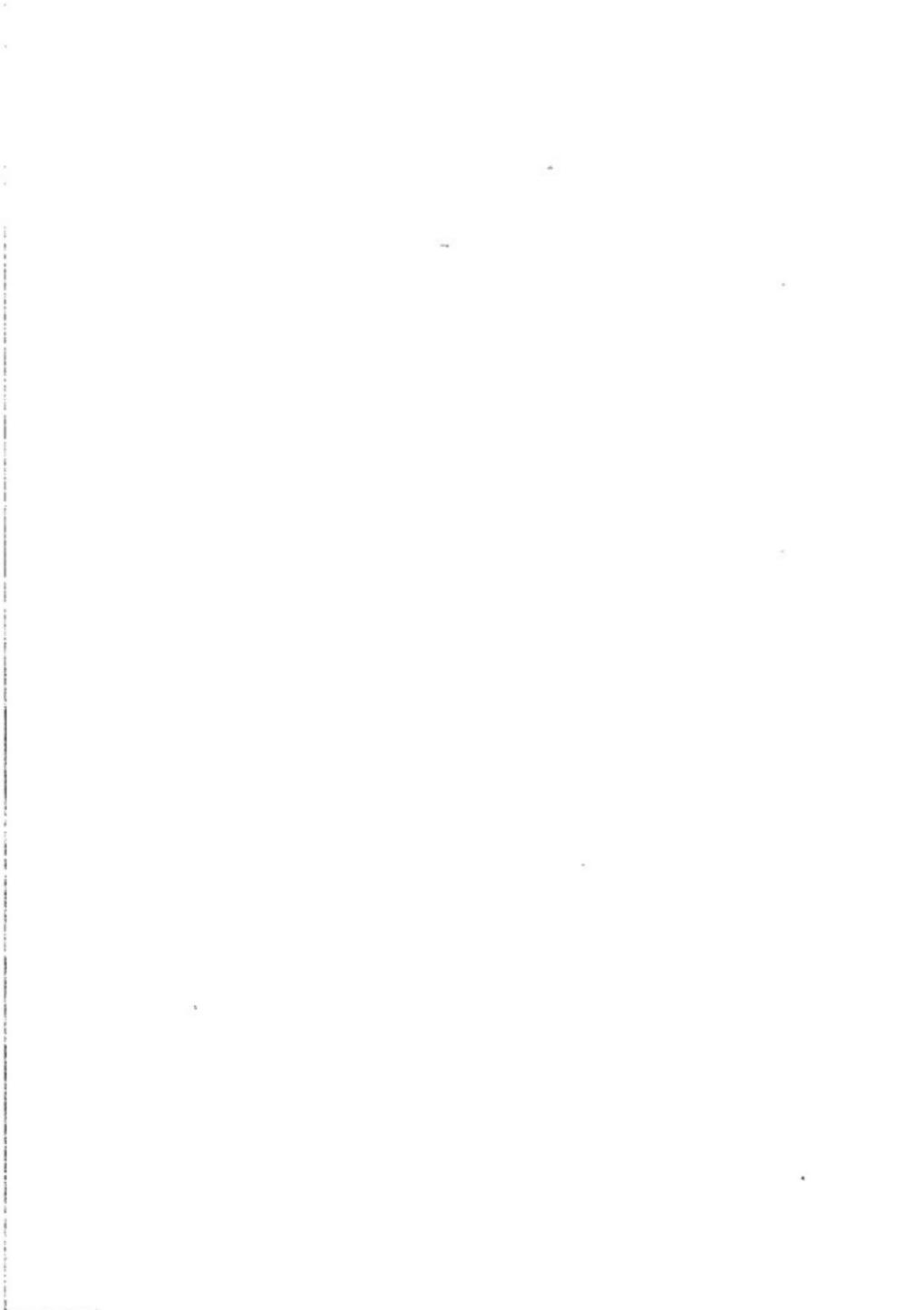
図版第18　辻遺跡出土土器





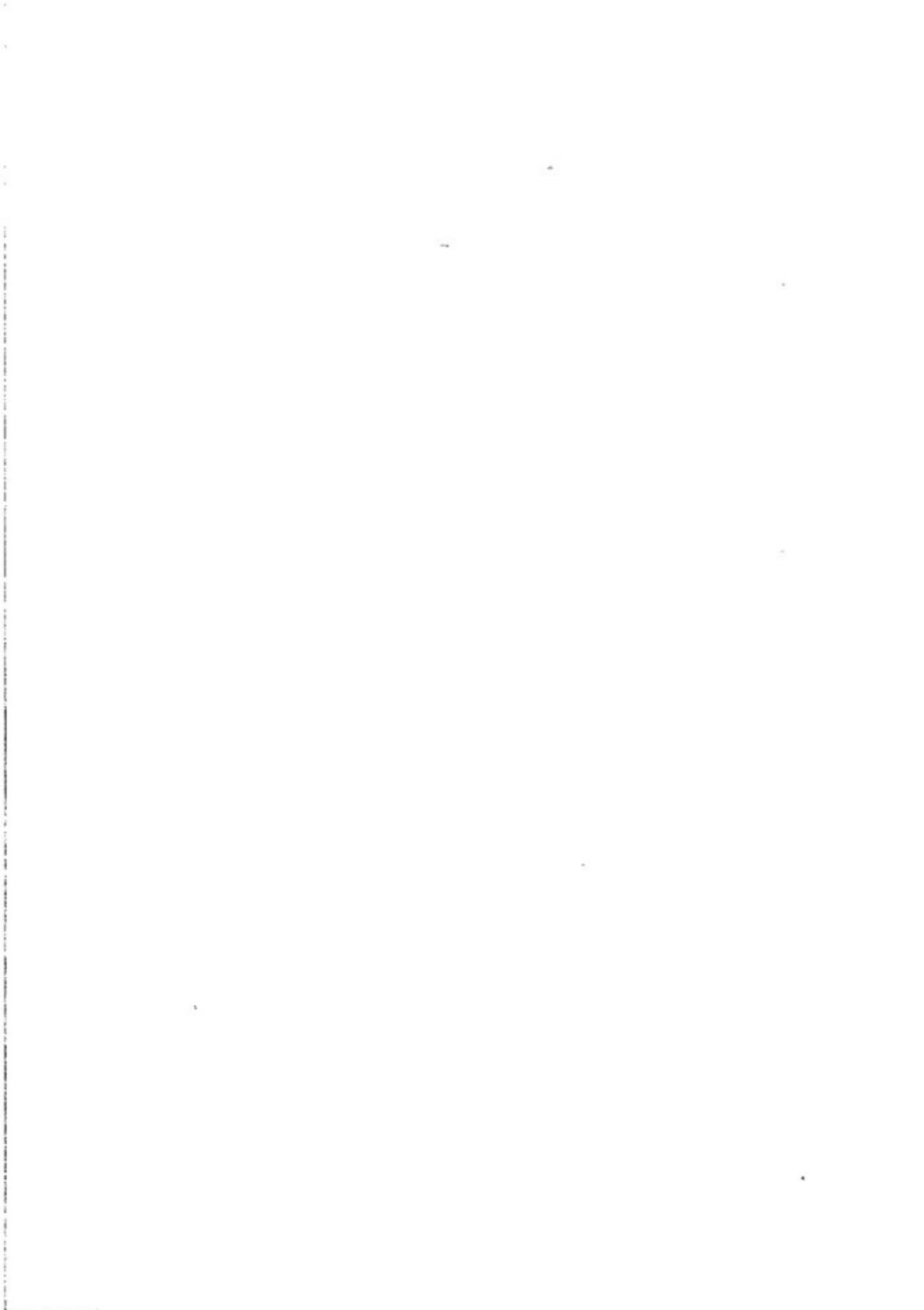
図版第19　辻遺跡出土土器





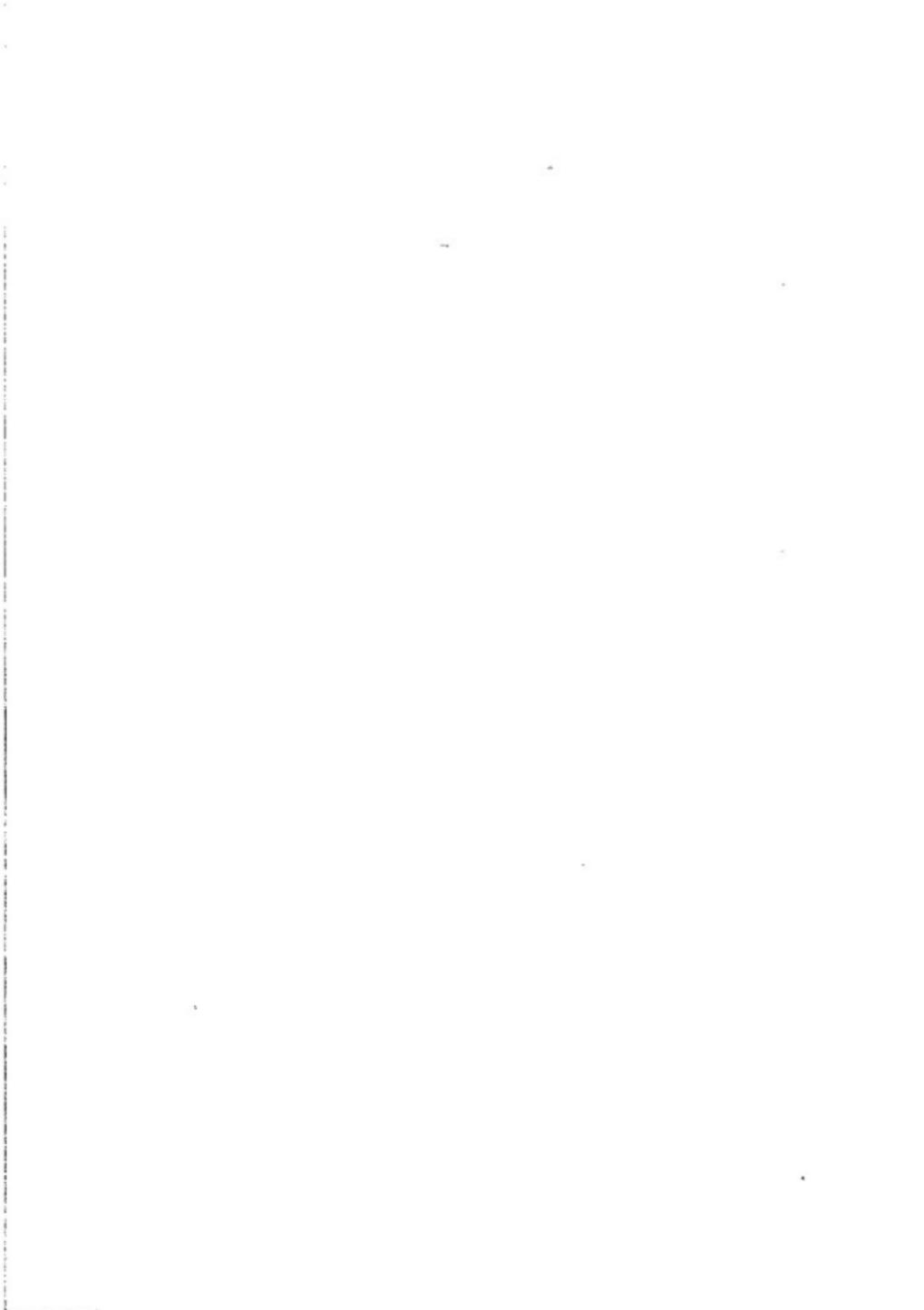
図版第20 辻遺跡出土土器





図版第21 辻遺跡出土石器

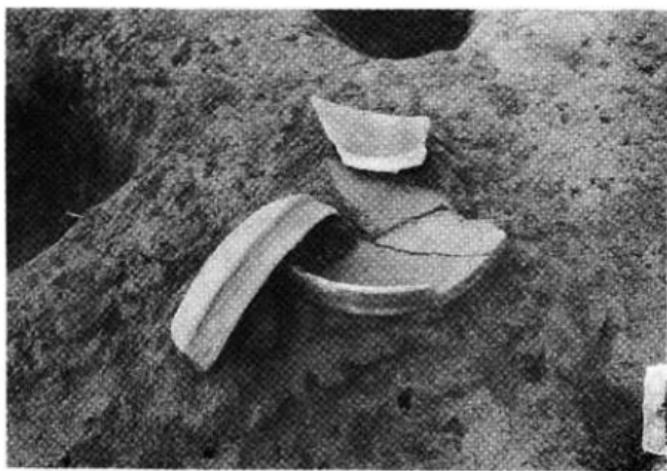




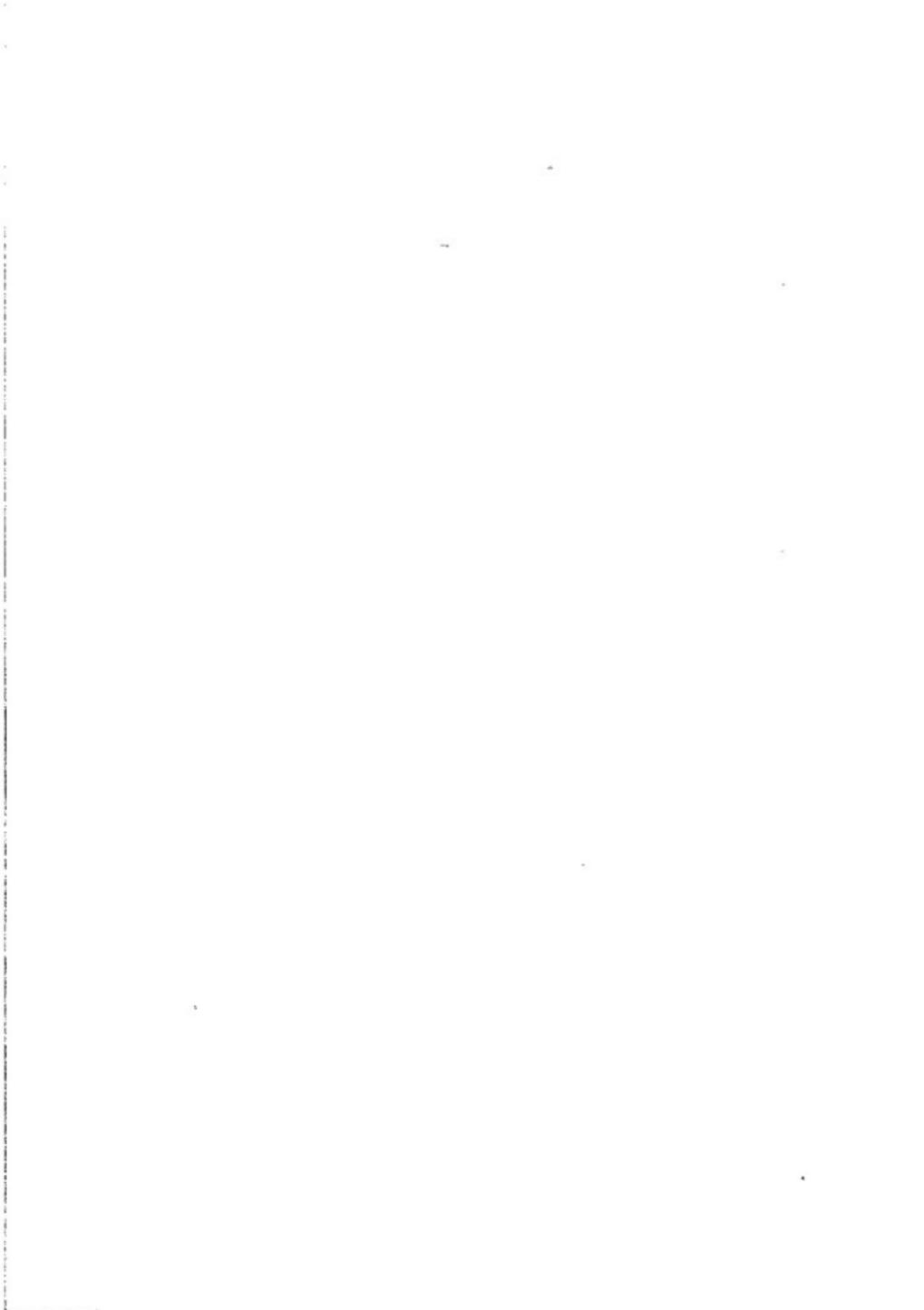
図版第22 薊在家遺跡



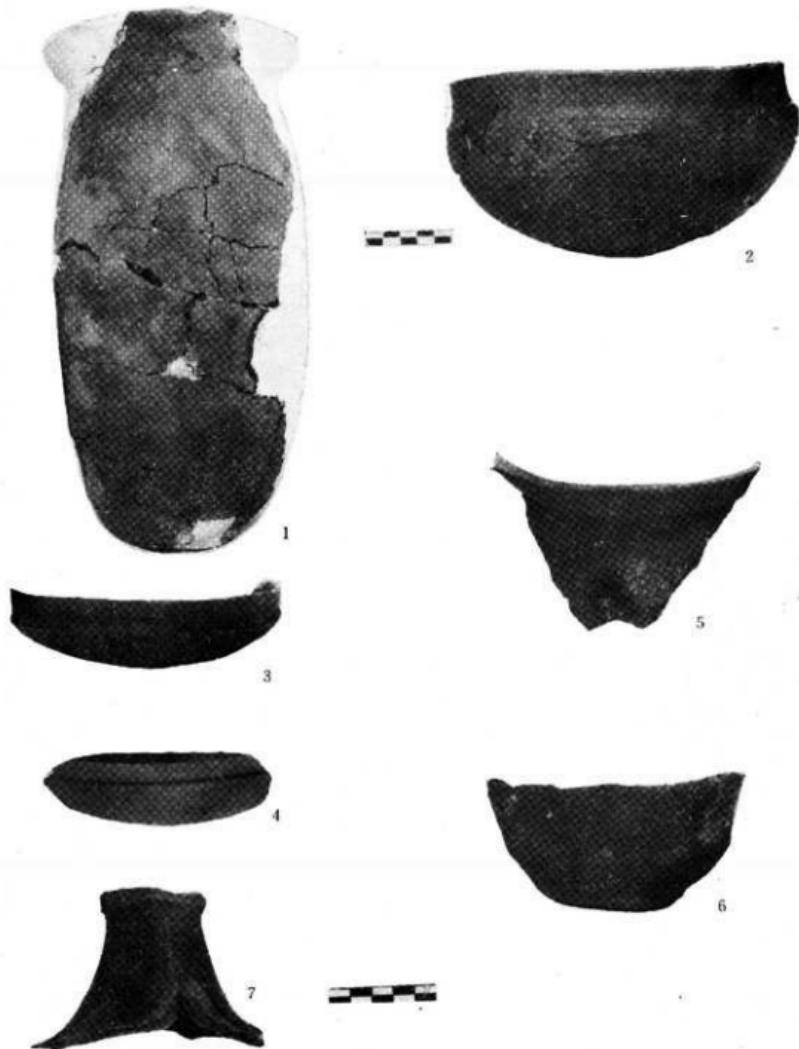
1 薊在家遺跡住居址

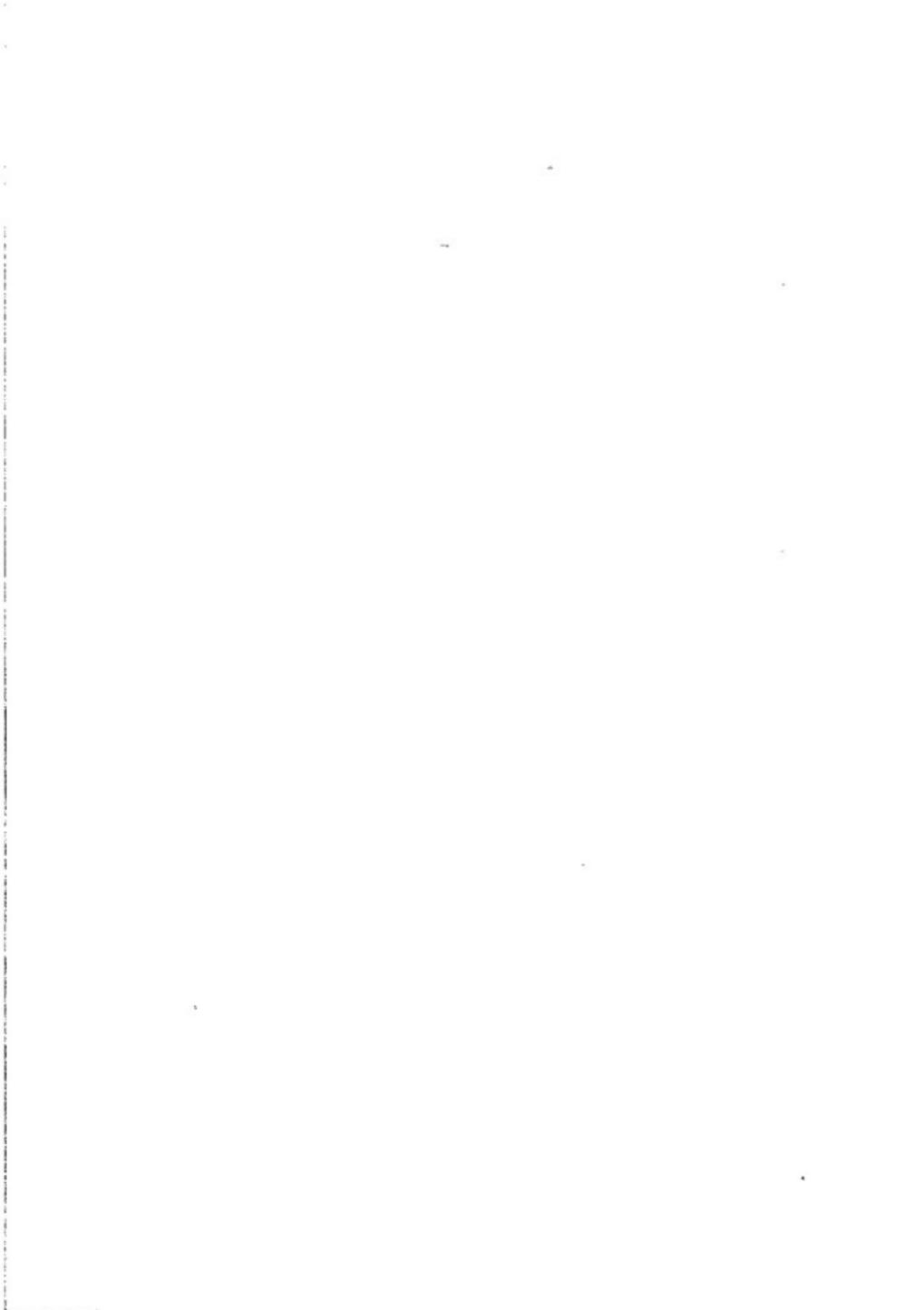


2 同住居址・土師器出土状況



圖版第23 莉在家遺跡住居址出土土器





辻遺跡と薊在家遺跡

金川曾根地区広域沿農団地農道
整備事業に伴う発掘調査報告書

印 備 聖和 49 年 3 月 30 日
発 行 聖和 49 年 3 月 30 日

発 行 山梨県教育委員会
調査 山梨県遺跡調査会
甲府市丸の内一丁目6番1号

印 刷 温故堂印刷株式会社
甲府市若生一丁目7番16号

